

日本への回帰

第25集





大学教官有志協議会

社団法人 国民文化研究会

日本への回帰

(第二十五集)

—第三十四回学生青年合宿教室(島原)の記録より—

は し が き

ペレストロイカ（改革）といふロシヤ語が今や世界政治の動向を解くキー・ワードとなつた。GNPの二〇%前後と推定される膨大な軍事費と、硬直した計画経済によつてもたらされた破局的経済危機、この袋小路を脱出するためには西側の資金と技術の導入は不可欠である。その窮余の一策だつたといへる。ソビエト体制の中核である憲法第六条の「党の指導的役割」をいづれは削除せざるを得ないとところまで状況は切迫してゐる。かういふ現状が、長い間ソビエトの軍事力とイデオロギーの輓に呻吟して来た東欧諸国に影響を及ぼさぬ筈はない。昨年秋から年末にかけての、民主化へのドミノ現象は、まことに戦後世界政治史における瞠目すべき大事件であつた。

変革の動きは、九月、ポーランドにおける自主労組「連帯」主導内閣の発足によつて始まつた。続いて十月には、ハンガリー社会主義労働者党が共産主義を放棄して社会党となり、国名を「ハンガリー人民共和国」から「ハンガリー共和国」へ変更した。一九五六年のハンガリー動乱がソビエトの大戦車群に鎮圧されてから三十三年目である。続いて、住民の西側への大量脱出が続いてゐた東独で、ホーネッカー議長が辞任に迫り込まれ、十一月九日、東

西対立の象徴であつたベルリンの壁が消滅した。この第一報が西独国会に入つた時、審議が一時中断され、与野党の議員は一斉に起立して、「祖国ドイツに統一と正義と自由を」に始まる国歌の大合唱になつた。聞くだにまなこうるむ劇的事件であつた。十一月に入ると、ブルガリアを三十五年間支配したジフコフ体制が崩壊した。チェコでは各地に広がつてゐた反政府デモが、首都では二十万人にふくれ上り、ヤケシユ書記長は退陣した。一九六八年、人間の顔をした社会主義を標榜し、「プラハの春」といはれた自由化の動きは、ワルシャワ条約機構の戦車軍団に無残に蹂躪された。その軍事介入は誤りだつたとゴルバチョフは自己批判をした。当時の指導者ドブチェクの復権が報じられてゐる。最後まで頑強に改革を拒み続けたルーマニアは六万市民の流血の犠牲の上に、辛うじて自由化への道を開いた。十二月中旬の反政府デモの暴発から、チャウセスク体制の崩壊、大統領夫妻の処刑まで、十日余りの衝撃的展開となつた。国号から「社会主義共和国」が削られてルーマニアとなつた。中国と北朝鮮の孤立化は益々深まつてゆくだらう。

十二月二日、マルタ島における米ソ首脳会談は、超大国による世界の分割支配、いはゆるヤルタ体制の終焉を告げた。情報や経済の面で、国境を越えた普遍化の現象が広がつてゆく一方で、各国はそれぞれに固有な体制と哲学の選択を迫られてゐる。ひるがへつて国内事情に眼を転ずると、あふれ返る物と金の蔭に、荒涼たる風景が広がつてゐる。諒闇の年である

にもかかはらず、政界には汚職やスキャンダルが続発した。保守すべき哲学を失つた自民党は、利権集団に墮してしまつた。敵失に乗じた社会党は、参院で議席数を伸ばしたものの、現行規約前文冒頭には「社会主義革命を達成し」とか、「労働者階級を中核とし」とかいふ文言が明記されてをり、紛れもなくマルキシズムを基盤とする階級政党である。政界の底流は、東欧の自由化とは逆方向に動いてゐる。保守の墮落、革新の偽善、緊張を失つた民族は、今や再生か没落かの岐路に立つてゐるといつても過言ではない。

本年秋には第百二十五代今上天皇の、即位の大札と大嘗祭が行はれる。践祚、改元に続く皇位継承儀礼の最後の重儀であり、民族の再生はこれらの重儀の齋行に賭けられてゐる。特に憲法の政教分離条項をテコとして、大嘗祭を「皇室の私的行事」とする言論とは容赦ない戦ひを覚悟すべきであらう。今必要なことは、三島由紀夫氏が言はれた「文化にとつて最も大切な秩序と、政治にとつて最も緊要な変革とを、つねに内包し保証したナショナルな歴史表象」としての天皇の御存在の確認であらう。終りに貴重な御講義について心こもる御加筆をいただいた村松剛先生に心から御礼申し上げる次第である。

平成二年一月八日

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき

講義

第一日（八月五日）

現代のタブーの克服—自由闊達な学問のために—日産自動車働勤務

奈良崎 修二…………… 3

第二日（八月六日）

『古事記』と高校『日本史』…………… 神奈川県立深沢高校教諭

国武 忠彦…………… 25

昭和の精神—「悲劇」の時代…………… 九州女子大学教授

山田 輝彦…………… 49

「明治の精神」の一断面

—福島安正、郡司成忠と樋口一葉—九州造形短期大学教授

小柳 陽太郎…………… 73

第三日（八月七日）

天皇と日本国家…………… 筑波大学教授・文芸評論家

村松 剛…………… 99

第四日（八月八日）

これからの日本と日本人について…………… 国民文化研究会理事長

小田村 寅二郎…………… 135

『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』輪讀の導として

福岡・浜の町病院内科医師 長澤 一成…………… 157

若き友らへ語りかける言葉―知識と学問―国民文化研究会常務理事 長内俊平……………177

第五日（八月九日）

昭和天皇の最後のお歌……………亜細亜大学名誉教授 夜久正雄……………199

短歌入門

短歌創作導入講義……………福岡県立山田高校教諭 與島誠央……………213

創作短歌全体批評……………九州大学医学部循環器内科医師 小柳左門……………231

青年の言葉

沈黙するところから言葉が生まれてくる……………日本真空技術（株）勤務 北浜道士……………253

社会生活の体験から……………北九州市立八幡病院放射線技師 森田仁……………261

一年の歩み……………中央大学文学部四年 三林浩行……………269

合宿教室のあらまし……………西南学院大学経済学部四年 西山博章……………279

合宿詠草…………………………305

あとがき



講

義

現代のタブーの克服

—自由闊達な学問のために—

日産自動車(株)勤務

奈良崎 修
二



紫宸殿

私達の学問の現状

現代のタブー

東京裁判史観について

歴史の断絶

昭和天皇のこと

歴史の学び方

私達の学問の現状

今晚は。ご紹介頂きました奈良崎です。

初めに私の学生時代の思ひ出からお話したいと思ひます。先程司会の方からご紹介がありました。私が入つた九州大学に「信和会」といふ読書会がありました。私はそこである先輩と知り合ひました。その人は専攻は建築だったのでが大変な読書家でした。文学や歴史や思想、哲学など色々な本を読んでゐて自分が読んだ本のことを一所懸命私に話してくれました。この作家はこんな事を言つてゐる、この本にはかういふ事が書いてある、とどんどん私に突きつけて来ました。私はその先輩の何かを求め、心の躍動、読書に向かふ迫力、さういふものに大変魅かれてゆきました。

その先輩との付き合ひの中で知り得た言葉に次の様なものがありました。

「其ノ警歎ヲ承クルガ如ク、其ノ肺腑ヲ視ルガ如ク、手ノ之ヲ舞ヒ、足ノ之ヲ踏ムコトヲ知ラズ」

これは江戸時代の儒学者、伊藤仁斎の『語孟字義』といふ書の中の言葉です。「語」とは『論語』、「孟」とは『孟子』の事です。この書は仁斎が孔子、孟子の思想を研究した書なの

です。右の文章中「警欬ヲ承ク」とは肉声を聞くといふ事、「肺腑」とははらわたの事です。つまり仁斎は『論語』『孟子』といふ二書にあたつて彼らの肉声が聞こえて来た、心の奥底がまさまざと見えて来たといふのです。その喜びたるや「手ノ之ヲ舞ヒ足ノ之ヲ踏ムコトヲ知ラズ」と、まさに躍り出さんばかりの喜びをそのまゝに語つてゐます。こゝには彼が何者にも頼らず己れ一人の力で、孔子、孟子といふ大思想家に直面してゐる姿があります。私は仁斎の学問の姿に大変新鮮な驚きを感じた事を覚えてをります。

今、学問といふ事を申し上げましたが、今日はこの「学問」といふ言葉について、皆さんに改めて考へて頂きたいと思ひます。学問といふのは「学ぶ」といふ字と「問ふ」といふ字から成つてをりますが、私が注目したのはこの「問ふ」といふ事であります。ここでいふ「問ひ」とは、例へば試験問題の様に予め設けられた解答を探し当てる為の設問とはおよそ次元の違ふ、どこまで行つても尽きる事のない精神への問ひかけといふ様な意味合ひがあるのではないでせうか。仁斎が躍り上がらんばかりの喜びを実感し得たのは、孔子や孟子の思想をうまく解説し、説明し得たからではないでせう。それまでの定説や解釈等に頼らず、独力で孔孟の言葉を熟読玩味しつゝ、自分に問ひかけて行つた時、初めて彼らの肉声が聞こえて来る様に彼らの思想がわかつた。さういふ事だと思ひます。

この仁斎の様な学問の姿、あり方といふものは、今の私達には大変わかりにくいものにな

つてゐるといふ気が致します。現在私達の周囲で行はれてゐる学問といふのは、概ね物事を理解、説明する事に主眼が置かれてゐる。むしろ、理解、説明する為の理論や概念、法則といったものを大変重要視してゐると言つた方が良いかも知れません。現象を何らかの形で規定してゆき乍ら、理論や法則を物差しをあてる様にあてはめてゆく。その様にして物事が説明できれば事足れり、といふ行き方が一般的です。そこでの学問の優劣は、理論や法則の精緻さ或いはその普遍性を競ふといふ様な事になります。ですから先程仁斎の言葉に見た様な、何者かに直面して自分の力でそれを認識してゆく事も、自問自答を繰返して人生観や人間観を深めていきつゝ、物事を納得してゆく事も全く要求されない訳です。説明や理解の為の道具は予め提供され、私達自身には何ら問題を突き付けて来ない、即ち「問ふ」といふ事を



求めない学問になつてゐるのではないでせうか。私達は、まるで学習塾で学ぶ様な、かくかくの理論を覚えよ、しかしかの概念を理解せよといふ学び方にすっかり慣れ切つて了つて、問ふ力が非常に脆弱になつてゐる。ですから仁齋の実感した学問本来の喜びが大変わかりづらいものに思へるのではないでせうか。

さらに学ぶ動機といふ事について言へば、私達は外部に存在する必要性——即ち、大学入試、就職、卒業の為の単位取得等——にばかり目を奪はれて、自分の内なる学問への欲求をおろそかにしてゐる様に思はれてなりません。

自分の精神を充実させる様な学問、心を豊かに、深めてくれる様な学問にふれたいといふ思ひは、本来誰しも持つてゐる筈です。仁齋の告白の裏には、人生とは何かといふ消える事のない問ひがあり、聖賢の道へ連なりたいといふ、求めて止まざる思ひがあつたに違ひありません。

学ぶ必要にばかり目を奪はれ、他人から貰つた物差しで説明する事ばかりに慣れ切つた精神は自ら欲する事も、自ら問ひかける事も止めて了ふのではないか。

さて学問のあり方についてこゝでもう一度考へて見て頂きたいと思ひます。これまで、学問の現状といふ事にふれてまゐりましたが、現代社会に於て、学問以上に種々の物差しを我々に提供してゐるのは、新聞、テレビに代表されるマスコミであらうと思ひます。学生諸君だ

けでなく、豊かな社会に暮らしてゐる現代の日本人全体が、マスコミの提供する言葉で物事を認識し、理解してそれで事足りりと安心してゐる様に思はれるのです。次に掲げましたのは、小林秀雄先生が数年前のこの合宿でご講義された折の言葉です。今申し上げた様な現実を大変鋭く指摘してをられます。

「今日の文字の世界をよく見てみよ。それは驚くほどの力を持った世界です。新聞、書物、ラジオ、テレビ、さういふものに、諸君は万事を托して自分の精神的努力を働かせない。諸君は空虚な怠惰な物識りになつて安心してゐる。」

この言葉は、自分の精神的努力を働かせない怠惰は本来の学問とは無縁な存在に過ぎないと言つてをられるのです。私自身、心に深く銘記しておきたい言葉だと思ふのです。

現代のタブー

さて、現代のマスコミは、日々に私達に膨大な量の言葉を提供してゐますが、私はこれらの洪水の如き言葉自体大変大きな問題を含んでゐると思つてをります。つまりこれらの言葉によつて私達の認識や思考が歪められてゐるのではないかといふ事です。例へば戦後民主主

義、平和憲法、皇室の民主化、政教分離等の言葉は、それ自体至上、最善の価値を示してゐるかの様に提供され、議論や疑問の余地等全くないものとして通用してをります。すなはちこれらの考へ方は、いはば聖域、或いはタブー（禁忌）として定着してゐると思ふのです。ところが、その出発点となつてゐるのがこれからお話しする「東京裁判史観」といふものであります。

これについて述べる前に、この史観が如何に強固なタブーとして存在するかを示したある事件の顛末をご紹介したいと思います。それは昭和五十七年に起きたいはゆる教科書検定問題といふものであります。

この事件をご記憶の方も多いと思ひますが、皆さんはどの様に憶えてをられるでせうか。おそらく多くの日本人は「当時、日本の文部省が高校の日本史教科書の検定に際して『日本に中国大陸侵略云々』』といふ記述を『進出』に書き改めるやう指示した。それに対し中国政府から大々的な抗議が行はれ、国内各方面から批判が巻きこつて、つひに政府は教科書検定方針の是正を約束した。」といふ様に記憶してをられるでせう。

ところが事件の経過を正確に辿つてゆくと事實は次の様になります。まづ、当時文部省の検定で「侵略」といふ記述を「進出」に書き改めさせられた教科書は実は一例もありませんでした。そして中国政府の抗議は五十七年の七月二十六日に行なはれますが、この根拠とな

つたのはそれから何と一カ月前の、「文部省が教科書検定を強化し、…『侵略』を『進出』に改めた」といふ日本のマスコミ報道だつたのです。しかもその報道は後に誤報だつた事が明らかになります。それにしても一国の教科書の記述に対し他国の政府が容喙する事自体重大な内政干渉問題であります。もし反対の事を日本が行へばそれこそ大騒ぎになるでせうが、日本のマスコミはこぞつて中国に同調し、文部省批判の急先鋒となりました。そしてさらに、事件のこの様な経過が明らかになつた時、サンケイ新聞だけは大きな扱ひの訂正記事を出しましたが、他の大新聞は頼かぶりしたまま誤報の訂正、経過説明を明確にはせず、その後文部省批判の論調を維持し続けたのです。従つて多くの日本人の理解は前述の様なものとなつて了りました。（高橋史朗著「教科書検定—中公新書—」等参照）

また、当時の鈴木内閣は事情を全く承認してゐながら、中国政府に対する抗議も報道に対する反論も行はず、ひたすら非難の嵐が過ぎ去るのを待つといふ奇妙な態度に終始しました。これ以降この問題は韓国や東南アジア諸国にも飛び火し、同様の日本批判を巻起こしてゆきます。

では何故政府は事実無根の非難に対して口を閉ざして了つたのか。こゝにこの事件の本質が含まれてゐます。非難の背景には、「日本は先の大戦で中国大陸に於て許すべからざる大罪を犯した。従つて日本の過去は批判されて然るべきだ。日本人は常にこれを反省しなければ

ならない。」といふ根強い考へ方が存在してゐるのです。この考へ方こそ東京裁判史観と呼ばれるものに基づく考へ方であり、マスコミの論調は常にこれを基盤にしてゐます。事実、検定問題に於て朝日新聞編集部は、一読者の問ひ合せに対し、「字句修正の有無は問題ではない、日本の侵略とそれに対する日本人の反省の欠如が問題だ」と答へたさうであります。かういふ背景があるからこそ、政府として反論や抗議を行ふ事は禁物だつたのです。それは東京裁判史観といふタブーにふれる事であり、タブーを侵せばさらなる非難の嵐を呼び、中国との外交関係を悪化させるだけだといふ判断があつたのだらうと思はれます。実際、この事件以降、藤尾文相、奥野国土庁長官といふ二人の現職閣僚がこのタブーを侵す発言を行つたが為に辞職に追ひこまれた事件は、記憶に新しいところであります。言論の自由が叫ばれるこの日本で、これに言及しただけで現職閣僚が更迭されるといふ事からも、これが如何に強固なタブーとなつてゐるがわかると思ひます。

東京裁判史観について

ここで改めて東京裁判史観といふものをご説明致します。これはいはゆる東京裁判、即ち昭和二十三年に極東国際軍事裁判に於て連合国側が提示した、大東亜戦争終結に至るまでの

日本の歴史に対する一つの見方、であり、概括すれば「日本は無謀かつ非人道的な侵略戦争を引き起こし、世界征服といふ暴挙を行はんとした。しかし米英をはじめとする連合国に敗れた為、軍国主義日本は滅亡し、その敗戦により旧弊は一新されて日本は真の民主的な平和国家として生まれ変はつた。」といふもので、いはば日本犯罪者史観論ともいふべき歴史観であります。

これについては、昨年この合宿で、歴史家の児島襄先生が詳しく講義されてをり、その内容は『日本への回帰・第二十四集』に掲載されてゐます。その文章も是非お読み頂きたいのですが、要するにこの史観は、勝者である連合国によつて、日本が一方的に断罪され、その結論を一方的に提示されたに過ぎないものなのです。児島先生も詳しく例証してをられる様に、東京裁判自体、国際法等の法的根拠に基づいて行なはれたものでもなく、裁判本来の手續や運営に則つたものでもない。つまり裁判としてもともと成立してゐないもの、単に、占領軍司令官の権限を以て一方的に行はれた敗者断罪の場であつたに過ぎないといへませう。

ところが、勝者による一方的提示であつた筈の東京裁判史観といふ歴史の見方が、そのまゝ、我々日本人の強固な通念として定着し、今日に至つてゐるのです。私はこゝに、現代に於ける思想混乱の大きな要因があると思ひます。では何故かういふ事になつたか、この点を理解してゆく為に「極東国際軍事裁判起訴状」といふものを見てゆきたいと思ひます。これはつ

まり、東京裁判での日本に対する起訴宣告です。

「……………日本の対内外政策は、犯罪的軍閥に依り支配せられ、かつ、指導せられたり。かかる政策は、重大なる世界的紛争および侵略戦争の原因たると共に、平和愛好諸国民の利益ならびに日本国民自身の利益の大なる毀損（きそん）の原因をなせり。

日本国民の精神は、アジアいな全世界の他の諸民族に対する日本の民族的優越性を主張する有害なる思想により、組織的に蠱毒（とどく）せられたり。（中略）

日本の経済的および財政的資源は、大部分戦争目的に動員せられ、ために日本国民の福祉は阻害せられるに至れり。……」

こゝに示された考へ方の前提は、「加害者＝日本を支配した犯罪的軍閥」「被害者＝平和愛好諸国民及び日本国民」といふ構図であります。即ち、諸悪の根源は「犯罪的軍閥の組織的な支配、指導」であり、指導された側の日本国民は被害者であるといふ論理が構成されてるます。

東京大学の小堀桂一郎先生は、そのご著書『昭和天皇論』の中で、この「起訴状」や、ポツダム宣言―その第六条中には「日本国民を欺瞞し、之をして世界征服の拳に出づるの過誤を犯さしめたるもの」といふ言葉もあります―等を探り上げられ、「これは日本の知識人層

に、実に巧妙に、戦後の社会に於る処世の術を教へたに等しかつた。」と指摘してをられます。つまり、連合国側即ち米国は、日本を断罪するに際して、犯罪的軍閥とそれに騙された日本国民といふ構図を示し、犯罪的軍閥の方を徹底的に糾弾するといふ方法を選択したのですが、日本人から見れば、この図式をそのまま、受入れて軍閥批判の側に立てば、決して自分が糾弾される事はないといふ状況が現はれたこととなります。いはば米国が提供してくれた「正義」の側に身を置くことができる訳です。小堀先生はその一例として当時の憲法学の権威、宮澤俊義東大教授の学問の変節について論証してをられます。実際、数多くの学者やジャーナリスト達が、この構図をそのまま、受入れて、軍閥批判、戦前批判を展開してゆきます。戦前、事ある毎に財閥や政党の腐敗を難じ、青年将校を讃へて「聖戦」を鼓吹した新聞も、一転して過去を批判する論調に変はつていったのです。さらに占領軍は徹底した検閲を以て、この史観に支障する様な言論を厳しく取締りましたので、この考へ方は急速に日本人全体に拡がり、通念として浸透していった訳です。

さて、米国が対日戦後処理に於てこの様な方法を選択した裏には、それまでの日米関係の歴史的背景が存在します。米国にとつて、対日政策の基本は「日本が米国の経済的、軍事的脅威とならない事」といふものでありました。これは、日露戦争以降の日米関係の歴史を辿るとわかつてくるのですが、特に第一次世界大戦以後、列強の仲間入りをした日本に対して、

米国は非常な脅威を感じてまゐります。当時、欧米列強の植民地政策に於て最後に残つた大きな未開拓市場は中国大陸でした。その中国大陸に最も近く、しかも一旦有事の際には即、派兵できる軍事力を持つに至つた日本の存在は、必然的に列強の警戒心をかき立てました。特に中国進出に遅れ、新市場として満州に意欲を持つてゐた米国にとつては、日本が最大の脅威となつていつたのです。そして日米の確執は様々の局面に於て表面化し、米国の働きかけによる日英同盟解消、ワシントン会議等の軍縮交渉、満州問題をめぐる軋轢等の経過を経て、つひに日米開戦といふ悲劇を迎へる事になります。

従つて、戦争が終り、米国が日本の占領を行ふに際してその最大の課題は、「日本を決して再び米国の脅威としてはならない」といふ事だつたのです。その為には、日本人の報復心、米国に対する敵愾心を再び起こさせる様な事があつてはならず、尚且つ、日本がかつての様な国力拡張を決して行はない為の施策が必要だつたのです。だからこそ米国は、国際裁判といふ事々しい体裁を整へ、「平和に対する罪」といふ法的根拠のない罪状を作つても、日本人自身に反省をさせ、日本人自らが過去を全否定する様な通念を定着させる道を選択したのです。これは、占領軍による憲法の改正といふ史上前例のない施策にもそのまゝ、繋つてまゐります。

私は東京裁判史観の持つ本質的な意味合ひを以上の様に考へてをります。日本は戦後四十

数年、実に見事なまでに当時の米国の意図を具現し続けて来たといふ事になるのではないでせうか。

歴史の断絶

さて、この様にして東京裁判史観は社会の通念として拡がり、しかも一種の“正義”の意識と共に日本人の脳裏に深く浸透していつたのですが、かうなると、物事はすべてこゝを出発点として考へられる様になります。

世界のあらゆる人々にとつて、自分の国といふものは愛すべき対象であり、なつかしい存在です。祖国の歴史とは、先人達の苦闘の歩みであり、誇りと哀しみを以て語り継がれてみます。しかし、現代の日本に於て、祖国といふ言葉は軍国主義の臭ひのするものであり、日本の歴史は民衆の犠牲の上に立つてアジアの人々をも苦しめた罪悪の積重ねといふ事になつて了つてゐます。それは先程述べたやうに、本来他の国の政治的主張に過ぎなかつた東京裁判史観といふ考へ方によつて、日本人がその国家意識も歴史意識も、昭和二十年といふ区切りで断絶させられてしまつたからでせう。

ところで、今年、昭和天皇のご崩御といふ事がありました。私は、陛下のご不例からご崩

御に至る迄の日本の社会の出来事を眺めてみて、この重大事は、過去と断絶して生きてゐた日本人に、無意識のうちに歴史の持続といふ思ひを蘇らせてくれたのではなかつたかといふ気が致します。昨年九月に陛下のご不例が報じられた時、日頃豊かな繁栄の中で天皇のご存在など忘れかけてゐた日本人は、戦前戦後を通じて御在位になつた昭和天皇のご存在を改めて思ひ起こしたのでせう。まさしく動乱といふべき時代のたゞ中で、戦前も戦後も常に国民と苦樂を共にされ、平和と国民の幸福を祈り続けてこられた陛下のお姿を、皆が思ひ起こしたと思ふのです。私達は、陛下が何とか戦争を避け得ぬものかと苦しまれ、また陛下の一身を抛つたご英断で戦争が終結した事をよく知つてゐました。その様なお姿を思ひ起こしたからこそ、あれ程多くの老若男女が延々と記帳の列に並び、ご平癒を願つたのです。日本人の心の奥底に、無意識のうちに、日本の国の姿、天皇と国民の繋りといふものが浮かび上がつて来たといふ事ではないでせうか。

ところが、この国民の意識の変化と軌を一にする様に、マスコミの中に天皇の戦争責任といふ言論が散見される様になります。無論、この議論は以前からあつたものですが、ご不例が伝へられて以降事新しく持ち出され、声高に論じられる様になりました。これはどういふ事かといふと、東京裁判史観によつて提供され、過去を断罪する事で成立つてきた正義が、陛下ご不例といふ事態で脅かされ始めた。さういふ危機感の表はれだらうと思ふのです。つ

まり、その正義から見れば戦前の日本は悪であり、その歴史は決して繰返してはならぬ人類的犯罪の歴史です。天皇制はその犯罪の温床となつたシステムであり、さればこそ皇室を尊いものと見る事は正義に反し罪悪に同調する事であつた筈です。ところが国民は陛下のお姿を思ひ起こし、そのご人生の尊さに改めて思ひを致し始めた。そのお姿が戦前戦後を通じて聊かも変はらなかつた事を思ひ出した。即ち、日本は戦後初めてそれ迄の暗黒の時代から民主的な平和国家に生れ変はつたといふ神話に、亀裂が生じ始めた。さういふ危機感がこの正義を奉じる人々に焦りを呼び起こしたといふ事ではないかと思ひます。

昭和天皇のこと

こゝで、昭和天皇に関する一つのエピソードをご紹介したいと思ひます。それは、国の姿、歴史の持続といふ事についての陛下ご自身の思ひが伺へると思はれるからです。

それは、「新日本建設に関する詔書」即ち一般に「天皇の人間宣言」として知られてゐる詔書にまつはるものです。この詔書は昭和二十一年元日に出されますが、当時の占領軍の暗黙の要請によつて企画されたといふ事です。占領軍の意図は、それまでの日本人の心を支へて来たもの、或いは愛国心の源となつたものを何とか精算するといふ処にありました。かうし

て彼らは日本人の皇室に対する尊崇心の強さに着眼したのです。ですから彼らにとつてのこの詔書の眼目は、まさしく通常「人間宣言」と呼ばれてゐる以下の部分にあつた訳です。

朕なんじらト爾等國民トノ間ノ紐帶ちゆうたうたいハ、終始相互ノ信賴ト敬愛トニ依リテ結バレ、單ナル神話ト傳説トニ依リテ生ゼルモノニ非ズ。天皇ヲ以テ現御神あきつみかみトシ、且日本國民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ、延ひいテ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル觀念ニ基クモノニモ非ズ。

しかし、日本人にとつて「神」とは全智全能の唯一神ではなく、大変尊い方といふ意味であります。菅原道真も吉田松陰も乃木希典もその意味で神なのであつて、キリスト教のゴッドやイスラムのアラーとは全く概念が違ふものです。従つて、戦前は天皇が神であつたから日本は軍国主義の道を歩んだといふのも、これまた欺瞞を含んだ一つの神話に過ぎません。

それはともかく、この詔書につきましてはあまり知られてゐない一つのエピソードがございます。それは、当時の前田文相らがこの詔書の草稿を陛下にお見せした際、陛下から次の様なお言葉があつたといふ事です。(前田多門「人間宣言」のうちそと「文芸春秋昭和二十七年三月号」)

「これは結構だが、詔書として今後国の針路としてかような進歩的な方向を指し示す場合

に、その事柄がなにも突然に湧き上がったといふわけではなく、わが国としてはすでにかやうな傾向が、明治大帝以来示されてをるのであり、決して付け焼き刃ではないといふ事も明らかになりたい。その何よりの例は、明治の最初のとくに、明治天皇が示された五箇条の御誓文であつて、万機公論に決していかうとか、民意を大いに暢達させるとか、旧来の陋習を破り天地の公道に基くとかいふ思想は、これから築き上げる新日本の指針となるものである。だから何かさういふ様な意味も詔書の中に含ませてもらへないだらうか。」

この陛下のご希望により、この詔書の冒頭には「五箇条の御誓文」が掲げられてゐるので

新日本建設に関する詔書

（昭和二十一年一月一日）

- 茲ニ新年ヲ迎フ。顧ミレバ明治天皇明治ノ初國是トシテ五箇條ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ。曰ク、
- 一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ
 - 一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ
 - 一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス

一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ

一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ
一、叡旨公明正大、又何ヲカ加ヘン。朕ハ茲ニ誓ヲ新ニシテ國運ヲ開カント欲ス。

こゝには、敗戦といふ未曾有の体験にも拘らず、日本の姿は変はらない、天皇と国民が心を一にして営々と国を築き上げてきたのが日本の歴史の姿だといふ、昭和天皇の確信がこめられてゐる様に思はれます。明治維新によつて国を開いた日本は初めて国際社会の厳しい現実と直面しました。そしてその中で独立自存してゆく為に、天皇も国民も一つとなつて、こゝに示された誓ひを心に、国の礎を築いてきたのです。その様な国のあり方、歴史の姿といふものへの深い信頼と愛惜の念が、詔書に関する陛下のご要望に繋つていつたのではないでせうか。

日本の過去を精算せんとして企画された詔書にこの様なお言葉が加へられた事は、極めて象徴的なことに思はれるのです。私達が日本の歴史をふり返る時忘れてはならないエピソードだといふ気が致します。

歴史の学び方

最後に歴史の学び方について一言申し上げます。

歴史といふものは、私達の人生が複雑であるのと同様極めて複雑なものであります。人々は様々な局面の中で各々違った思ひを抱いて生きて来たのです。一つの原因から必然的に一つの結果が生まれてくるのではない。予測だにし得ない様々な事が起こつてゆきます。決して単純な因果律や必然論などで割り切れるものではない筈です。与へられた尺度や通念をあらはめて歴史を説明したとしても、それはあらためて通念を説明した事にしかりません。私が今日申し上げたのは、東京裁判史観を捨て、別の史観を持つてといふ事ではありません。戦前の日本は正しかつたといふ見方をすべきだ、といふ事でもありません。通念や史観でいくら武装して歴史に向つていつても、私達が得るものは何もない。手許に残るのは史観といふ武器だけだといふ事でありませぬ。

だれしも、人が生きてゆく姿に感動するといふ事があると思ひます。歴史を学ぶといふ事も同じ事だと思ひます。過去に生きた人々の姿を思ひ起こし、その人生の苦しみ、悲しみ、願ひといふものが本当に伝はつてきた時、私達は言葉を失ひます。たゞ沈黙して涙するのみ

です。その時、その人の人生は私達の心の中に生き生きと蘇るのです。歴史といふものは、過去を偲ふといふ私達自身の精神の働きがなければ、決してその姿を見せてはくれない、さういふものではないでせうか。しかし、だからこそ私達は歴史から多くの事を学び得るのだと思ひます。過去の人々の人生を私達自身が経験し、その人々との命の繋りの中で自分を実感する。さういふ豊かな学問の世界がそこにはあると思ひます。

この合宿教室は大変短期間ですが、是非そのやうな豊かな学問への一つの契機にして頂きたいと思ひます。

『古事記』と

高校『日本史』

神奈川県立深沢高校教諭

国 武 忠 彦



紫宸殿

はじめに

日本人の祖型（祖先）

邪馬台国の女王卑弥呼

みそぎ・社

観勒、暦をもたらす

四世紀の大和朝廷

はじめに

昭和天皇は、一月七日に崩御されました。お年は八十七歳、ご在位六十四年、共に歴代天皇のなかでは最長でした。

この七日と八日の二日間は、新聞・テレビは一斉に特別編成となり、天皇のご逝去を悼み天皇のご足跡をたどり亡き天皇をしのびました。しかし休みあけに天皇崩御について生徒にきくと、ほとんどの生徒が「天皇なんて考へたことはないよ」「知らないよ」といつた返事でしたが、なかには「あんな立派な人だとは知らなかつた」「かわいさうに思つた」といふ言葉がありました。

その後、『朝日新聞』に「昭和から平成」といふ連載記事があり、そのなかの「天皇」教育といふところで「触れない、考えないの40余年、次代の岐路に」といふのがありました。ここでは戦前は天皇について「教えられすぎた」、戦後は「教えられなさすぎた」とかいてありました。高校の『政治・経済』教科書には天皇制の説明に四行を割いてゐるだけ。『日本史』には昭和時代の千行以上におよぶ記述のうち天皇には十余行を費やすにとどまつてゐる。戦争については教へても、天皇とかかはる点には、できるだけ触れないできた。憲法を学ぶと

きも、冒頭の第一章(天皇)は、現実には授業で素通りされてきたのです。

欧州の特派員は「戦後ずっとタブー視してきた天皇制の本質について、日本人みんなが自分なりに解決しなければならなくなったように思います」と書いてゐる。だが、いま、さうなつてゐるだらうか。

先日、若い先生が修学旅行の積立金を徴収するにあたつて、保護者に通知を出すとき「見てください」といつて持つてきました。ところが全て西暦で書いてあつて、一寸わかりにくいので、平成元年とか元号で書いた方がわかりやすいのではないかなといつたら、その先生は「組合で元号は使はないようにしてゐますから」といふのです。私はびつくりして「なぜ」と問ひかへしたら「天皇に関係があるからぢやないですか」といひました。

たしかに元号は天皇が決めてきました。といつても天皇お一人だけで定めたといふことはありませんが、「大化」以来ずつとつづいてゐるのです。元号はその点で日本の文化であり伝統でもあります。

私たちは憲法に、天皇は「日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴」と定められてゐるのに、天皇に関係があるから嫌ひだといふことは一体どういふことでせうか。私たちにとつて、天皇はどうも真に「国民統合の象徴」となつてゐないやうな気がするのです。

私は『日本史』を教へながら、天皇をどこでどう話すかは大事な問題であります。それで



今日は教科書のこの箇所では、最低これだけは天皇について話した方がよいと思はれるところを、古代史のところについてお話ししたいと思います。引用する教科書（〓の部分）は『詳説・日本史』（山川出版社）を使ひます。

日本人の祖型（祖先）

《縄文文化をいとなんだ人間は日本人の祖型と認められるもので、その後の周辺の人々との混血や環境の変化によって、しだいに今日の日本人ができたと考えられる》

日本人の祖先は何か、今日の日本人はどうしてできあがつたかについて記されてゐる箇所です。

ここで普通は、シーボルトなどのアイヌ説から話

しはじめ、ついで、明治後半期に唱へられたコロポックル説（アイヌの伝説に残るコロポックルといふ小さな住民）、大正時代に出てきた弥生文化をもたらしした渡来人といふ説、そして現在言はれてゐる原日本人説と順をおつて話すわけです。この原日本人説といふのは、今日の日本人は縄文時代人が変化したものといふ説です。つまり縄文時代人が結婚や環境の変化によつて少しづつ変化して今日の日本人となつた。出来上つた日本人として、よその土地から渡来したものではないといふわけです。

しかし、私はこれらの説明をする前に、天孫族のことについて話さなければならぬと思ふのです。といふのは、江戸時代ぐらゐるまでは我々の祖先は誰だといつたら天孫族と考へてゐたのですから。日本人の祖先は高天原たかまがはらの神々である。天皇の先祖である邇邇にぎの芸命みことが高千穂の峰あまくだに天降つたときに付き従つた人々の子孫が自分たちであると誇りに思つてゐたわけです。江戸時代に大雨の後、地下から石の鏝やじりが出てきたとき、人々は大騒ぎします。高天原の神々に何か争ひが始まつたらしい、だから天から降つてきたのだ。これは大変だといふわけで、日本中にお布れを出して祈るのです。新井白石は、これは我々の祖先が作つたもので雨で洗はれ土の中から出てきたものだといふのですが、そのころはさう考へる人は少なかつたのです。

邪馬台国の女王卑弥呼

《其の国、本亦男子を以つて王と為す。住まること、七、八十年。倭国乱れ、相攻伐して年を歴たり。乃ち共に一女子を立てて王と為す。名を卑弥呼と曰ふ。鬼道を事とし、能く衆を惑はす。年已に長大なるも、夫婿無し。男弟有り、佐けて国を治む。》（『魏志』倭人伝）

三世紀になりますと邪馬台国の女王卑弥呼といふのが出てまゐります。倭国、日本はもともと男子が王であつたが、卑弥呼の七、八十年前、西暦百八十年ごろ戦乱が起り乱れた。そこで、「共に一女子を立てて王と為す」。卑弥呼といふ人は武力や権力で王の地位についてはなく、みんなに推されて王になつた。「共に」といふ言葉に注目してほしいのです。「鬼道」は呪術、つまり神をまつり神に祈る。国の平安、国民の平安を祈るといふことでせう。卑弥呼はずいぶん年をとつてゐるが夫はゐない。弟がお姉さんを助けて国を治めてゐる。卑弥呼が神をまつり神に祈る、その結果を弟が実際の政治に移す。このあたりは後の大和朝廷、それから日本の歴代の天皇の本質を考へると非常に重要な箇所になります。飛鳥時代の女帝の推古天皇は、甥の聖徳太子を摂政にして実際の政務を行はせてゐます。女帝の斉明天皇は、

子供の中大兄皇子を皇太子にして政務をとらせてゐます。そのことと非常によく似てゐますね。昔から多くの学者が卑弥呼の記事を見たときに、あゝこの方は天照大御神ではないのか、あるいは神功皇后ではないのかと、いろいろ推定してきた理由もここにあると思ふのです。

結局、王になる資格は呪術的な力、靈力に秀でた力をもつた、つまり徳高き聖なる人でなければならなかつたのです。そして、たゞひたすら神をまつり神に祈る。米の豊作を祈り、国の繁栄を祈り、またそれに感謝したこととせう。だからこの人は、聖なる人として国の代表として、神をまつるにふさわしい生活を強いられたいと思ひます。みずから身を慎み、神をおそれ神に仕へたはずです。責任のとても重い役割でした。私はここに天皇の起源を髣髴させるものを感じるのです。

みそぎ・社

《神のやどるところとして、樹木や山・川・岩などをまつた祭祀遺跡が各地から発見されておられ、のちには人里近くに社をつくり、自然神や氏の祖先神をまつることも行われるようになった。けがれをはらい、災害をまぬかれるためのみそぎ・はらい……などの呪術的風習もさかんであつた。》

社の註に「皇室の祖先神である天照大御神をまつる伊勢神宮、あまてらすおおみかみ 大国主神をまつる出雲大社」おおくにぬしのかみ などが記されてゐます。

この箇所では、私は『古事記』の伊邪那岐命・伊邪那美命の話をしめます。この二柱の神が九州や四国などの日本の国土を生みだした。ところが最後に伊邪那美命は火の神を生み、焼け死んで黄泉の国に行く。伊邪那岐命は妻にあひたくて黄泉の国に行きます。「おうい、まだ国は完成していないぞ、帰つてきてくれ」と頼むと「残念です。私はもう死の世界の食べ物食べてしまひました。でも死の国の神さまに相談してきますから私の姿は見ないやうにしてゐて下さい」といふ。しかし、いつまでたつても出てこないで、火をともして御殿に入ると、何と愛しい妻の身体には蛆うじが集まつてゐるのです。彼は怖くて逃げだすと妻が追ひかけてきます。大きな石で道を塞ぎ、妻に離縁をいひわたします。すると彼女は「うつくしい愛しいあなたよ。あなたがそんなことをおつしやるのなら私はあなたの国の人間を一日に千人殺します」といふ。さうすると彼は「美しい愛しい妻よ、お前がそんなことをいふなら、俺は一日千五百人生んでやるから」といふのです。人間が死んでもこの国は絶えない。人口増殖の原理みたいなことをここではいつてゐるのでせう。

伊邪那岐命は「醜い汚い国に行つたものだ。よしみそぎをしよう」といつて、きれいな川

で身体をきよめます。私はここで、みそぎとはこのことだよ、汚れ洗ひ清めることだよと教へるのです。洗つてゐるといふんな神さまが生まれます。日本の神さまは、このやうにして自然に次々と生まれてくるのです。

最後に顔を洗ひますが、左の目から生まれたのが天照大御神。「お前は高天原をおさめよ」。右の目から月読命つきよみのみこと。「お前は夜の世界をおさめよ」。鼻を洗ふと須佐之男命すさきののみこと。「お前は海原をおさめよ」といはれました。ところが須佐之男命は、その後大きくなつてもわあわあ泣いて泣きやまない。「お母さんに会ひたい」といふのです。父は怒つて追放してしまひます。

そこで、須佐之男命は姉上の天照大御神においとまごひをするため高天原に上つてゆく。そのすさまじさは「山川せいでん悉ことごとに動とよみ国土皆震ゆりき」と表現されてゐます。天照大御神はびつくりします。弟は国を奪うばひにきたのではないかと身構へます。弟は「私には悪い心はありませぬ」といふので誓約ちげひをすると、弟の剣から二人のやさしい女の神が先に生まれます。「それごらんなさい。私の心が清く正しいからです。私が勝つたのだ」とえらく喜んで、古代社会で大事な水田の境界の畔あぜを壊したり、神さまをお祭りする御殿に糞をまきちらします。こんな乱暴しても姉は弟をかばつてゐましたが、姉が神さまに着ていたたく御衣みころもを機屋はたやで織つてゐたとき、天井に穴をあけて皮をはいだ馬を落した。そばにゐた織女おりめは驚ろいて死ぬ。さすがの姉もこれを見て、天あめの岩戸いはとにはいつてしまはれた。太陽のやうな天照大御神が隠れたの

ですから、さあ大変です。高天原は暗闇になり、このときとばかり悪いわざはひがおこります。

そこで神々は天の安の河原にあつまつて相談します。お前は鏡をつくれ、お前は岩戸の側にかくれてをれ。すつかり準備ができて天宇受売命は桶の上につて、とりつかれたやうに踊りだします。必死に踊つてゐるものですから、胸がはだけ乳はむき出しになります。すべての神々はおかしくてワハハと笑ひだします。

天照大御神は、おかしいなあ、なぜみんなは笑つてゐるのだらうと思つて天の岩戸を少しひらく。そのとき天宇受売命が「あなた以上に立派な神が現はれたのでみんな喜んで踊つてゐるのです」といふ。そして鏡をつきつける。天照大御神は鏡に映つた姿が自分だとはわからず、立派な神とはこの人かとあやしみ、よく見ようと思つたところを手力男の神が手をとって引き出してしまふ。またパツと世の中が明るくなるのです。神々は相談して、須佐之男命を追放します。

この天照大御神をまつつてゐるのが伊勢神宮なのです。そして、この方が天皇家のご祖先、すなわち皇祖神なのです、といふことをここではつきりと教へなければなりません。

さて、追放された須佐之男命はどうなったのか。出雲の国の肥の河を歩いてゐると箸が流れてきました。人が住んでゐるのか。老人夫婦が一人の娘を中にして泣いてゐます。わけを

きくと「娘は八人ゐるが、八俣の大蛇といふのが毎年やつてきて食べてしまひました。この大蛇の目はほほづきのやうに真赤で、頭が八つ、尾が八つ。身体には桧や杉がはえ、八つの谷、八つの峰にも達するほどの大きさです」と答へる。「では退治してやらう。ついではお前の娘をくれないか。私は天照大御神の弟である」といふと「さしあげます」といふ。

そこで、強い酒をつくれ。そして垣根をつくり、その八つの入口ごとに酒船をおいておくと命じました。八俣の大蛇がやつてきます。船ごとに八つの頭を入れて酒を飲み、酔ひつづれて寝てしまふ。須佐之男命は十握の剣を抜いて切る。肥の河は血になつて流れます。中の尾を切つたときに立派な大刀が出てくる。これは天照大御神にさしあげました。これが三種の神器の一つである草薙くさなぎのつるぎ剣です。須佐之男命は約束通りこの娘、櫛名田比売と結婚します。この須佐之男命の六代目に大国主神があらはれます。多くの兄弟が因幡の国の八上比売やかみひめに妻どひにいきますが、大国主神にお土産みやげの入つた袋を背負はせ先にいつてしまふ。兄弟たちは兎をいぢめ、大国主神はその傷をなほしてやります。

八上比売は「私は大国主神と結婚したい」といひます。兄弟の神々は怒つて山に弟をつれてゆき、赤い猪を追い出すから捕まへろといつて、火で焼いた大きな石をころがしたので、この下敷きになつて死んでしまふ。しかし母は赤貝の汁をしぼつた薬で生きかへらせ、立派な青年になります。

そこで兄弟たちは、こんどは山につれだし大きな木のさげ目にはさんで殺してしまひます。母はこれを助け、「ここにゐてはまた殺されてしまふ。須佐之男命のゐる根の堅州国かたすくににいきなさい」といふ。

須佐之男命は、ここで数々の試煉を与へます。蛇のゐる室むろやに寝かせたり、むかでや蜂のゐる室に入れたり、そのたびに娘の須勢理毘売すせりびめに助けられます。ある日、須佐之男命が昼寝をしてゐるときに妻にした須勢理毘売を背負つて逃げます。須佐之男命は眼をさまして追ひかけてきますが、去つてゆく二人をはるかに望みながら「おうい、お前が持ちだした生大刀いくたちと生弓矢いくゆみやで悪い神々をやつつけろ。立派な宮殿をたてて幸せにくらすのだぞ。こいつめ！」と深い友情をこめながらどなるのです。

かうしていくつもの試煉に耐へぬいた大国主神は、出雲の国の王者となります。この神をまつつてゐるのが出雲大社なのです。

観勒、曆をもたらず

《百済の僧観勒かんろく（7Cごろ）が曆をもたらし、年月の経過を記録することがはじまつたのもこのころで、歴史書や諸記録の発達にとって大きなできごとであつた》

註に「初代の天皇とされる神武天皇の即位を紀元前六六〇年、辛酉しんゆうの年正月朔日ついたちとする考えがうまれたのも、7世紀初めのころのことであろう」とある。

日本には古くは暦はなかつたのですが、七世紀のはじめの推古天皇のときにもたらされました。これによつて初代天皇の即位の年を紀元前六六〇年にしたのです。なぜか。これは、明治時代の那珂通世なかにちよ氏の辛酉革命説がほゞ定説になつてゐます。

中国の占ひによると干支えとの辛酉かのとりの年、なかでも二十一度目（二二六〇年）の辛酉の年ごとに大いに天の命が改まるといふ説です。時はちやうど、聖徳太子を中心に冠位十二階、憲法十七条の制定、修史事業などの画期的な時代でありましたから、その時めぐつてきた辛酉の年、六〇一年（推古九年）から一二六〇年前の辛酉の年を、日本史上の大変革といふべき神武天皇の即位の年にしたのだらうといふのです。

ここで神武天皇の話をしなければなりません、そのためには天孫降臨の話をしなければなりません。

天照大御神は、皇孫の邇邇芸命にぎのみことに「この豊葦原水穗国とよあしはらのみづほのくに（日本国のこと）は汝の知らさむ国なり」、おまへが統治すべき国であるとおほせられる。そして、勾玉・鏡・草薙劍まがたま（三種の神器）をさづけ、とくに、鏡は「これは私の魂と思つて、私を拝するやうにお祭りしてほしい」

とおつしやつた。このやうにして沢山の豪族たちを従へて、日向の高千穂の峰あまくだに天降りしたのです。

さて、その後美しい木の花はなの佐久夜毘売さくやびめや海幸山幸などの話があつて神倭伊波礼毘古命かむやまといはれびこのみこと（のちの神武天皇）の登場となるのです。

彼は、兄の五瀬命いつせのみことと高千穂宮で「どこへ行つたら、安らかに天下を治めることができやうか。東の方へ行かう」と相談され、日向ひむかをたつて筑紫、安芸の国、吉備。さらに東へ行つて白肩しろかたの津つ（大阪）に上陸し、大和へ向ふ。ここで長髓彦ながすねひことの戦ひで、兄は矢を手てにうけて負傷します。「我は日の神の子孫なのに日に向つて戦つたのはまちがひであつた。これからは紀伊半島の南から日を背せに負つて大和へ向はう」といふことになりましたが、兄はここで亡くなつてしまはれます。

さあ、これからが大変です。大きな熊があらはれる。それは敵の大軍のことなのでせうか、天皇の軍隊はその熊の毒気にあてられて気を失つて倒れます。このとき天照大御神あまてらすが一振ひとよりの太刀たちを落すと、全軍はつと目を覚ますのです。面白いですね、もうここは人間の世界になつてゐるのに神々との交流があるのです。かうやつて危機を脱し、荒ぶる神、伏まつろはぬ人どもをしりぞけ、多くの犠牲を払つてやつと大和の橿原宮で即位されます。この方が最初の天皇、神武天皇なのです。この年が紀元前六六〇年。これは少し古すぎないか、史実ではないので

はないかと思ふのは勝手ですが、当時の人々はそれを信じてみたといふことは大切にしなければなりません。どこの国だつて、どこの家だつて、祖先をできるだけ古いところへもつていきたいし、輝やかしい一歩で始まつたと思ひたいものです。

四世紀の大和朝廷

邪馬台国の女王卑弥呼は三世紀のことでしたが、四世紀のことになるとよくわからなくなる。「謎の世紀」とよばれたりします。これは中国が北方諸民族（五胡）侵入で、揚子江の南に退き東晋をつくり、南北朝時代がはじまるといふ大混乱期ですから、日本のことなどとも中国の歴史書に記述されるはずもなかつたのです。

ところが、百済の歴史書「百済記」によると、百済の記録の術は日本よりひと足早かつたのですが、この四世紀は大変な時代であることがわかるのです。

中国の大混乱によつて、朝鮮半島は北方の高句麗、西の百済、東の新羅の三国対立時代に入ります。南の弁韓諸国は「魏志」倭人伝には「倭の北岸」と記され、もう三世紀から日本人が鉄資源を求めて進出してゐたのですから、実際は四国対立といつていいのです。

この四国の支配権争ひのなかから、日本は百済と同盟を結び、大規模な軍事行動を展開し

ます。高句麗の百濟侵入に対し、日本軍は続々と海を渡り百濟の肖古王を助けて、三七一年には高句麗王を戦死させてゐます。そして南の弁韓諸国任那を日本の領土とするのです。百濟は、このときのお礼に七支刀を贈つてきます。

高句麗には、その後好太王が現はれます。教科書には、次のやうに書いてゐます。

《高句麗の好太王こうたいおうの碑文には、倭が朝鮮半島に進出し高句麗と交戦したことが記されている。これは、大和政権が朝鮮半島の進んだ技術や鉄資源を獲得するために加羅から（任那みまな）に進出し、そこを拠点として高句麗の勢力と対抗したことを物語っている。》

好太王の碑文の註には「当時の朝鮮半島の情勢を知るための貴重な史料で、そのなかに『百殘（百濟）新羅は旧もとは属民なり。由来朝貢す。而るに倭、辛卯しんぼうの年（三九一年）よりこのかた、海を渡りて百殘□□□□羅を破り、以つて臣民と為す』とあつて、日本の朝鮮半島への進出を伝えている」と記してゐます。□□□□は判読しがたいが、加羅新の三文字ではないかと推定される。

このころ、日本国内では大和朝廷はどうしてゐたのか。倭王武の上表文（五世紀）とよばれる史料が教科書にのつてゐます。

《興死して弟武立つ。自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大將軍倭国王と称す。順帝の昇明二年（四七八年）使を遣して上表して曰く、封国は偏遠にして藩を外に作す。昔より祖禰躬ら甲冑を擯き、山川を跋涉して寧処に違あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十国。》（『宋書』倭国伝）

この「武」といふのは二十三代の雄略天皇のこと。「祖禰」とは、雄略天皇の何代か前の祖先のことで、天皇みづから甲冑に身を固め、山川を歩いて休む暇もなく、さらに広大な国土の統一を進めた。

註に、「毛人」は蝦夷のことか。「衆夷」は九州南部の人々か、つまり熊襲のことか。「海北」とは朝鮮半島のことかと記してあります。

そこで、上表文を読んで思ひ出されるのが『古事記』の倭建命の物語です。私はこの人物を通して四世紀の日本を想ひ描くのです。

十二代の景行天皇が、子供の小碓命（のちの倭建命）に「お前の兄さんが朝夕の食事に姿を見せないのです、お前が行つてさとせ」と命じます。しかし、五日たつても兄が出てこない

ので、問ふと「朝早く厠かわやに入るとき、待ち捕へて、手足をもぎとつて投げすてました」と答へる。父は、この小碓命の健たけく荒きところを買つて、西の方の熊襲の征定を命じます。小碓命は天照大御神をお祭りしてゐる伊勢神宮に立ち寄り、叔母おばの倭比売やまとひめから衣裳をいただきます。

ちやうど熊襲建兄弟くまそたけは、「御室楽みむろたけ」——新築を祝ふ酒宴をやつてゐましたので、叔母からもらつた衣裳で女装し、宴たけなはのとき、劍で兄を刺し、弟も押へ伏せてしまひます。弟は「西の方にわれら二人においては健たけく強こわきものはゐません。しかし、大和の国にはわれらにまさりて健たけき男がゐりました。これからあなたを倭建命（大和の勇者）と呼ばせてください」といふ。

歸りに出雲の国に行き、出雲建たけるを水浴びにさそひます。その間に木の刀たちと取りかへ、「いざ刀合はせむ」と切りかかり、出雲建は刀を抜かうとするが抜けず、殺されます。

天皇は、こんどは東の方の蝦夷征定を命じました。倭建命はまた、叔母の倭比売にあひます。そして「父は私が戦さで死ぬことを望んでゐるのだらうか」と悲しみ泣きます。叔母は草薙劍をくださいました。

倭建命が相武さかむの国の焼津やいづで、その国の国造にだまされ野火に囲まれたとき、この草薙劍を抜いて、草を切りはらひ助かります。

東へ行つて走水はしりみず（三浦半島）の海を渡らうとしたとき、海の神が暴風雨をおこしたのか、危

うく命を落としさうになります。そのとき妻の弟おとちらばなひめ橘比売が身代りに海中に身を投じ、やつと海を渡ることができました。かうして、荒ぶる蝦夷たちをことごとく征定しますが、帰途、相武の足柄の坂にのぼり、「ああ、わが妻よ」と亡き妻を想ひ深く歎かれました。

甲斐・尾張の国へと帰路につき、この尾張の国で美夜受比売みやうぢひめと契りを果たしましたが、草薙剣を置いたまま、伊吹山の神を殺しに出かけます。途中、白い大きな猪、神の使ひでせうか、これに会ひますが無視したため、大氷雨おおひきさめが降り疲れて動けなくなり、杖つゑをついて、やつと三重県の能煩野のぼのまでやつてきます。ここで国を思つて歌をよみ、短い生涯を閉ぢるのですが、私はこの歌がとても好きです。

やまと
倭は 国のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる 倭し美し

大和は日本のなかで素晴らしいところだ。青々とした垣根のやうに、連つた山々に囲まれてゐる大和は美しい。

いのち
命の 全またけむ人は 豊たたくこも薦平群へぐりの山の 熊くま白かし梔しが葉を 髻うず華ずに插させ その子

この戦ひで命の無事であつたものは、幾重にも山に囲まれた平群の山の、大きなカシの木の葉をかんざしに挿しなさい、その児よ。

倭建命の魂は美しい白鳥となつて故郷の空を飛びます。后や子供たちは、泣き泣き、その白鳥のあとを追つてゆく。

倭建命は実在の人物ではないかもしれませんが。しかし、津田左右吉は「こういう英雄の説話は、その基礎にはよし多人数の力によつておこなわれた大きな歴史的事件があるにしても、その事件をそのままに一人の行為として語るのではなく、事件にもとづきながら、それから離れて何らかの構想を一人の英雄の行動に託してつくるのがふつうである」と述べてゐます。つまり、倭建命といふ一人の勇者の陰には、大和朝廷の命令によつて熊襲や蝦夷の征討に向つた兵士や將軍たちの数多くの物語が統合され、ながい年月のうちにあたかも一人の英雄の行動のやうに形象化されたのだらうといふわけです。

さて、さうすると「謎の世紀」といはれた四世紀の全貌がつかめてきました。つまり朝鮮側の史料によつても、日本の朝鮮半島への進出は歴史的事実であります。そしてこのころ国内では、大和朝廷による国土統一が同時に進行してゐた。

国土統一と朝鮮出兵を同時に進める、まさに疾風怒濤のやうな激しい時代であつたことがわかるのです。倭王武の上表文に「祖禰躬ら甲冑を撰き、山川を跋涉して寧処に遑あらず」

とある。天皇もまた軍の先頭に立つて、国家の基礎をかためるために、さらに広い地域にわたり転戦にあけくれてゐたことを思ひ知るのであります。

さて最後に、なぜ天皇は「日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴」なのかを考へますと、それは天皇と共に国をつくつてきたといふ歴史事実、それに自分も参加し支へてきたといふ国民の誇りがあつたからだと思ひます。すなはち、天皇の権威とは日本の歴史が支へてゐるのです。

『古事記』や『日本書紀』の話は事実ではない、作り話だといふ人があります。大和朝廷が自分たちの支配を合理化するために作つた話であるといふのです。しかし、作り話でもいいのです。なぜこの話が私たちの祖先に自然に受容され、継続されてきたのかといふ歴史事実の方が大事だと思ひます。

神話・伝承といふものは太古の昔から、乱されることなく語りつがれ、守りつづけられてきた神聖なる事実であつたのです。古代の人々には、神々は生活の中に生きてゐましたし、目に見えてゐたのです。江戸時代の本居宣長は『古事記』の研究を「これぞ大御国の学問の本なりける」といつてゐます。古人が感動をこめて語りかけてくる言葉に耳を澄まし、しっかりと聞かうとするのが本居宣長の学問でした。

私たちは神話を学び、神話を切りすてないで、これからはいかに考古学上の知識と融合さ

せていくかを考へなければならぬと思ひます。神話・伝承を教科書の中でどう扱ふかは大事な問題であります。

昭和の精神

—「悲劇」の時代—

九州女子大学教授

山田輝彦



紫宸殿・高御座

昭和の終焉

昭和の精神

昭和史回顧

戦後思想の総括

昭和の終焉

私はけふ「昭和の精神」——「悲劇」の時代」といふ副題をつけましたが——といふ題でお話し致しますが、昭和天皇の崩御によつて昭和史といふものが一つの完結した時代として私たちの前に存在する、さういふ時代になりました。一つの時代が終るといふことがどういふ意味を持つのか、あるいはその時代の中に生き死にしてゐる人にどういふ深い思ひを湧き立たせるものかといふことは、今度の陛下の崩御とそれに続く御大葬で十分感じられたと思ひます。皆さんは自分の所屬してゐる国家の元首——陛下は法的な規定はともかく、実質的には元首と思ひますが——が亡くなられるといふ劇的な瞬間に立ち会はれたわけです。生涯に何度もない劇的な一つの瞬間を体験されたといふことです。

最初の挨拶の時、運営委員長長の長澤君が「経験」といふことを言ひました。小林秀雄さんは「経験といふものは、対象とのつびきならぬ関係を結ぶことだ」といふやうに言つてをられます。つまり、それは自分の心の外側を通り過ぎて行くものではなくて、心の中に深く食ひ込んで来ることによつて、始めて経験といふものになるのです。皆様方は、さういふ意味において生涯に稀有な経験をなさつたのではないでせうか。

私は、娘婿が東京の報道関係にゐるものですから、一月七日は七時頃に娘から電話がかか
つてまゐりまして、「お父さん、陛下が亡くなられましたよ」といふ知らせを聞きました。そ
の時私は電話の受話機を握つたまま絶句してしまひました。そして二月二十四日のあの御大
葬の日を迎へました。私は轎車じよ—お柩をのせた車—が発進するところから、テレビの前に座
つて画面を見つめてをりましたが、涙がとめどなく流れてどうしようもありませんでした。
やがて新宿御苑で葬場殿の儀が始まりましたが、その時新帝陛下が切々と御誄おんるいを述べられま
した。誄といふのは、昔の読み方では「しのびごと」とも申しますが、奉悼の辞と申しま
すか、追慕、追悼のお言葉です。私はこのお言葉を聞きながら、実にお心のこもつた稀有の名
文であると思ひました。今までの誄といふのは、硬い漢語調で述べられてゐましたが、これ
は平易な口語文でございますが、その中に、子として父君を仰がれる哀惜の情がまことに深
く表現されてをりました。

明仁謹んで、御父昭和天皇の御霊に申し上げます。

崩御あそばされてより、哀痛は尽きることなく、温容はまのあたりに在つてひとときも忘
れることができせん。機殿しんでんに、また殯宮ひんきゆうにおまつり申し上げ、霊前にぬかづいて涙するこ



と四十余日、無常の時は流れて、はや斂葬れんそうの日を迎え、輜車じしやにしたがって、今ここにまいりました。

顧みれば、さきに御病あつくなられるや、御平癒を祈るあまたの人々の真心が国の内外から寄せられました。今また葬儀にあたり、国内各界の代表はもとより、世界各国、国際機関を代表する人々が集い、おわかれのかなしみを共にいたしております。

皇位に在られること六十有余年、ひたすら国民の幸福と世界の平和を祈念され、未曾有の昭和激動の時代を、国民と苦楽を共にしつつ歩まれた御姿は、永く人々の胸に生き続けることと存じます。

こよなく慈しまれた山川に、草木に、春の色はようやくかえろうとするこのとき、空しく幽明を隔てて、今を思い、昔をしのび、追慕の情はいよいよ切なるものがあります。

誠にかなしみの極みであります。

私はまだ後に続くのではないかと思つてをりましたが、こゝでお言葉は終わりました。最後の数行のお言葉はひたひたと胸に沁み込んで来るやうに思はれました。

私は漱石を専門に勉強してをりますが、一番印象の深い作品は『こゝろ』の一篇だらうと思ひます。『こゝろ』の主人公は「先生」と呼ばれる人ですが、その先生が日清戦争の戦死者の未亡人の家に下宿します。時代は丁度明治三十年くらゐでせうか。そこにお嬢さんが一人ゐて、先生は心を惹かれてゐます。先生にはKといふ親友がゐて、同郷の秀才ですが養家から義絶されて貧乏に苦しんでゐます。先生はKを引き取つて人間的に暖かい世界を味はせてやらうとします。ところが、非常にストイックだつたKもまたお嬢さんに心を惹かれるやうになります。いはば三者関係が成立します。結局先生がお嬢さんと結婚することになつて、Kは失恋をして自殺をしてしまひます。先生は生涯そのことに罪の意識を感じながら、いつかはKへの贖罪のために、自分も死なうと決意して生きてゐるのですが、その契機が、明治天皇の崩御であり、それに続く乃木大将の殉死であつたのです。有名な次の部分です。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく胸を打ちました。私は明白あからさまに妻にさう云ひ

ました。妻は笑つて取り合ひませんでした。何を思つたものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調戯からかひしました。

私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだと答へました。それから約一ヶ月経ちました。御大葬の夜私は何時もの通り書齋に坐つて、相凶の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知にもなつてゐたのです。後で考へると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなつてゐたのです。私は号外を手にして、思はず妻に殉死だ／＼と云ひました。

さういふやうにして、乃木さんの殉死をきっかけにして、先生は長い遺書を「私」といふ若い語り手に残して、明治に殉じてゆくわけです。私は「こゝろ」といふ作品は、漱石がその中で育ち、その中で彼の全人生を燃焼させた、その明治といふ偉大な時代に対する鎮魂の歌であるといふやうに理解してをります。私は先帝崩御の体験を通して、始めて漱石の悲しみを追体験できたと思つてをります。

昭和の精神

漱石は「明治の精神」について、「明治の精神は天皇に始まり天皇に終つた」と言つてをりますが、別のところで「自由と独立と己れとに充ちた現代」といふ言葉が出て来ます。自由といふのは分ります。独立といふのは個人の独立であると同時に、国家の独立といふ意識がふくまれてゐます。己れとは果敢な自己主張を意味するのでせう。明治といふ時代は、個人が自己主張しただけではない。国民が列強に対して強烈に自己主張をした時代でもあつた。さういふ意味で、非常に鮮明な国家像を持つた時代であり、われわれはそれを一元的に把握できる時代であつたと言へるでせう。

ところが、昭和といふ時代は非常に複雑で、一元的に把握しがたい時代です。例へば通俗的な呼称ですが、戦前は「軍国日本」でした。戦後は「平和国家」とか「文化国家」とか言はれました。これも、戦前は軍事国家であり、武に偏した時代だといふ前提に立つた奇妙な呼び名です。そして、大体昭和四十五年の三島由紀夫さんの自決事件以後の時代は「経済大国」と呼ばれてゐます。これらの呼称そのものが、価値観の激変を示してゐるわけで、「昭和の精神」といふものを抽出するのは極めて困難です。

昭和天皇には、敗戦の翌年の歌会始に次のやうな御製があります。

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

また、昭和六十三年、御病気で倒れられる直前、那須の御用邸で詠まれた実質上の御辞世とも思はれる次の御製があります。

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならん

この二首の歌を踏まへて論じられた江藤淳氏の文章は、先帝崩御に際して書かれた多くの文章の中で、とりわけ心に沁むものでした。

思えば「昭和」という時代は、悲愁に満ちた時代であつた。戦前が戦争と窮乏の「昭和」で、戦後が平和と繁栄の「昭和」だつたのではない。戦前も戦後も、「昭和」は一貫して悲しく、その悲しみを「ををし」くにないながら、陛下は見事に皇統を維持された。

「昭和の精神」といふものを、この文章の中から探るとすれば、「悲愁に満ちた時代」、「昭和は一貫して悲しい」といふやうなところにあるのではないでせうか。物や金があり余つて、レジャー・ブームで遊び呆けてゐる現在だけを見ると、まことにめでたい時代のやうですが、

六十余年を通してみると、誠に悲劇的時代だったといふべきでせう。

なぜ悲しい時代であるかといへば、それは言ふまでもありませんが、昭和二十年における敗戦といふ経験があつたからです。その傷痕は至るところにまだなまなましく残つてゐます。八月になると、各新聞の紙面は、「反戦平和」の大合唱に飾られますが、その多くは戦死者を政治に利用してゐるとしか思はれません。無名の庶民は黙つてその悲しみに耐へて来ました。こゝに一つの資料があります。靖国神社にお祀りしてある田中肇、田中豊といふお二人のお祭神にそのお母様の田中三代子といふ九十歳になられるおばあさんが、恐らく遺族年金を貯められたであらう二十万円のお金を同封して送られた手紙があります。御祭神のお二人の息子に呼びかけられるやうに、漢字とカタカナで書かれた、たどたどしい便り、その写真版が『靖国』に載りました。

平成元年四月十一日カイト。田中肇、田中豊、母ハアイニイキマシタヨ。貫工門モ、アイニイキマシタ。ソレカラ、アイニ、イコウカト、オモテオルウチニ、母ハ、ビヨウキニ、ナツタノデ、アイニイクコトガ、デキナクナタノデ、イルシテネ。アノトキハ、メイヨノセンシデシタガ、母ハ、カナシカタデス。肇豊ヤスラカニ、ネブテオクレ。母ハ、ハヤク二人ノ、トコロエイキタイガ、ジミヨウバカリハ、ドウシヨウモデキンノデ、母ハ、ジミヨウガ、ア

ルカギリガンバリマスノデ肇豊オウエンシテネ。ジミヨウガナクナタラ、イツデモヨイカラ、ラクニ、イケルヨニ、マモテ下サイヨ。母ハカズエノ、九十才ニ、ナリマシタヨ。コノテガミガ母ガ、アイニキタ、シルシデス。センシシタミナサン、ゴクロサマデシタ。ヤスラカニネブテ下サイ。キヨウダイ皆元気デスヨ。二十万円寄進サセテ、イタダキマス。マコトニ、スミマセンガ、肇豊ニ、コノテガミオ、ヨンデキカセテヤテ下サイ。オネガイシマス。

母ガ長生ガデキタノモ、二人ガマモテクレタトオモイマス。母カラオレイオイマスヨアリガトウ。スコシデスガナニカノ、タシニシテ下サレバウレシイデス。

靖国神社

恐らく渾身の力をこめて書かれたのでせう。私はこれを読んで、涙がとまりませんでした。私は弟が祀られてをりますので、先日靖国神社にお参りしましたが、社内を清掃してゐた老人たちが、「僕らももう先は長くないけれども、公式参拝をしてもらはないと、あの世に行つて戦友たちに申し訳がない」と言つてをりました。靖国問題が、慰霊、鎮魂といふ原点を忘れて、政争の具に供せられてゐるといふ現実がある限り、戦後は終らないと言ふべきでせう。

昭和史回顧

昭和天皇は明治三十四年のお生れですが、西曆に直しますと一九〇一年、二十世紀の最初の年に当ります。大正十年、大正天皇が御病気がちであつたため摂政になられます。皆さん御自分の年令と比べて下さい。二十一歳で国政を荷はれたわけです。その頃から、アメリカやイギリスが日本の海軍力に脅威を感じ始めます。日露戦争頃までは両国は日本の友好国でしたが、国際政治の中で利用価値がなくなると、次第に敵対関係に変化して来ます。そのはしりがワシントン軍縮会議だつたわけです。大正十二年、関東大震災。大正十四年治安維持法の成立といふやうに、内外ともに危機的状況が露呈して来ます。昭和期を通じて思想界の底流となるマルクス主義が力を得て来るのもこの頃からです。大正十五年も押し迫つた十二月二十五日、大正天皇は崩御になり、即日踐祚、昭和元年は一週間といふ短かい期間でした。陛下は二十六歳でした。

昭和三年、御即位の大礼が行はれた年、張作霖といふ満州の実力者が、関東軍の河本大作といふ大佐によつて爆殺され、大陸の風雲が急になつて参ります。続いて昭和五年、ロンドン軍縮会議。翌六年九月十八日、満州事変が始まります。七年、上海事変。この年五・一五

事件が起り、青年将校が重臣を暗殺するといふ軍部のクーデターが始まります。翌八年、日本は国際連盟を脱退して、次第に孤立化を深めて行きます。昭和十一年、陛下が三十六歳の御時に二・二六事件が起ります。これは以後の日本の進路を変へるやうな大事件でしたが、当時中学生だつた私などは、青年将校たちが純一な思ひで国家の革新運動をやつてゐるのだといふ肯定的な評価をしてゐました。軍の上層部も、武装集団の叛乱を鎮圧するだけの明確な判断を示し得ませんでした。この時、陛下は朕の重臣を暗殺するとき行動は異勅の軍事行動だといふ明確な意志表示をされました。内乱状態を回避できたのは一に昭和天皇の御決断であつたと言へませう。

昭和十二年蘆溝橋事件を発端とする日支事変が始まり、二十年八月十五日、日本の敗北を以て大東亜戦争が終りました。終戦の年、陛下は四十五歳(数へ年)でいらつしやいました。御生涯の丁度中間点だつたわけです。

終戦の直前の七月二十六日、ポツダム宣言が出されます。これは条件付の降伏勧告文書でしたが、その受諾の可否をめぐつて、内閣は終に意思統一をすることができず、最終的な決断を陛下に仰ぎ、「聖断」によつて辛うじて戦争を終結することができました。御承知のやうに、陛下は非常に憲法を大切にされました。立憲君主制といふ制度を厳格に守られたのです。輔弼の任にある内閣の決定に対しては異議を唱へないといふのが、陛下の政治のあり方だつ

たのです。だから一部の人のいふやうに、戦前の天皇制は絶対専制君主だといふのは間違ひです。陛下が御自分で決定を下されたのは、二・二六事件の時と、八月十五日の御聖断の時と二回しかありません。この場合は既に行政機関が意志決定をする能力を失つてゐたからです。

敗戦後、約六年間、日本は史上始めての異国の軍事占領下におかれます。二十六年九月八日にサンフランシスコ条約が調印され、二十七年四月二十八日に発効します。こゝで一つ大切な事を申し上げますが、二十年八月十五日から二十七年四月二十八日まで、武力戦はなけれども、軍事行動は継続してゐたといふ事実です。日本国憲法（二十一年十一月三日公布、二十二年五月三日施行）の制定や東京裁判（二十一年五月三日—二十三年十一月十二日）といふやうな戦後政治の枠組を決定するやうな重大なことが、占領軍の軍事行動の延長として行はれてゐるといふ事は、感情論を抜きにして直視すべきです。国家にとつて最も重要な憲法制定といふことが、独立の状態にない時代に行はれたといふことに眼をつぶり、「内容が良ければ良いではないか」といふのは暴論でせう。

サンフランシスコ平和条約が調印されて、日本が独立回復した時、一番喜ばれたのは陛下ではなかつたでせうか。その日に次のやうな御製を詠んでをられます。

風さゆるみ冬は過ぎてまちにまちし八重桜咲く春となりけり

平和の回復を心から喜んでをられるお姿が、その弾むやうな調べから響いてまゐります。

そして、戦後の皆様方の一世代前の学生諸君にとつては忘れられない激動の時代が来るわけです。それは、昭和三十五年の第一次の日米新安保条約の調印をめぐる反対闘争です。学生たちは「安保は戦争につながる」といふ革新勢力のスローガンの下に国会を包囲して、猛烈な武力闘争をやりました。樺美智子といふ東大の女子学生が一人死にました。四十年代に入ると全国で大学紛争の嵐が吹き荒れました。四十四年、東大の安田講堂にたて籠つた学生たちと、それを包囲する機動隊の間に市街戦さながらの激しい攻防が行はれ、テレビはそのなまなましい映像を家庭の客間に送り届けました。私は今でも不思議に思ふのですが、あれだけの大闘争をやり、国有財産をめちやくちやにしながら、責任を取つて死んだ学生が一人もみながつたといふことです。放水と催涙ガスで圧倒的に強かつた機動隊によつて、安田講堂が落城した時、一人か二人は責任を取つて自決するのではないかと思ひました。彼らは死なないことが保証されてゐて闘争をやつたのですから、所詮それは「革命ごっこ」に過ぎなかつたのです。天安門の戦車の前に立ち塞がつた学生に比してはるかに男らしさがなかつたのです。

その翌年、四十五年の十一月二十五日、三島由紀夫さんが市ヶ谷の自衛隊で自決して亡くなられる。この三島さんの自決といふのは、戦後思想史の中の画期的な事件だと思ひます。三島さんの死といふのは、解明できぬ謎の部分もありますが、私はやはり一人の天才が、戦後といふものは何か欺瞞の上に打ち立てられた虚構ではないか、フィクションではないかといふ疑問に対する、いのちを賭けた答へだつたのではないかと思ひます。戦前は駄目だ、戦後こそわれわれの価値の源泉なのだといふことに対して、異議申し立てをされたのだ。だから、私は三島さんは戦後思想と刺しちがへて死んだと思ふのです。

三島さんは自決の二ヶ月前、雑誌「諸君」に「革命の哲学としての陽明学」といふ一文を書いてみました。その中で、飢饉にあへぐ窮民を見かねて、幕府に反逆した大塩平八郎の「身の死するを恨まず、心の死するを恨む」といふ言葉を引いてみました。肉体の死は怖くない、魂の死が怖いといふ意味でせう。そして、もし肉体の死を怖れて戦々兢兢々として、魂の死んだ人で日本中が充滿したら、日本人は滅びてしまふのではないかと述べてをられました。根性などといふ言葉がやたらに使はれますが、動物的エネルギーに過ぎない。三島事件によつて、確かに一つの時代が終つた。偽りの平和主義の時代が終つた。それから二十年、日本人の全エネルギーが富といふことに集中されるやうになります。皆さんが生きられた時間はこの時代といふことになりませう。逆説的に聞えるかもしれませんが、金と物が溢れて心の飢

餓感がないところに、現代学生諸君の不幸があるのではないでせうか。

戦後思想の総括

今、昭和といふ時代を送つて、もう一度戦後といふ時代の制度と思想といふものを見直して見たいと思ひます。私は戦後思想の枠組みを作つた三つのものは、ポツダム宣言と日本国憲法、それに東京裁判であると思ひます。こゝでごく簡単に通念と違ふことを申し上げます。まずポツダム宣言によつて、日本は無条件降服をしたといはれますが、それは違ひます。原文を読んで見ると、第五条に「われらの条件左の如し」とあり、以下十三条まで条件が並んでゐます。条件の最後に「日本国軍隊の無条件降服」と書いてあります。少しややこしいのですが、条件付降伏の「条件」の中に、日本国軍隊の「無条件降伏」があるといふ構造です。このやうに明確に条件付降伏であつたものが、圧倒的に不利な力関係の中で、なしくずしに無条件降伏にされてしまつたわけで、今更国際政治の非情さを見せつけられる思ひです。

第二は日本国憲法の制定が、占領下に軍事行動の延長として行はれたといふ紛れもない事実です。江藤淳さんの『閉された言語空間』が明快に分析してゐるやうに、民間検閲支隊の行つた苛酷極まりない検閲基準の中で、最も重要なものは、東京裁判に関する批判、占領軍

が憲法を作つたこと、及び検閲の存在そのものへの言及の三つでした。ブッシュ政権ができて、新しい国防長官に予定されてゐたジョン・タワー氏（女性問題で予定されたポストを失つた）が、上院の公聴会で行つた証言は、憲法制定についての公然のタブーに対して、進歩派が眉をしかめるやうな発言だつた。彼は「米國が日本を占領した当時、日本の軍事力を嚴格に抑え込む憲法を押しつけたのは、グッドアイデアだつた。しかし日本が同盟國になつたいま振り返れば、お粗末なアイデアだつたといふことになる」と言つたのです。外ならぬアメリカ人が「押しつけ」と言つてゐるのです。それを躍起になつて打ち消してゐる日本人といふのは誠に象徴的です。成立過程に遡つて事実を洗ひ直すことが必要ではないでせうか。

第三は東京裁判です。裁判といふものは、その裁判が行はれる時に存在してゐた法律によつて行はれるべきものです。ところが連合國は、全く新たに極東國際軍事裁判所条例といふ、今まで國際法になかつたものを作つて、しかも昭和三年まで遡つて裁いたのであります。これは法の不遡及といふ原則に背反した行為であることはいふまでもありません。パール判事が「儀式化された復讐」と言つたやうに、勝者が一方的に敗者を裁く政治裁判だつたのです。敗戦直後の勝者と敗者の力關係からいふと、それも己むを得なかつたでせうが、東京裁判の残した後遺症は、日本人自身が自らの行つた戦争を、勝者側の検事や判事の眼で裁くといふ視点を身につけてしまつたことです。これが「東京裁判史観」といはれる歴史の見方です。戦後、

歴史は生きたものが、恣意や先入観によつて死者を「裁く」対象になつてしまつたのです。誠に先人に申し訳ないことです。歴史を見る眼の根底に愛情がなければ、歴史は決してその真の姿を見せてくれないでせう。

以上のやうな状況が相互に影響し合ひながら、「戦後思想」といふものが形成されてゆきます。三島さんは、戦後とは虚偽の上に建てられたフィクションではないかと考へた。その中で作られた思想とはどういふものだったのでせうか。皆さんの人生は戦後そのものの中にかないのですから、戦後を否定されるのは、自分自身を否定されるやうな苦痛やとまどひを感じられるかも知れません。しかし、皆さんが真に自らの「生」を十全に生きるためには、まず真実を知る必要があります。

戦後思想が、思想としていびつであることの第一は先ほども述べましたやうに、歴史を蔑視する、歴史を裁くといふことです。死者は物を言ひませんから、自らが全能の神のやうな立場で祖先を裁くことができます。そして、過去の事実の中から暗黒面だけをあばき出して、「日本の近代史は罪悪史である」といふやうな書き方をする。かういふ病的な自虐、呪縛から脱却すべき時ではないでせうか。

第二は国家の蔑視です。国は制度や組織であると同時に、個々人の有限の生命を越えて持続してゆく生命体でもあるのです。国家の本質は国家権力だといふのは事実でせう。制度化

された権力構造は眼に見えるものであり、知的な分析の対象になり得ます。これを私はかつて「外なる国家」と名づけたことがあります。これに対して生命体としての国家といふものがあります。国といふものは、私たちの世代だけの物ではありません。祖先が作り、そのいのちの持続のために、多くの人が命を賭けたものである。それを受けついでわれわれが、やがて子孫に繋いでゆかねばならないものです。さういふ側面を、私はかつて「内なる国家」と名づけたことがあります。それは祖先の行為や言葉に感ずることによつてしか受けとめることができなぬものです。国家への真の愛は、歴史を学ぶことによつてしか生れて来ないのではないでせうか。

第三は人間観の問題です。人間は所詮は本能に従属した動物ではないかといふ考へ方があります。戦後の日本人は清らかなものとか、気高いものとかいふものへの痛切な憧憬をなくしたのではないか。逆に言ふと、濁つたものや汚いものに対する嫌悪感がなくなつてしまつたやうに思ひます。昔の形式道徳を鼓吹するやうな教育は論外ですが、偉人や英雄の行為を凡俗のところまで故意に引き下すやうな解釈が横行し過ぎてゐるのではないでせうか。人間が本能的に持つてゐる上昇志向に水をさすやうな言論とは戦はねばなりません。

最後に、もう一度天皇の問題を考へて見たいと思ひます。戦後天皇制が残つたのは、連合国の政治的判断が働いたのは事実でせう。「天皇は数個師団に相当する力を持つてゐる」とい

ふドライな認識があつたのは当然です。しかし、終戦の年の九月二十七日にマッカーサーを訪問された折の、陛下の捨身の言動が、彼の人格を根底から揺さぶつたといふ事実も、天皇制の存続に大きく働いたことは否定できません。今では多くの人が知るやうになりましたが、終戦時に昭和天皇が詠まれた四首の御製があります。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

外国とくにと離れ小島にのこる民のうへやすかれとただいのるなり

これは、かつて侍従次長をなさつた木下道雄先生がお書きになつた『宮中見聞録』といふ本に収録されてゐますが、どのやうな御決意の中で終戦の「聖断」が下されたかを、これほどなまなましく伝へる資料はありません。文字通り、身を捨てて「民」を救はうといふお氣持があります。終戦直後、陛下は退位をされるか、それとも東京裁判の法廷に引き出されるか、さういふ危機的状况にありました。そのとき「民」はどういふ行動をしてゐたか。伊藤たかといふ無名の御婦人は、毎日血判を押した信書をマッカーサー宛に送つてをられたのです。終戦の年の十二月七日の手紙の一部を抄録します。

私共にとつて、決して天皇は偶像としての神ではいらつしやいませぬ。私共が天皇を仰慕する心は、もつともつと熱い、もつともつと広いゆたかなものだと思つてをります。昨日も申し上げましたとおり、それは日本人の血の中を脈うつて流れてゐるものでございます。／＼天皇をお守りするために、天皇の御安泰を保証される代りにならばほんたうに私共の生命をよろこんで閣下のお国にさし上げます。

陛下は「身はいかならんとも」と詠み給ひ、無名の民は「私の生命をさし上げます」と言つてゐるのです。かういふ手紙が連日血判で何十通となく送られたことが、マッカーサーの心を動かさなかつた筈はないと思ひます。

戦後知識人の大部分の人は、残念ながら東京裁判史観の上に立つて、天皇制はいづれはなくなるだらうし、なくした方が良いと考へてゐました。それが流行思想でもありました。しかし、ごく少数の人たちですが、本物の学問をした人は、敢へて時代の風潮に逆つてきちんとした発言をしてをられました。例へば小林秀雄さんは、終戦の翌年のある座談会の中で、「天皇制の問題も単なる政治問題ではないでしょう。それは単なる政治的制度ではないからだ。日本国民という有機体の個性です。生きてゐる個性です。不合理だからやめるといふわけには参らぬ」と断乎として言ひ切つてをられます。当時の風潮の中で、これだけのことを

極めて淡々と語られたのは驚異といふしかありません。その小林さんがいつか合宿に来られたとき、「今の学者たちは天皇制とは何ぞやとか、天皇の憲法上の規定は戦前しかうで、戦後はかうだといふやうな難しい議論をしてゐるが、自分は全然さういふことに興味はない。天皇といふのは自分にとつて借金や夫婦喧嘩と同じものです」といふ意味のことを言はれました。「借金や夫婦喧嘩と同じもの」といふのは、天皇といふものを貶しめる言葉ではありません。その反対です。庶民にとつて天皇といふ方は、いつも身に沁みる「経験」としてあるといふことなのです。忘れがたい言葉として今も覚えてゐます。「天皇に始まり天皇に終つた」昭和の精神を噛みしめ、新帝陛下への更なる忠誠を誓ひたいと思ひます。

「明治の精神」の一断面

—— 福島安正、郡司成忠と樋口一葉 ——

九州造形短期大学教授

小柳陽太郎



清涼殿

明治といふ時代

福島中佐—単騎シベリア横断

愛馬との決別

ウラル山脈を越ゆ

郡司成忠—千島開拓の義挙

嗚呼！ 我が子、占守！

樋口一葉—明治二十六年六月の日記から

半夜眼をとちて

明治といふ時代

題名に「明治の精神」といふ言葉を選びましたが、明治といへば、端的に「国のすかたが実によく見えてゐた時代だつた」といへるかと思ふのです。国家がいまどういふところを歩いてゐるのか、もしも国が一步道を誤るやうなことがあれば、忽ちにして国全体が崩壊してしまふ、その道筋が国民の目に実によく見えてゐた。そしてその国を支へてゐるのは自分たち一人一人なのだ、国のいのちは自分のいのちそのものなのだ、さういふことが実によくわかつてゐた。さういふ時代だつたと思ふのです。

さういふことを考へるとき、いつも心に浮ぶのは、福澤諭吉の『文明論之概略』の一節です。諭吉はその中で次のやうに申します。世の人々は或いは高尚な学問に志し、楽しんで食を忘れるやうな人もゐるだらう。或いは活潑な実業に従事して寸暇も休まず働いて自分の家庭をかへりみない人もゐるかもしれない。それはそれでいい。立派なことだらう。だがしかし、「其の食を忘れ、家事を忘るゝ」、さういふ時であつても、「国の独立如何に係る」やうなことに逢へば、国の独立そのものが危いといふやうな時にぶつかったならば「忽ち之に感動して」直ちにそれに心を動かして「恰も蜂尾の刺蝿に觸るゝが如く心身共に穎敏ならんこと

を欲するのみ。」——丁度蜂の針にさ、れたやうに心身ともに敏感に反応して国の運命を直視する、さういふ生き方をしなければいけない——論吉はさういふのです。まことに明治といふ時代は、論吉の言葉をかりれば、国の運命に対して「心身ともに穎敏な時代」であつた。さう思はれてなりません。

ここではさういふ潑刺とした「明治の精神」を身をもつて生きぬいた三人の人物、福島安正、郡司成忠しげただ、そして樋口一葉、この三人の人生は明治二十六年といふ時点でお互ひに交差するわけですが、その先人の言葉を、許された時間の中でみなさまとご一緒に味はつてゆきたいと思ひます。

福島安正——単騎シベリア横断

まづ最初に福島安正についてお話いたします。この方はこれからお話しますが、シベリア大陸を唯一人、馬に乗つて横断するといふ偉業を成しとげた人で後に大将になるのですが、シベリア横断の時は陸軍中佐でしたので、一般に福島中佐と呼ばれてをりますし、私もそのやうに呼ばせていたゞきます。中佐は長野県、松本藩に生をうけ、後、陸軍の軍籍に身を置くのですが、明治二十年、駐ドイツ公使館付きの武官を拝命、その卓越した語学力を生かし

て席の暖まるひまもなくベルリンを基点にしてヨーロッパ各地を駆けめぐるので。中でも明治二十三年バルカン半島の情勢を視察した時は、中佐はこのバルカン半島はヨーロッパの火薬庫と言はれてゐるけれども今は割に平穏なやうである。だがここが平穏だといふことはその北方にあるロシアにとつて、今こそ勢力を西に伸ばす絶好の機会ではないか。中佐はさう思ふのです。であればシベリア方面にはさまままの情勢の変化が見えるはずだ。丁度その翌々年、明治二十五年に自分は公使館付武官での任期が切れて日本に帰ることになつてゐる。よし、この絶好の機会を使つて、その情況を視察して帰らう。中佐はさう決心する。それで明治二十四年一月一日、参謀総長あてに、帰任の際の「特別旅行申請書」を提出するのです。

中佐はその中で、自分の目に映つた世界情勢、と



りわけアジアの情勢について痛恨のおもひをこめて次のやうに書き綴つてゐます。

今、机上の地球儀を見ながら世界の犬勢を考へてみれば、そのほんの端にある欧州が今や全世界を支配しようとしてゐる。アフリカ大陸のすべては奪はれ、アジアも独立国は残り僅か、その中でトルコと支那だけは、アジアの東西の両端にあつて、一見自立してゐるやうに見えるが、これもまた風前の灯、かうして残るのは日本だけではないか。いま日本だけは「独り亜細亞絶東ノ島嶼ニ屹立」^{トウシヨ}してゐる。だが日本をとりまいてゐる海も必ずしも日本を守つてくれるとは限らない。この虎や狼が眈々と狙つてゐるやうな地球上にあつて、独立を維持してゆくことがいかに困難であるか——。

そのあと、中佐は今後の見透しについて、「非常ノ震動ヲ被ルコト、將二十年ヲ出デザラントス」——大變な激動が日本を襲つてくるのはおそらく十年以内であらう、と言つてゐます。「故ニ今ヨリ十年ノ規画ヲ為シ、断然トシテ待ツアルヲ特ミ、奮然トシテ時機ニ投ズルノ雄略コソ実ニ国家ノ急務ナラン」——だから今後十年の国防計画を確立し、どのやうなところから敵が攻めてきてもいいといふ準備をととのへ、心を奮ひおこして様々な変化に対応するといふ雄大な戦略を立てなければならぬ。「嗚呼彼ヲ察シ是ヲ思ヘバ、臣子ノ丹心、軍人ノ本分、一日モ安眠スルコト能ハズ」日本国民としての真心、軍人としてなすべき使命、それらを思へば一日も安らかに眠ることが出来ないといふのです。実に切迫したおもひのあふれた

文章ですね。

ところがこの福島中佐が予想した通り、実はこの申請書を出した一月一日、その日にロシアは「シベリア鉄道の建設」を宣言。六月にはその起工式が行はれて、東と西から同時に着工、それから十一年、明治三十五年にシベリア鉄道は完成、それを待ったやうに明治三十七年日露戦争の火蓋が切られるのです。「非常ノ震動ヲ被ルコト、將二十年ヲ出デザラントス」という中佐の予測はまさに的中したといふべきでせう。

さて旅行の許可がおりたあと、中佐は実に思ひ切つた計画を樹てたのです。それは先程一寸申しました、単騎で、たゞ一人馬に乗つてシベリア大陸を横断するといふ計画でした。旅行期間は約五百日、それであの極寒のシベリアを踏破するといふ、前人未到、世界の人々をあつと驚かせる計画でした。

勿論中佐の本当の目的は軍事視察なのですが、あまりに大胆な計画なので、世界中の人々はこれを一大冒険といふやうにうけとつた。そのやうに目的をカムフラージュすることに中佐の狙ひもあつたのでせうが、しかしそれと一緒に中佐には日本人の気概と、民族の優秀さを世界の人々に示してやらうといふ気持もあつたのです。

かうしてその年の十一月、イギリス産の九歳馬を求めて「凱旋号」と命名、あけて明治二十五年二月十一日、紀元節の佳節を選んでベルリンを出発するのです。その後の旅程につい

ては時間もございませんで詳細は省きますが、ペテルブルグからモスコ、そして七月九日ウラルを越えてアジアに入り、中央アジアから外蒙古を通つてバイカル湖畔のイルクーツクに着いたのが、その年も暮れ近く十二月八日、そして年あけて二月一日、ベルリン出発の記念すべき日に大変な怪我をして前途が危ぶまれるやうなことがある。しかしそれも乗り切つて三月十九日ブラゴベシチェンスクを發つて黒龍江を渡り、満州に入り、六月十二日遂にウラジオストクに到着。見事に目的を果して六月二十九日、東京に帰りつくのです。かうしてシベリアを踏破することによる軍事視察の目的と、日本人ここにありと、世界の人々に日本民族のすばらしさを示す目的と、その二つを見事に達成することいふ偉業を成しとげたのです。

愛馬との決別

さて中佐がその間の情況を書きとめられた文章が又実にすばらしいのですが、ここではその中から二ヶ所だけとりあげて御紹介しておきましょう。その一つは出発後約四ヶ月、モスコを發つてしばらくのところ、それまで中佐を運んで来た馬―「凱旋号」―が長い雪解けの水の中を歩いたため、ひどく蹄ひづめをいためてとうとう起てなくなつてしまつて、その馬を

捨てなければいけなくなつてしまふ。その時の愛馬との訣別を述べた哀切極まる文章です。

「此の日（五月十七日）、病馬を養はんと郡長の家なる庭の青草の上に臥さしむ。明日は愈々永訣なりと思へば名残惜しさに堪へず。屢々庭上に出でてその首筋を撫でさすりて慰めつつ青草を取りて食はせ、又扇もて背の上に群る蚊を逐ひなどして終日馬の傍を離れかねたり。誰が畜生と云ひ、獸類は無心なりと云ふ。哀れむべし『凱旋』は病み疲れて不幸を慰むるものなき時、長く仕へ親しみ睦みし余の慰むるを見ては嬉しさに堪へず、首垂れ余の至る毎に双の耳を動かし哀しげに嘶きて唇顫はし何事か訴へんとするものの如し。」

実に真情のこもつた文章ですね。

「之を見て余益々胸迫りて涙自ら双眸（両眼）に溢る。実に八十日の旅、単騎風雪の中に異郷の荒野を彷徨ひ、森林を徨す（さすらふ）。此の時に方りてや、又一人の知人無く、幾多辛苦困難を俱にするものはたゞ馬あるのみ。」たゞ馬だけが唯一の友であった。「されば馬は余が唯一人の伴侶にして又唯一の頼みなりしなり。願はくは壯健にして余と共に此の遠征の功を収めんと思ひしにその効なく、今や病んで又立つ能はず。而して永別の日は明日に迫る。若し之が人ならば彼の心情や如何。来し方の辛苦を思ひ、而して永別又逢ふの期なき愛馬の行末を想ふては万感胸に溢れて離別の悲しみ愈々切なり。」

いい文章ですね。この馬に對する愛情と、世界に名を轟かした中佐の英雄的行為と、その

二つには決して別のものではない。それは全く一つなのです。この優しさがなければ強さもないし、その強さがあればこそこの優しきがある。

「翌十八日を以て愈々ボルジノ駅を出でんとす。乃ち庭上に下り立ちて別れを「凱旋」に告げ記念として鬣の毛を剪り取り之を懐に収めて去らんとす。而も愈々永別を思へば躊躇去る能はず。幾度か立ち戻りけるが馬また双の前足を集めて且つ嘶き、立たんとして能はず。その情、人の袖に縋り裳にまつはりて名残を惜しむに似て、余は勿論、見る人をして断腸の思あらしむ」

日本の本来の軍人の姿といふのはこのやうな実に美しい心情の中にあつた。明治といふ時代はこのやうな心情が実に瑞々しい美しさを保つてゐた時代だつたのです。

ウラル山脈を越ゆ

次の一文はそれより一月半、ウラル山脈を越えてゆく時の文章です。

「七月九日の午前十一時、路傍の林木鬱蒼たる所に到りて一基の石柱を見る。馬を駐めてその文を読めば是ぞ実に欧亚二大陸の境界標なり。」これこそヨーロッパ、アジアの境を示す標柱であつた。「石の高さは二段の基石を加へて約二間、周囲には鉄柵を繞らし表に碑文あり。」

その下に一千八百五十五年と記せるは是建設の年なるべし」中佐が標柱のもとに立つたのは千八百九十二年、従つて三十七年前にこの碑は建てられたのでせう。「碑文は西は欧羅巴、東は亜細亜とあり。余は之れ正にウラルの絶頂ならんと思ひ、首を回らして願望せしも林樹路を蔽うて遠望する能はず。」木が茂つて遠くは見えない。「ただ波濤の如き丘阜の連々として林梢樹隙の間より見ゆるのみ。馬を一老樹に繋ぎ路傍の樹根に踞して（腰を下して）石標に対し、沈思冥想すれば万感湧き来りて慷慨に任へず。」

中佐はそこでヨーロッパとアジアの運命について思ひめぐらすのです。ヨーロッパは今をときめいて栄えてゐる。それに比べてアジアの国々は欧州諸国の齒牙にかけられて次々に滅びてゆく。白人種はアジアの有色人種より遙かにすぐれた人種のやうに思はれてゐる。だがその両者に元来何の差別があらう。たゞ見渡す限り、茫茫たる大陸、その間を区切るものは何一つない。人為的な區別に一体何の意味があらう。——しばしかゝる感慨にふけた中佐は再び馬上の人となるのです。

「既にして奮然一鞭（馬に鞭をあてて）、馬を躍らして立てば、旅とは云へ六年住みなれし欧州の天地は後へにあり、嗚呼、欧の山、欧の川と別れて而して六年の間夢にのみ見し故郷亜細亜の草木と相会せるなり。碑畔一步、身欧亜の二大大陸に跨りて悲喜交々その中に動くを免かれず」さまざまの感情が交錯して尽きることがない。「又も石標の下を徜徉徘徊して（さ

まよつて路傍の草花を摘み、記念の爲め之を手帳の間に挿み、独語して曰く、花よ汝は歐羅巴の花か亜細亜の花か、欧にあれ、亜にあれ（欧の花であらうと亜の花であらうと）花は則ち花なり。その色その香豈高下あらん（どうして上下があらう）。人も亦斯の如きのみと躍然馬に上れば一鞭飄然蹄塵忽ち颺り、瞬時にして既に亜細亜の山河に入る。顧れば則ち陰雲一抹天の一方にあり。雷鳴殷々山雨將に來らんとして樹木悉く震ふ。」

実に緊張した文章ですね。特にこの文の最後のあたり、そこには、今日の前に迫つてゐる民族の試練、その予感が中佐の胸を上げしく去來したすがたが見事に表現されてゐると思ふ。この文章の凄さ、それは単に文章がうまいといふやうなことではない。中佐の心の緊迫がこのやうな文章を生み、そのはりつめた文章の調べが中佐の心を高めてゆく。さういふことをまざまざと感ぜしめられるおもひです。

その外に御紹介したい文章も多く、その旅の途中、中佐が詠まれた漢詩にもすばらしいものが沢山ありますが、時間もございませんし、残念ながら割愛させていたゞきます。

郡司成忠―千島開拓の義挙

先ほど申し上げた通り福島中佐が黒龍江を渡つて満州に入つたのは明治二十六年三月十九

日でしたが、その翌日三月二十日に東京隅田川の言問の渡から、五隻の端艇が東京の市民の盛大な見送りの中を千島にむけて出発しました。その端艇を率ゐたのは海軍大尉、郡司成忠、北方から迫つてくるロシアの脅威から千島を守るための決死の行動でした。

郡司大尉は福島中佐より八歳の年下ですが、皆様もよく御存知の明治の文豪幸田露伴の兄にあたる人です。福島中佐にせよ郡司大尉にせよ、北方ロシアの進攻に対して、福沢諭吉の言葉をかりて言えば、まさに「蜂尾の刺蝮に触るるが如く穎敏に」反応した明治が生んだ二人の英傑でした。

御存知の通り、日本は明治八年、ロシアとの間に樺太千島交換条約といふものを結んで樺太全土をロシアの領土とする代りに千島列島はすべて日本の領土になつたのです。ところが当時明治維新草創期の日本には千島列島の防衛にまで手が回らない。その為密猟船はやつてくるし、ロシアやアメリカに勝手放題に荒らされてしまつて、このまゝであれば折角日本の領土になつたはずの千島もロシアに奪はれかねない。さういふ非常に危険な情勢になつてきた。郡司大尉はそのことを強く憂へてゐた折も折、明治二十四年十月、やはりそのことを非常に御心配になつてゐた明治天皇が、片岡といふ侍従を遣はして千島を調査させられたのです。そのことを耳にした大尉はいよいよじつとそれををれないで海軍当局にいろいろ働きかけののですが、当時清国との緊張関係にあつた海軍の反応は冷い。それで明治二十六年一月、

大尉は遂に意を決して自ら海軍の現役を退き予備役に編入、退役になつた海軍の下士官らと一緒に「報効義会」といふ同志会を結成、千島に移住して日本領土としての実を示さうとして「千島移住趣意書」といふ一文を草するのです。当時日本人はカムチャッカ半島に近い占守島などには全く住んでゐなかつた。しかし日本人自身がそこに定住しないでは、どうして千島を日本領土として世界の人々に納得させることが出来よう。とはいへ日本人にはこれまで全く経験したことのない極寒の地。そこに定住する困難は想像を絶します。だがこのことはいかなる障害があらうとも萬難を排してもやりとげなければいけない事業であり、それは自分に与へられた重大な使命である。郡司大尉はその使命にむかつて己れのすべてを捧げようとするのです。今はすでに他人に期待すべき時ではない、自ら決心する以外にない——「今や成忠、之を他人に待たんより、自ら奮つて之に当るの愈まさに如かざるを知る」——とは趣意書の一節ですが、大尉の決意のはげしさを偲ばせます。

かうして遂に海軍の協力を得られなかつた大尉は、端艇五隻といふ全く無謀とも思はれる装備で千島行きを決行するのです。それは福島中佐とは形こそ違へ、祖国の危急を前にして不可能を可能にせずばやまじといふ強烈な意志と使命感に貫かれた明治の人ならではの生き方といふべきでした。その意気に感じた東京の市民は言問の渡あたり一帯にあふれるやうに集つて大尉の出発を見送つたのです。

雪と消え花と散りても後の世に残るは人のまことなりけり

そのころ大尉が詠んだうたです。もって大尉の心境を偲ぶべきでせう。

その後、端艇隊はさまざまな苦難を経て北上を続けます。特に五月十五日、やつと辿りついた青森の下北半島の東岸、白糠しろぬかといふところでは遂に二隻の船が遭難、二十名近い人の命が奪はれます。そのため最後は軍艦「磐城いわき」に引かれて六月五日函館に入港する。軍艦の助けをかりたのは大尉にとつては実に辛い惨めなおもひだつたでせうが、目的のためには忍ばねばいけないことだつたのでせう。次いで擇捉島えとろふに着いたのが六月十七日、さらにずつと北方の捨子古丹島しやしこたんに着いてそこで九名の同志を残し、遂に八月三十一日、占守島に到着したのです。そこはカムチャッカ半島を指呼の間に望む千島列島最北端の島でした。

その時大尉が残した手記は次の通りでした。少し長い文章ですが読んでみませう。

嗚呼！ 我が子、占守！

「嗚呼！ 我が占守島！ 木南正照きなんまさてる以下十有余人！ 嗚呼木南よ、汝等は既に占守に在りて我を待ちし事久しかるべし」

この木南正照といふ人は海軍の下士官だつたのですが、すばらしい人物で大尉が片腕として頼りにしてゐた人でした。ところがこの人は先ほどお話しした白糠沖の遭難の時命を失つたのです。「木南正照以下十有余人」といふのはすべてそこで死んでいつた部下なのです。お前達の魂はきつと俺たちより早くやつてきて俺たちの到着を待つてゐたのだらう——

「我今来る。汝等の靈、朦として宇宙にあらば、我身を守護して、我目的たる此の占守を探検して余す所あらざらしめよ」

今はなき部下の魂に、はげしく呼びかける大尉の心情、何とか俺たちに力をかしてくれと訴へる大尉の言葉には恐ろしいほどの力がこもつてゐます。

「嗚呼！ 我が子、占守！ 我今来る。今より決して汝を他人の手には掛けまじ。巖亦外人の跋扈（思うま、にふるまふこと）を憤つて我に祈るかの如く、幌筵島の沿岸の丘陵起伏して我等一行を歓迎するものの如し、百感交々起り、思ひは八方に馳せる間に、軍艦警城は恙なく占守に投錨せり」

最後の「占守に投錨せり」といふところからすれば、最初の「嗚呼！ 我が子、占守！」といふ言葉は洋上遙かに占守島を望んだときの万感のおもひを托した言葉でせう。「我が子、占守！」といふ言葉にこもるおもひ、大尉にとつて占守はまさに我が子だつた。我が子と思へばこそ、その占守に会ふために自分の命を捨ててかゝることが出来たのです。「これまでは

随分つらかつたらう。しかし俺が来たからにはもうお前を他人の手にはかけない——」郡司大尉の行動を支へてゐたもの、それは使命感の強さもさることながら、この情愛の深さであつた。そのことをまざまざと思ひ知らされる文章です。「巖亦外人の跋扈を憤つて我に祈るがごとし」大尉が呼びかければ、島の巖も亦、これまでのつらかつたおもひを訴へ、自分を守つてくれと祈つてゐるやうに大尉の目には映つたのです。

「余が最も記憶すべき日は即ち明治二十六年八月三十一日なり。最も喜ぶべき事も、最も恐るべき事も、最も困難なる事も、最も堪忍を要すべき事も、又最も謹まざるべからず事も、皆今日よりして始まるなり。此の日は余が多年心頭に往復して片時も忘るる能はざる可憐の一島、否北門の鎖鑰（日本の国の北方を守るかぎ）たる占守に上陸したる日なり。」

ここでも又、大尉は占守島に対して「可憐の一島」と言つてゐる。ほんたうに抱きしめたいやうに可愛かつたのですね。

あとは省略しますが、そこでは自分は北方の防備に深い御心を寄せてをられる天皇の御氣持に果してお報へすることができてゐるだらうか。それを思へば「血乾き肉震ふ」やうなおもひがすると述べたあと、自分は「我が身の不肖を顧る暇も」ないやうに猛然としてこの事業にとりこんできたが「百難交々道に横はり」「一時は万難並び来りて、殆んど我をして憤死せしめ」るほどであつたといふ、三月以来今日の日迄の血を吐くやうな辛苦の日々を追想す

る言葉がつづくのです。さらに大尉はそのあと、「孤忠一片天祐を得て今日あるを致せり」と書いてゐます。「孤忠」、その一つの言葉の中に天皇に対する大尉のおもひのすべてが語られてゐると思ふ。天子様と自分とは直接一本の糸筋に結ばれてゐる。その氣持を貫いて天子様におすがりしてきたために、天の祐けを得て今日の日を迎へることが出来た。大尉はさういふのです。

かうして大尉ほか六名は占守島で無事年を越すのですが、先程も申し上げました捨子古丹島に残つた九名はその冬、無惨にも全員凍死してしまつてゐたのが翌年の春発見されたのです。福島中佐の華やかな凱旋にひきかへ郡司大尉の苦難はまだ続きます。

樋口一葉―明治二十六年六月の日記から

さてこの福島中佐と郡司大尉、時を同じくして行はれたこの壮挙の報道が連日新聞紙上を賑はせてゐたとき、或いは胸を躍らせ或いは胸をいためながら、その報せに聞き入つてゐた一人の女性がゐました。それが最後にお話申し上げたい樋口一葉です。

一葉はいふまでまなく高名な作家ですが、実はこの世を去つたのが僅か二十五歳。明治二十九年のことでした。従つてこの明治二十六年にはまだ二十一歳。郡司大尉が東京を出発し、

福島中佐が東京に帰つてきて満都の歓迎をうけたころは、東京の本郷、菊坂といふところで母と妹をか、へてさ、やかな荒物屋を営んで生活をたててゐた無名の作家でした。彼女は苦しい生活の中でお金がほしくて小説を書きはじめたのですが、その処女作「闇櫻」を発表したのが前年。この年の三月「文学界」に「雪の日」を発表して、一部の人からは認められてはきたものの、まだまだ作家としては無名の一少女にすぎませんでした。ところがそのころ一葉が書き残した日記には、とりわけこの郡司大尉のことが次々に認められてゐるのです。少し読んでみませう。

「六月三日、めづらしく晴れたり。北航遠征記を見る。さう難てん末の委しきを見るにも一読三嘆などかかるをいふにや。大尉が心中おもひやるだにいたしました。」

これは例の白糠沖の遭難の記事を読んだ感想です。「思ひやるだにいたしました」——苦しい大尉の心中を偲んで一葉はその小さな胸を痛めるのです。

「六月七日、晴れ。いさましきものは福島中佐遠征終りて近々に帰朝さると聞く。あはれなるものは、郡司大尉の一行、それも軍艦磐城に曳かれて五日には箱館に入りぬるよし」

いさましきもの、あはれなるもの、その対照が印象的です。

「六月二十四日、晴れ。あはれなるもの、郡司大尉一行のゑとろふ（擇捉島）につきたりと聞くにむねしづまる心地しながら、此の後の事如何になさんとすらん。先に移りたる人々の

食にともしくて死したるもありとか聞くを、其のたくはへなども多からずして出立ちにし人々よ、あはれこゝにも眼をはなつ（注目する）人あれかし。北海道は紳士の遊び処にあらず、此の人々ぞまこと身をすてて邦につくさんとする人々ぞかし」

身をすてて国につくす郡司大尉の悲愴な心に一葉の心は「穎敏に」反応するのです。

「六月二十九日、晴れ。薄曇也。福島中佐帰京に付、歓迎もやうし（催し）のおびただしからむをおもひ、母君にも見せ参らせ度くもろ共に正午より上野に行く」

一方福島中佐は六月二十九日帰京、新橋の駅から大変な歓迎陣の中を通つて宮中に参内、陛下に御報告を終へたあと、上野の歓迎会場に行くのですが、その華やかな様子をお母さんにも見せてあげたいと思つて、一葉は本郷から上野の方に急ぐのです。

名もない明治の一女性の日記ですが、当時の一葉が名もない女性であつただけに、かへつて当時の庶民がどんなおもひで生きてゐたか。国の運命に自らのいのちをささげよ、うとする男の一生に対してどのやうなおもひを寄せてゐたか。それが犇々と伝はつてくるおもひがいたします。

半夜まなこをとちて

さういふ一葉の痛切な気持が最もよく現はれた文章として特に大切なのが、その同じ年、明治二十六年の十二月に記された日記の一節です。そのころ帝国議會、――議會が開設されたのはそれより三年前明治二十三年のことですが、すでにその時議會は衆議院議長星亨ほしとむるの不信任案を中心にはげしくゆれ動いてゐた。それを新聞の報道で目にした一葉は深く心を痛めて日記に次のやうに記すのです。

「十二月二日、晴れ。議會紛々ふんぶんじょうじょう擾々。私行のあばきあひ、隱事いんじの摘発、さも大人げなきことよ。」

その次に綴られた一文は百年の月日を越えて私達の胸をうちます。

「半夜眼まなこをとちて静かに当世の有さまをおもへば、あはれいかさまに成りて、いかさまに成らんとすらむ」――「いかさまに成らんとすらん」といふ言葉を二回くりかへしたところを感じられるひたむきのおもひを充分に味はつて下さい。

「かひなき女子の何事をおもひたりとも、猶蟻みみずの天を論ずるにも似て、我を知らざるの甚しと人知らば言はんれども（このことを人が知ればひどい身のほど知らずだと言ふだらう

けれども、さても同じ天をただけば、風雨雷電、いづれか身の上にかゝらざらんや（同じ天をいたゞいてゐる以上、風雨雷電すべてこの身にふりかゝつてくるに違ひない）。国の一隅に育ちて我大君のみ恵に浴するは、彼の将相（大將や大臣）にも露おとらざるを、日々にせまりくる我国の有さま、川を隔てて火を見る様にあるべきかは（対岸の火災視してゐてよからうか）。安きになれてはおごりくる人心の、あはれ外つ国の花やかなるをしたひ、我が国振のふるきを厭ひて、うかれうかる、仇ごころは（物事の表面しか見ない、とりとめもない上つ調子な心は）、なりふり（服装）、住居の末なるより（小さいところとはじめとして）、詩歌、政体のまことしきにまで移りて——政体は政治の世界全体をさすのでせうが、「詩歌」を「まことしき」すなはち本格的な、といふことの中に入れてゐることに注意して下さい——流れゆく水の塵芥をのせてはしるが如く何処をばとゞまる処としらず。」

人の心は無限に崩れてゆくといふのです。

「かくてあらはれ来ぬるものは何ぞ。」

かうして国の内外にどういふ国家が現はれてくるか。

「外は対韓事件の処理むづかしく、千島艦の沈没も我れに理ありて勝ちがたきなどあなどらるる処あればぞかし。」

「千島艦の沈没」といふのは、その前年明治二十五年十一月、フランスから日本に運んで

きたばかりの精鋭艦「千島」が、四国松山沖で、イギリスの商船と衝突、沈没して、すぐれた船舶の技術者を中心に七十余名が溺死するといふ悲惨な事件がおきたのです。誤りは明らかにイギリスの船の操縦ミスで、三千トンといふ大きな船が七五〇トンの小艦千島の横つ腹にぶつかり、千島は真二つになつて沈んだのです。だが裁判になると日本はどうしても勝てない。それは条約の不備につけこまれ、日本が馬鹿にされてゐるからに違ひない。文章はさらにつまみます。

「猶、条約の改正せざるべからざるなど、かく外にはさまざまに憂ひ多かるを」

このやうに外交上さまざまな困難をかゝへてゐるが、

「内は兄弟かきにせめぎて（垣の内）で争つて、党派のあらそひに議場の神聖をそこなひ、自利をはかりて公益をわするるともがら、かぞふれば猶、指も足るまじくなん」

そして胸高なるに任せて一葉はさらに次のやうに書き綴るのです。

「にごれる水は一朝にして清め難し。かくて流れゆく我が国の末いかなるべきぞ。外にはするどきわしの爪あり、獅子の牙きばあり。印度、埃及エジプトの前例をききても、身うちふるひ、たましひわななかるるを、——インドのムガル帝国が滅亡したのは一八五八年、そのあと十年ほどしてエジプトもイギリスに占領されてゐる。それを思へば身も心もふるふやうだが——いで、よしや物好きの名に立ちて（物好きといふ評判が立つて）、のちの人のあざけりをうくる

とも、かゝる世にうまれ合せたる身の、する事なしに終らむやは（なすことなしに終つてよからうか）。なすべき道を尋ねて、なすべき道を行はんのみ（一人の日本の女としてなすべき道をふんで一生を終る以外に道はないのだ）。

そして一葉は最後に、「さても恥しきは女子の身なれど」と前書きを添へて次の一首の歌を書きとゞめてゐます。

吹きかへす秋のの風にをみなへし

ひとりはもれぬものにぞありける

秋の野に咲く一輪のをみなへしの花、それとて、冷く吹きすさむ秋風を避けることはできない。自分が女だからと言つて、日本の内外を吹き荒れてゐる嵐の外に生きてゆくことは出来ない。女であつても日本の運命をすべて我が身にうけとめて生きゆく外に道はないのだ。さういふはげしいおもひを述べてこの日記は終ります。かうしてその年も暮れて翌、明治二十七年、日清戦争が勃発したのは皆さま御存知の通りでせう。

今日お話した明治二十六年といふ年は、日本がはじめて対外的な戦争にふみ切つたその前年であつた。その緊迫した時代のたゞ中を生きた三人の生き方を通して、明治といふ時代を偲んでまゐりましたが、そこには今の時代では到底考へられないやうなはげしい、一途な人

間の生き方があつた。しかし私たちはそれを単に明治のロマンとして回想するのではなく、私たちの心の中に眠つてゐる「明治」をよびさます契機にしたい。そして国のいのちを、みづからのいのちとして生きてゆく、日本人本来の生き方を今の世に蘇らせなければいけない。今日お話し上げた三人の先人に学ぶべきことは、すべてそれにつきると思ふのです。

天皇と日本国家

筑波大学教授
文芸評論家

村
松
剛



清涼殿・西廂

はじめに―占領政策の頸枷―

エンペラーの称号と天皇

東と西の皇帝

元号にこもる時代の思ひ

独自の文化の形成

祭祀王

権威と権力

国民国家の形成と明治天皇

死者の魂と神道

祈られる天皇―独自の国柄

はじめに——占領政策の頸枷くびかぎ——

昭和天皇の御大喪には、世界各国から元首級の人びとが数多く来られました。

反日感情のまだつよく残つてゐる国も、むろんいくつかはありますが、反対に喪に服してくれた国々も少なくありませんでした。また七世紀ぐらいの伝統にもとづく御大喪は、つよい感銘をあたへたやうです。

しかし御大喪服が憲法の信仰の自由を定めた條項に抵触するとかいつて、ここからこまでは国の予算によるとか、この部分は皇室費とか内定費用とか、何だかよくわからないモザイク状の予算構成になつてゐたことは、御承知のとほりです。葬場殿のまへの鳥居や櫛も、途中から外されたりしてゐました。

世界中のどこに、こんな不思議な葬儀を行つてゐる国があるでせうか。共産圏は別として宗教をもたない元首を擁してゐる国はひとつもありません。信仰の自由は、少なくとも欧米の国々では保証されぬはず。それでも元首がなくなれば、それぞれ固有の宗教儀式によつて葬儀が営まれるのです。イギリスは勿論英国国教ですし、北欧三国とオランダでは国王は憲法の規定によつて、プロテスタントですから、葬儀も当然これによります。アメリカでケネ

デーがなくなつたときにはカトリックで、アイゼンハウワーのときにはプロテスタントで、ともに国葬が行なはれました。

フランスはいろいろな歴史的事情から、政教分離のやかましい国です。しかしド・ゴールがなくなつたとき、彼は国葬はやめてほしいといふ遺言をのこしてゐましたので、政府は葬儀ではなく追悼の儀式を、ノートル・ダム寺院で行なひました。葬儀や追悼は宗教活動ではなく文字どおり儀式ですから、信仰の自由に触れるはずありません。無宗教の儀式は神の否定を誇示することになり、かへつて一神教の世界では厄介な問題をひき起こします。

回教国の王様がなくなれば、日本は国使を政府の予算によつて派遣し、回教の葬儀に参列させてゐます。当然の礼儀でせう。ところが天皇陛下の葬儀は、固有の宗教的手続をもつて営んでほならないといふことになつてしまつたのです。どう考へても、これは理屈にあひません。

体育館建設用地で三重県の津市が行なつた地鎮祭を、社会的儀礼であつて宗教活動ではないとした最高裁の判決や、忠魂碑のまへでの慰霊祭を宗教的活動とはみとめないといふ高裁判決が、一方ではすでに出てゐるのです。儀礼への公機関の関与を、裁判所は憲法違反ではないといつてゐる。ごくあたりまへな常識、といふべきでせう。それなのに天皇の御大喪に、政府はどうしてこんなに姑息な手段をとつたのか。



共産党、社会党の政治家や、プロテスタント系の頑迷な人たちが、天皇とその背景にある根深い歴史伝統とを国民から切りはなし、皇室そのものの根を絶たうと企ててゐることは事実です。しかしさういふ彼らの動きに支柱を提供して来たのが、アメリカ占領軍が昭和二十年十二月に出した「神道指令」でした。占領の終結とともに無効化したこの「神道指令」が、今日なほ日本でもつてゐる規制力には無視できないものがあります。

「神道指令」は神社神道に国家、地方公共団体がかかはることをすべて厳禁し、「大東亜戦争」といふことばの使用を禁じた指令です。さらに同じ趣旨から、占領軍は神道と関係のある祝祭日の撤廃を命じました。祝祭日に関する指示は翌々昭和二十三年に出され、紀元節も明治節も新嘗祭も廃止されます。新嘗祭は勤労感謝の日といふ名に、改められました。

アメリカのサンクス・ギビングを真似たらしいのですが、サンクス・ギビングは収穫を神に感謝するのですからわかるとして、勤労感謝では、だれがだれに感謝するのか、意味不明です。

日本無力化政策の文化的側面が、この「神道指令」でした。戦勝国の曆にまで干渉した例が、共産国はべつして、ほかにあつたでせうか。祝祭日は、その国の社会生活の節目です。負けたから仕方がないとはいへ、驚くべきやり口でした。白人の文化はすべて正しいと思ひ上りが、この乱暴な文化行政の背後に存在したことは申すまでもありません。

敗北した日本は抵抗する力はなく、また当時の日本人は敗戦の結果自信を失ひ、自己嫌厭症にかかつてゐましたので、先方のいふなりでした。「神道指令」の法的効力はさきほどいひましたやうに、講和条約とともに失はれたのですが、「大東亜戦争」といふことはいまでも禁句に近く、この名称を用ひる人は少数派です。昭和天皇の誕生日は「昭和節」ではなく、みどりの日とかいふものになりました。誕生日を祝ふのは西洋の習慣ですから、天長節も明治節も神道とは何の関係もないのに、政府はいまだに占領軍命令に気兼ねしてゐるのです。もつと正確にいへば、占領軍命令への違反を「反動」的政策として非難する野党やマス・コミに、気兼ねしてゐるのです。

この調子ですと、来年の即位式、大嘗祭も、どういふ形になるかわかりません。占領軍の

遺産あるいは占領政策の頸枷くびかせから、いつ日本人は精神的・文化的に脱却できるのかと思ひます。

エンペラーの称号と天皇

昨年、あるイギリス人のフリー・ライターが訪ねてきて、自分は『ザ・ラスト・エンペラー』、満州国皇帝の溥儀ふぎについての伝記を書いた。今度は『エンペラー・ヒロヒト』について書きたい、と言ひました。どんな視点から書きたいのかと尋ねると、勿論独裁者として書きたいと言ふのです。一寸待つてくれ、君は明治憲法を読んだことがあるか。ない、と言ふ返事でした。

明治憲法第一条は「大日本帝国ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」。これは国家主権の有りどころを示してゐます。第三条は「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」。かういふことは、立憲君主国の憲法には殆んど例外なしに書いてある。どういふ意味かと言ひますと、君主は政治的責任を問はれない、そのかはり政治にある程度以上口を出してはいけない、責任は國務大臣が取る、といふことです。たとへば、スウェーデン憲法の第三條には、「国王の身体は神聖である。国王は、その行為について訴追をうけることがない」としてゐる。

明治憲法の第五条に「國務大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其ノ責ニ任ス」とあります。國務大臣が政治的責任の一切を負つて、天皇は政治的發言を拘束され、そのかはり政治的責任は問はれないのです。イギリスは御承知にやうに成文憲法を持つてゐない国なので、彼にはさういふことがよく分からなかつたのでせう。

『明治天皇紀』といふ本があります。宮内庁が、何十年かけて作つた記録です。それを読んでみますと、明治二十七年の二月の頃に日露開戦を御前會議で決定する場面がありまして、そのとき明治天皇は黙つてをられたといふ。あとで御座所に帰られてから、「この戦は朕が志にあらず」と洩らされた。もしロシアといふ巨大な国と戦つて戦ひに負けたら、祖先に対して国民に対してどう申し開きを自分はしたらいのか。それ以来、食事が進まず眠れず、そのために明治天皇は命を縮められたといふことが、書かれてゐます。

明治天皇は、日露の開戦はやむをえないと思はれながらも、御心配でならなかつたのでせう。その心配を、御前會議といふ公の席で口に出されるわけには行かない。ですから、常の御殿にもどられてから私的な形でおつしやつた。日本の君主の権限は、明治憲法の時代からすでに限定されてゐたのです。

昭和天皇の場合も、決定に口を挟まれたのは、終戦のときに鈴木貫太郎首相が、決断がつきませんので陛下のお考へをお伺ひしたい、といつて聖断を仰ひだときと、その前の二・二

六事件のときだけです。二・二六のときには、総理大臣は殺されたと思はれてゐた。つまり内閣が機能しなくなつたので、やむを得ず自ら指揮を取られたのです。ただ二回の超法規的措置でした。

日本の天皇は憲法上さういふ風になつてゐるんだよ、と話しましたら、そのイギリス人はつまらなさうな顔をして聞いて、つまらなささうに帰つて行きました。あとで聞くと、本を書くのをやめたさうです。

どうしてかういふ誤解が生ずるのか。つい昨日、今上天皇が皇后と一緒に記者会見をされたとき、外国の新聞は「エンペラー・アキヒトが新聞記者会見に臨んだ」と報道しました。今の世界にエンペラーと称する君主は、日本にしかみないのです。このことを日本人は、普段はあまり気が付いてゐない。

エンペラーと称してゐたのはエチオピアの皇帝がさうでしたが、革命でひつくり返りました。それからイランのパーレヴィ、彼も皇帝を名乗つてゐた。古代のペルシャ皇帝の跡継ぎと称してゐたのです。イギリスの国王は、今は女王ですが、インドの皇帝を兼ねてゐた時期があります。ところがインドが独立して、さういふことはなくなつた。世界中にエンペラーは、いまは日本だけです。

エンペラーの語源は、ローマ帝国の総軍指令官、インペラートルです。インペラートルが

フランス語に入つて、アンペールになる。それが英語に入つて、エンペラーです。ローマの総軍指令官はアウグストス以降、皇帝が兼ねることになつてゐました。

それからもう一つの言ひ方で、ローマの皇帝を、カサエルと言ふ。カサエルが英語に入るとシーザーですが、ドイツ語では、カイゼル。ロシアに入るとツアーで、これも独裁者といふ意味です。独裁者として軍を自ら指揮してゐるのがエンペラーです。ローマ皇帝の跡継ぎですから、さうなります。

ナポレオンは、国王にはなれませんでした。出身が貴族とはいへ、卑しいからです。そこでローマ法王を口説き落として、自分がローマ皇帝の後継者になりました。アンペールとフランス語で言ひますと、ナポレオンを自動的にみんな思ひ出すのです。

このあひだの天皇崩御のときは、ドイツの新聞は「ヤーパン（日本）のカイゼルが亡くなつた」。ソ連では「日本のツアーが亡くなつた」。さういふ報道をしてゐます。他に言ひやうがないのです。

ですからドイツ人やロシア人は、自動的にカイゼル、ツアーから独裁者を思ひます。日本の天皇は、独裁者だと思ふのです。ロシア共産党がスターリンの時代に、日本のツアーリズムを打倒せよといふ指令を出しました。ツアーリズムを日本語に直すと、天皇制になります。天皇制ということばは、そもそもそこから来てゐるのです。

天皇陛下が独裁者ではないことは、日本人はよく承知してゐました。天皇がをられることはあたりまへで、天皇制といふことはもなかつた。それが、エンペラーと訳され、ツアーと訳され、カイゼルと訳されると、独裁者だと向かうは思ひます。元来が、さういふ意味なんですから。

天皇の戦争責任といふことが、海外でいろいろ言はれて来ました。その原因の一つが「エンペラー」「ツアー」「カイゼル」、さういふ言葉にあるのです。独裁者なら責任を負はねばならない。エンペラーといふ訳し方は、本当はよくないのです。しかし、これには、いろいろの歴史的因縁があります。

東と西の皇帝

エンペラーは日本語では皇帝ですが、アジアでは皇帝といふ概念は西洋とはまた別です。シナ大陸を支配した人間が皇帝なのです。人種は問はない。蒙古が入つてくれば、元帝国皇帝です。金とか遼とかいふ国もありました。遼は蒙古系です。金の方は、満州族です。それからずつと後になつて日清戦争のときの清、これは満州族、トゥングースです。それがシナ大陸に入つて清帝国をつくる。

シナの皇帝は、出身も問ひません。漢の高祖は、元来ごろつきでした。ごろつきが、皇帝になつた。高祖がしたことは、それまで自分を助けてくれた武將、彼らは軍事力を持つてゐますから、いつ叛乱を起こすか分からない、次から次に殺すことでした。その王朝がつぶれると、また別の野心家がどこからか出てきて皇帝を名のるのです。自分が天帝から世界を支配する位を授かつた、と主張する。独裁支配のくりかへしが、シナ三千年の歴史でした。

独裁体制しかない、といふ異様な国です。共産主義下では毛沢東皇帝が出て来ます。自分の氣に入らないのは、彼は全部粛清しました。中国共産党の発表でも、例の文化大革命のときに、毛沢東の手で直接、間接に殺された人間の数は、最低見積り千二百万といひます。その毛沢東が死ぬと、鄧小平が次の皇帝になる。

天安門でああいふ事件が起こつて、欧米や日本の新聞は今更のやうに驚いてゐますが、そんなに驚くほどのことではないでせう。あれが中国共産党といふものであり、歴史的に見てシナなのです。自分は政治に失敗したから職をやめて隠居しよう、などといふ呑気なことが許される国柄ではありません。「水に落ちた犬はたたけ」といふ諺が、あちらにはあるさうです。

つまり一度権力を手離すと、身の安全さへ保証されないので。だから危ないと見れば軍隊を出して反対者を制圧します。何千人かの人間を天安門の広場で殺したからといつて、べ

つにどうといふことはない。何千万も殺して来た歴史が彼らにはあるのですから。

ところでシナの皇帝といふ風に、「シナ」といふ言葉が私が使ふのは、大陸では国号が時代によつて変わるからです。隋とか唐とか、そして今は中華人民共和国です。ですから、土地の名前として、シナといふ言葉を使つてゐるのです。中国は一種の文化概念でして、周りの国は、文化未開の衛星国であることをあらはしてゐます。貢ぎ物を持つて来る。そのかはりその国の元号は、全部シナの皇帝が決めるのです。たとへば、朝鮮半島で高麗が滅びて、新しい国が作られる。そのときに、新国王は明の皇帝に使者を出しました。こんど王朝が變つたけれど、どういふ国号にしたらよいか。明の方はお前の国は東にある、日の昇る所だ、といひます。鮮やかな朝。古代にもさういふ名前があつたのだから今度も朝鮮にせよ。明の皇帝が、朝鮮の国号を決定したのです。

アジアではシナの支配者だけが皇帝で、それ以外はみんな国王でした。ただ一国、日本だけが違つたのです。西暦六〇七年に厩戸皇子うやまとが、仏教のはうで聖徳太子と言ひますが、その厩戸皇子が当時は皇太子として政治的実権を握つてをられた。時の天皇は、推古天皇です。その太子が隋の煬帝ようたいに手紙を出すのです。「日出づる處の天子、書を日没する處の天子に致す、恙なきや」。このことは、日本側の歴史には出てまゐりません。シナの『隋書』に、しるされてゐるのです。

隨の煬帝はそれを読んで、カンカンに怒つたと伝えられます。それはさうでせう。あんまり丁寧な言ひ方とは思へませんから。その怒りを、日本宛ての手紙にそのまま書いてよこしたやうです。そのときの遣隋使が、小野妹子でした。

小野妹子は手紙を日本に持つて帰つてきた筈ですが、途中でなくしてしまつたと報告してゐるのです。一國の使節が向かうの元首から貰つた親書を紛失するとは、ふつう考へられない事態でして、とんでもない奴だ、処刑しろといふ聲が上りました。

要するに中身があんまり失礼な手紙なので、日本の方で発表をためらつたのでせう。紛失したといふことにして、再度小野妹子が隋に持つて行つた手紙は、「東の天皇（つぎ）敬みて西の皇帝に白す（まう）」となつてゐるのです。「日出づる處」より少しいですね。東と西ですから。これに向かうが受け取つて、それ以降日本では、対外的には君主が皇帝を名乗るのです。天皇といふ表現も、このころからです。

元号にこもる時代の思ひ

遣唐使が唐に行くときには、どんな船に乗つていつたかとか、最近はそんなことばかり言つてゐますが、重要なことは、その国書の内容です。手紙だから、日付があるでせう。こち

らの書いた日付は、日本の元号で書かれてゐるのです。天平何年といふふうには。日本以外の国では、新羅でも何処でも元号はシナが決定してゐたのです。元号決定権は、皇帝にあるのですから。日本だけは君主が皇帝で、対等ですので、元号も日本人が作つて持つて行つたのです。これは元号といふものを考へるときに、非常に重要な意味を持つてゐます。

元号なんかやめて、キリスト教の曆にしてしまへといふ人たちがゐますね。つまり平成元年と言はないで、一九八九年と言へといふ。しかしキリスト教の曆がこれだけ世界にひろがつたのは、たまたまキリスト教国の軍事力が強くて、世界中に植民地を作つたからでせう。それだけの話です。キリスト教の曆がほかよりよい、といふ理由によるものではありません。先づ第一に、キリストが存在したかどうかともわからない。存在したと仮定しても、キリストが生まれたのは紀元前四年であると言ふのが通説です。四年ずれてゐるのです。それよりも困るのは、曆を作つた人が紀元零年を作るのを忘れてしまつた。本当はキリストが生まれたときが零年で、翌年が一年でなければならぬ。零がないから、紀元一年の前は紀元前一年です。マイナス一になる。紀元前と紀元後との間に零がないから、通算するには、一を引かなければならない。

さういふ意味では、決して合理的に出来てゐる曆とは申せません。世界中の人が知つてゐるから、共通の曆として使ふのには適してゐる。ただそれだけのことです。回教世界では、

回教暦を使つてゐます。回教暦に従つて、お祭りもあれば断食月も決められてゐます。ユダヤ教徒は、ユダヤ教暦を使つてゐる。今年がたしか、紀元五七四〇年です。神様がアダムとイヴを作つたときから逆算すると、五七四〇年経つてゐるのださうです。とても合理的とは言へませんが、ユダヤ教徒の生活はこの暦の定めるお祭りその他によつて律せられてゐるのです。仏教暦をつかつてゐる国もあります。

人間の一生は、各人の生きてきた時間の積み重ねでせう。それぞれの人間が、人生といふ時間の蓄積を背負つてゐるのです。時間といふものは、ときには一日が千秋の思ひ、と感じられることもあります。人を待つてゐるときなど、一日が千年にも思へる。逆に振り返つてみると、光陰矢の如しです。光陰の「光」は太陽、「陰」は月の意味です。太陽と月の入れ代はり、つまり一日の経つのが矢の如し。時間が矢のやうに速いと、感じられることもあるのです。

このやうに人によつて時間の感覚が違います。それにこだはつてゐたら、待ち合はせも出来ないから人間は共通の時間を決めただけです。昔は振り子の振動で、今は分子の運動ですが、さういふもので共通の時間を設定しました。

各国の文化についても、同じことがいへます。それぞれの文化社会に特有の暦といふか、時間の集積があるのです。これは、大切にしなければならぬ。ただしそんなことを言つて

るたら付き合ひが出来ないから、共通の暦をおいたらいいだらう。元号を大事にしなから、キリスト教暦も共通暦にしたらいいではないか。それが当然の考へ方で、国民の八割はさう思つてゐるのです。

ところが元号を大事にしてゐるのは、アジアでは日本人だけです。韓国人は、大事にしません。何故か。自分で元号をつくつたことが、歴史上ないからです。シナ大陸で作られた元号を、押しつけられてきたのです。朝鮮にしてもヴェトナムにしても、外国製のそんなものに愛着が持てるはずがありません。日本だけは暦を、元号を押しつけられたことがありませんでした。だから日本人は元号といふものに対して、歴史的に非常に深い愛着を持つてゐる。例へば元禄時代、元禄といふ元号が清しんあたりんに押しつけられた元号だつたら、日本人は愛着をもつか。もたないでせう。あれは日本人が作った暦です。平成といふ元号も同じです。しかし日本は敗戦後、アメリカ軍によつて、さきほど申しましたやうに祝祭日をつぶされました。元号が残り、建国記念の日が復活したことが、せめてもの幸せです。

独自の文化の形成

アジアには皇帝が、二人しかゐなかつた。このことの持つてゐる意味は、極めて重大です。

つまり日本はシナ以外では唯一の独立国として、独自の政治体制を持ち、独自の文化を培ってきたのです。シナのやうな、王朝の交替もありませんでした。

五世紀ぐらゐまでの日本は、大陸の国家の圧力を利用しながら朝鮮経営のために苦心を重ねてきてゐます。

聖徳太子が隋に最初に手紙を出すのはそれよりもあとの時期ですが、当時の隋と言へば大変な力を持つてゐました。むかしの日本人の世界観から言ひますと、世界に国は三つしかなくつた。日本と唐、天竺です。唐はシナ大陸で、天竺はインドです。天竺あたりまでが、日本人の目に見えてゐた世界の全部でした。しかも隋は、今の米ソ双方を合はせたぐらゐの軍事力を持つて大国だつたのです。

それに対して挑戦的な手紙を、聖徳太子がどうしてあへて書かれたか。はつきりは分らないのですが、隋はまもなく高句麗と戦争をして敗北し、ほろびてゐるのです。当時は高句麗から慧慈法師などといふ坊さんが来てゐましたので、日本側では隋の情勢を調べた上で、今ならやれると判断したのでせう。さういふ外交的判断が伴はなければ、とてもあんな挑戦的な手紙は出せません。聖徳太子は大変苦勞して情勢を読み、その上でああいふことをされたのだと思ひます。

日本は、シナ大陸から軍事力でもつて文化を押しつけられたことは一度もありませんでし

た。独立国として常に対応してゐますから、気に入らないものは受け容れない。日本人の体質に合つたものだけを、受け容れて来たのです。

日本が受け容れなかつたものはいろいろありますが、なかでも非常に大事なのが文字の問題です。漢字が入つてきましたね。とにかく日本人は初めて文字といふものを見た。そのときの日本人の驚きは、大変なものだつたでせう。この驚きは、今では想像することが難しい。日本人は物真似ばかりしてゐるとよく言はれて来ましたが、とんでもないことだと思ひます。日本人は、シナの真似なんかしなかつた。なるほど漢字を輸入はしたが、漢字から平仮名、片仮名を作り出した。日本語とシナ語とは、根本的に違ふ。文法も違ふ。だから漢字だけでは日本語を表現できないのです。朝鮮語もその点では同じですが、朝鮮がハングルをつくるのは、ずつと後世です。

漢字を読むのに返り点を打つといふことをしたのは、世界で日本人だけです。日本語にするために、順序をひつくり返して読んだのです。例へば英語の *This is a pen* といふ文章では、*is* といふ動詞は日本では最後に来ますから、*This is, a pen,* と書いて *This a pen is* と読ませる。それと同じで、語順を変へて読んでしまつた。

その次には、漢字を訓読くんよみした。日本にあらかじめあつた概念は、日本語として読むのです。例へば「紫」といふ字が入つてくる。これは本来「し」としか読めません。しかし日本

には「むらさき」といふ概念があるから、「紫」と書いてあるのを日本風に「むらさき」と読んでしまった。ときには向かうの音をそのまま意図的に、取り入れた場合もあります。例へば「蝶」ですね。「ちようちよう」は昔は「てふてふ」と書きましたが、この「てふ」は音読みです。では日本に蝶はゐりなかつたのか。そんな馬鹿なことではないので、蝶はゐたのです。日本人は蝶を「かはひらこ」と言つてゐました。河原に飛んでゐる虫といふほどの意味でせうね。しかし「かはひらこ」では、どうも歌にならない。それで「てふ」の音の方がいいといふことになつたらしい。さういふ例外もときにありますが、日本にある概念は原則として訓読みをした。更に先程言つたやうに片仮名や平仮名といふものも作つていつたのです。

シナと日本との文化的落差を思へば、これは大変な仕事です。西洋の方では、アルファベットの元はエジプトの絵文字でした。それをユダヤ人の先祖が、音標文字に変へてギリシヤに輸出したのです。ヘブライの二十二字のアルファベットがギリシヤに行き、さらにそれがローマに行つて今のアルファベットが出来上ります。ローマの文字を西洋人が借りて、いまの表記法がつくられるのです。

だから私は西洋人によく言ふのです。日本文化が物真似だなんて、冗談ぢやない。我々はシナ文化を吸収して、それを日本風に変へて来た。あなた方はどうか、エジプトからイスラエルが借りたものを、更にギリシヤが借りてそれをローマが借りてきて、それをまた真似し

てゐる。だいいちローマ文化に圧倒されて、古来のことばさへ忘れ、ラテン系の住民はロマ語の方言であるフランス語やイタリア語やスペイン語をつかつてゐるのではないか。日本人は、日本語を守つて来た。

シナ文化の日本化は法体系、宗教にまで及びますが、はなしを天皇にもどしますと、養老律令にはかう書いてあるのです。日本の君主には三つの呼び名がある。一つは「天子」、これはお祭りをする方です。もう一つは「天皇」、これは詔や勅に署名する方。（「詔」といふのは明らかにすることですから、施政方針をはつきりさせることで、「勅」は戒めです。）そして更に「皇帝」といふ表現がある。これは「華夷」すなはちシナでさう言つてゐるから、日本でも外交文書には皇帝といふ。

つまり天子、天皇、皇帝の三つの呼び名があり、最後の皇帝は、聖徳太子と隋の煬帝とのやりとり以来外交文書の用語となつたのです。ですから明治維新以降もその伝統に従つて、外交文書は全部皇帝にしてみました。さういふ歴史的伝統が、背景にあるのです。日清戦争のときの開戦の大詔、日露戦争のときの大詔、それから第一次大戦のときドイツに開戦します。その日独戦争のときの大詔。全部「大日本帝国皇帝」です。大東亜戦争のときだけが天皇です。それまではずっと皇帝でした。

天皇がなぜ皇帝を名乗つたかといふ歴史を繙いて行くと、結局アジアで日本だけが独立性

を保つてきたといふその問題にぶつかるとのこと。

私は今後はエンペラーといふ表現はやめて、天皇でいいではないかと思つてをります。さうしないと西洋では、誤解を招きます。

祭 祀 王

祭り事をするのが天子ですから、日本の天皇にとつてはお祭りが大切な仕事です。世界中のどこの共同体でも、古代社会では、たいいていの共同体の君主が英語でいふプリースト・キング、祭祀王でした。祭祀王にとつては宗教が中心ですから、共同体が大きくなりますと世俗の政治が出来にくくなつて行きます。従つて祭祀王は鉄器の出現のころから、どこでも消えてしまつたのですが、日本の天皇だけは、祭祀王としての仕事をずっと続けられて今日に至つてをります。どうして日本でこれが可能だつたかは一つの謎と言つてよく、世界史にこんな例はないのです。世界に祭祀王が残つてゐる国は、日本だけです。

聖徳太子、この方は皇太子で一生を終られました。時の天皇の推古天皇が祭り事をなさつて、聖徳太子は政治を皇太子として推進されたやうです。それから大化の改新の天智天皇は、その一生の殆んどを皇太子として、中大兄皇子として過ごしてをられます。天皇は皇極天皇、

孝徳天皇、斉明天皇とつゞき、最後に天智天皇自身が天皇になられます。しかしなられてまもなく藤原鎌足が亡くなりますので、自分の皇子の大友皇子を太政大臣、おほきまつりごとのおほまへつきみ、といふものに任命されるのです。太政大臣といふ職は、日本にしかない制度です。シナの場合には、王朝によつて少しづつ変つてきてゐますが、尚書、中書、門下の三省があつて、尚書省下の六つの部局が全体において政治を処理してゐました。日本ではこの全部をまとめて太政官といふ独自の役所を作り、別に神祇官といふ宗教上の役所をおいたのです。その政治の長が、太政大臣です。

その後壬申じんしんの乱が起こり、しばらくして天武天皇が亡くなると持統天皇が踐祚されますが、持統天皇も高市皇子をやはり太政大臣にしてゐる。常にさうであつたとは断言出来ないにせよ、大事なときには



お祭りをやる君主と実務の担当者とをべつにして、二重構造にしてゐた場合が目立つのです。お祭りをされる権威としての天子と、実務担当の皇子とです。この実務を握る皇子が後には藤原氏になつたり、平家や源氏になつたり、豊臣氏、徳川氏になつたりする。権力担当者へは変つても、権威としての天皇はずつと続いてきた。『魏志』倭人伝中の卑彌呼のそばにも、べつに実務にあたつたらしい男がついてゐました。古代らしい二重構造になつてゐたことが、権威と権力を分け易くしたのではないかといふ風に、私は一応の仮説を立ててをります。

後世の戦国時代、あらゆる戦国大名が京都に行かうとしました。天皇といふ権威を戴いて、天下を統一しようとしたのです。最終的には勝ち残つたのは、秀吉でせう。秀吉は本当は、征夷大將軍になりたかつたはずです。しかし征夷大將軍になるためには、家系が源氏でなければならぬ。松平家康は南北朝の新田氏の一族、得川家の子孫を名乗つて徳川と稱したのです。新田は、源氏です。家康は系図を作つたのでせう。ところが秀吉は偽物系図を作らうにも、あんまり生まれがはつきりしすぎてゐる。それで改めて豊臣といふ姓を天皇から頂戴して、関白として国を支配したのです。

江戸時代には徳川氏による朝廷への圧迫がつよかつたことは、御承知の通りです。しかし例へば忠臣蔵はどうして起つたか。発端は勅使饗応でせう。勅使を饗応するのには吉良といふ足利の直系が高家筆頭でゐて、昔の礼儀作法を教へる。それと浅野内匠頭との争ひで、つ

まり勅使饗応を準備する過程での恨みが、あの事件を起こします。いかに勅使饗応を幕府が大事にしたか、朝廷衰弱の時代といへども、皇室は高い權威を持つてをられたのです。

權威と權力

このあひだサミットがパリでありましたが、あのサミットは同時にミッテルランの威信発揚に利用されました。フランス革命二百周年と、うまく合はせたのです。フランス革命のときに人權宣言を、ミラボー伯爵が書きました。そこまではいいのですが、フランス革命はその後、ヨーロッパでは殆んど最古と言つていい王室の王様の首を切つてしまつたのです。国の安定の中軸がなくなればどうなるか。あとに来るのは、權力闘争です。權威の空白化のなかで血で血を洗ふ大変な恐怖政治が起こつて、革命を通じてギョティーンで殺された人数は一人を越えます。地方で裁判もなしに惨殺された人びとを加へますと、三十万から四十万といひます。フランス革命から約半世紀の間に、フランスでは七回革命が起こつてゐるのです。とてもこれは安定した国とは言へない。共和制の国で大統領が大きい權力を握りますと、權力闘争がくりかへされることは、フィリップピンや韓国の例を見てもお分りです。アメリカはべつとして、共和制は不安定になりがちです。現代の世界でも政情が安定して

みるのは、むしろ立憲君主制の国です。権力の主体の外に、権威が別にある。イギリスにしてもベルギーにしてもオランダにしても北欧三国にしても、権威が別にあつて政治上の権力者がゐる。政治権力を握つてゐる人間が失敗したら辞めたらいいのだし、悪いことをしたら牢屋に入つたらいい。それでも権威は保たれてゐるから、国全体の安定性は失はれません。日本人はあまりそれを意識してゐませんが、総理大臣に誰がならうと日本人はさう驚かないのです。このあひだのやうな騒ぎがあつても、あまり騒ぎません。これが大統領制だつたら、大変です。日本にはちやんと天皇がをられて国の定点を守り、あとは官僚組織が動いてゐる。基本的な安心感が、日本人にはあるのです。

幕末に黒船が来たときに、幕府は狼狽しました。ペリーのあとにさらにハリスが来て、通商条約を結べと要求した。ペリーとの和親條約はともかく、通商条約となると完全な開国でせう。幕府は軍事政権ですから、外国の軍事的圧力の下に屈服するといふことになれば、政権としての威信に關はります。そこで伝統的権威としての朝廷にすがつて、何とか幕府の威信を保持しながら開国しようとした。ところが朝廷が開国に反対だつたものですから、話が混乱して、幕府そのものが倒されます。

だからこのときは、幕府も尊皇でした。朝廷の力を借りて、幕府は延命を圖つた。孝明天皇の妹の和宮カフのみやに、御降嫁をねがひ出たりしたのです。しかも異例のことに、和宮だけは御降

嫁されても和宮でした。臣籍降嫁を、なさつてゐないのです。江戸城の中に、内親王としてをられた。

しかし、幕藩体制では、日本は外国の圧力に対抗できません。幕府を潰して挙国一致の国民国家を作れ、といふ聲が、先覚的な政治家のあひだに出て来ます。その場合、天皇を中心にする以外にない。これが尊皇倒幕でせう。明治維新は尊皇佐幕と尊皇倒幕の争ひでした。革命を仕掛ける方と反革命派とのあひだに、尊皇といふ一点で合意があつた。そんな合意がある革命は、史上珍しいのです。だから能ふる限り少ない犠牲であれだけの改革が、あれだけの大事業が、可能だつたのです。

国民国家の形成と明治天皇

慶應三年の大政奉還で、幕府は潰れます。そのあと新政府は、公家潰しにとりかかります。摂政や関白を一切やめてしまつて、それから大名を潰しました。大名の軍事力がなかつたら、倒幕は出来なかつたのです。それなのに、その大名を潰した。最後には、武士そのものをなくしてしまひます。七百年間続いてきた武家制度を潰しただけではなく、九百年以上続いてきた摂関制度も、つまり公家中心の制度も一掃したのです。要するに慶應三年の暮から明治

四年夏までの四年間のうちに、大政奉還から版籍奉還、廃藩置県と、国民国家の形成をしとげてしまつたのです。廃藩置県の年の秋には、もう品川から横浜まで汽車が走つてゐますし、新橋まで通つたのは、明治五年です。短い期間に、日本人に何故これだけのことが出来たか。

革命を推進したのは、一握りの開明派の政治家、官僚群でした。だからこの人たちは、保守派から憎まれ、次々に殺されてゐます。明治二年に横井小楠と大村益次郎が殺され、明治四年に広沢眞臣が殺され、明治七年には岩倉具視が襲はれて九死に一生を得ました。明治十一年には大久保利通です。次々に殺されて行きますが、明治天皇に刃向かふ人はゐなかつた。

もし明治天皇がをられなかつたら、どうなつたかと思ひます。鹿児島島の島津久光は將軍にならうと思つてゐたことが、松平春嶽が書き残した記録に明記されてゐるのです。島津が將軍にならうとすれば反対派が出て、さうなるとまた関ヶ原でせう。日本の内戦に乗じて、イギリス、フランスが入つて来たでせうから、大変な内戦が続いたことは明らかです。

明治五年に徴兵令が布かれますが、肝腎の兵隊を入れる場所がありませんでした。徴兵令が布かれたと歴史の本には出てゐても、実現は簡単なことではなく、徴兵制度による軍隊が完成するのは、西南戦争の頃です。実際上は兵隊がゐないのに等しい時代が、明治のはじめにはあつたのです。特に征韓論争が起こつて西郷さんが鹿児島に帰つてからは、政府軍はきはめて少数でした。天皇の威信だけによつて支へられたと言つても過言ではない時代が、何

年かつづきます。

敗戦のときでも、もし連合軍司令部が皇室を破壊してゐたらどうなつたか。当時の日本人の大部分は尊皇でしたから、何としても天皇を守れといふ人たちが当然出ます。反占領軍叛乱を、起こしたでせう。共産党は天皇制廃止を叫ぶ。それとは別に共和主義者もあらはれたでせう。国内は混乱して、経済復興どころではなかつたはず。その混乱が避けられたのは、伝統的權威は国の中心にあるといふ安心感、それが国民を支へてゐたのです。

日本といふ国は、アジアでシナ文化圏に属してゐない唯一の独立国として、少なくとも聖徳太子の時代から続いてまゐりました。それと同時に、世界で唯一つの祭祀王の伝統を、国民の中心の權威として、維持してきたのです。明治維新のときは、大急ぎで文明開化に踏切り、急いでやつたから勿論歪みも生じましたが、とにかく近代化に一応成功しました。清国や朝鮮は、それに遅れるのです。自分の国が一番上等だと信じ込んでゐる中華思想の立場から言へば、よそは全部蛮族ですから、そんなものを見習ふ理由はありません。

阿片戦争のときに林則徐といふ清しんの役人が、西洋の新しい軍事技術の書物を大量に漢文訳させてゐます。ところが、肝腎の清国人は、これを読まなかつた。読んだとしても、政府は応用しようとはしなかつたのです。これを一生懸命勉強したのは、むしろ日本人です。吉田松陰はわざわざ長崎まで来て、林則徐が訳したいくつかの本を読んで勉強してゐます。漢文

訳のものが日本に入つてきて、日本の近代化の基礎を提供したと言へるでせう。日本にはシナ風の中華思想がつよくなかつたために、近代化も早く出来たのです。

そして日本では、比較的古い時代から、天皇が権力ではなく權威となられた。政治の上の巨大な空白とも言ふべき存在に、なつてをられた。そのことによつて日本の国柄が、王朝の廃絶なしにつづき、明治維新のときでも敗戦のときでも、国民の団結の核となることが出来たのです。

死者の魂と神道

日本の文化の根底には、俗に神道と呼ばれて総称されてゐるものがあります。神道は一般的に言へば魂や自然に対する古い信仰の総称です。人間が死ぬと、魂はどこかその辺にさまよつてゐると日本人は思つて来ました。だから魂を、呼び返さうとする。これが魂呼びひです。魂は死者の遺体の近所をさまよつてゐると、我々は何となく感じてゐます。だから戦後何十年経つても、遺骨収集団が南の島に行くのです。一神教の場合は、さうではありません。例へばサウジ・アラビアでは王様が死にますと、砂の中に遺体を埋めて石を一つ置いておく。風が吹いて、砂漠ですから石が砂の下に消えて、もう誰にも王様のお墓がどこにあるか分ら

ない。それでいいのです。最後の審判のあと、また会へると思つてゐるのですから。

イギリスの兵隊の墓地が、シンガポールにあります。ちやんと名前も生年月日も分つてゐるのですが、遺骨を持ち帰らないのです。これも最後の審判のあと天国で会へると信じられてゐる、その慣習によります。ビルマの英軍墓地は、ペグーにあります。立派な大理石でつくられてゐる。日本人は、さういふことはしません。遺骨は、どうしても持つて帰らうとする。御巢鷹山で日航機が落ちてあれだけの人が亡くなつても、殆んどの遺体を弁別したでせう。大変な努力です。日本社会が、それを要求するからです。同じ頃南米のどこかで火山が爆発して、町が一つ埋まつてしまひましたが、町は掘らずに町全体をお墓にするとやつてゐました。日本人だつたら、何としてでも掘つてくれと言つたでせう。

日本人は、死者の魂に対してある独特な感覚を持つてゐます。自然に対してもさうです。それを我々は、信仰だとは思つてゐません。しかしこの感覚は独特な、理屈を超えたものです。したがつてこれはもう、一個の信仰と呼ぶ他ありません。

神道には、究極の神様はをられないのです。記紀を読むと、天照大神はお祭りをなさつてゐる。神様が自分を祭るはずはないのですから、天照大神も神に仕へる方だつたのです。今は先祖神になつてゐますけれども、では天照大神よりさらに上の伊邪那岐命、伊邪那美命はどうか。この二柱の神も最初、子供を産むのに失敗すると、天つ神のところへ相談に行つて

みます。ところが天つ神はどうせよと命令をするのではなく、占ひをされるのです。天つ神も判断出来なくて、占ひにたよる。つまり日本のすべての神々は、ある永遠のもの、ある無限なものに通じる通路と言へます。天つ神でさへ、さうだったのです。これが一神教と違ふところですよ。天意は占ひによつてしか知られないのでして、ある不定なもの、流動的な神聖性ですよ。

一神教とは、ただ一人の神を崇める宗教です。他の神を認めたら、一神教になつてしまふ。日本人みたいに何でもかんでも認めたら八百万やほよろづの神々になつて、本来の神様はどこへ行つたか分からなくなる。

日本には、七福神といふものがあります。七人の神様が、仲良く舟に乗つてゐる。一神教の世界に行つたら、一人の神様が残りの六人を海の中にたたき込んで、一人で宝船を占領するでせう。

とまれ神道しんどうは、日本人の体質の中に溶け込んでゐます。そこにインドの仏教が、大陸を通じて来しました。仏教は、魂たましひの存在を認めません。神道にとつては、魂は大事です。しかし日本人は、神仏習合といふ世界史に例を見ないことをやつた。仏教と神道とを、一緒にしてしまつたのです。興福寺と春日大社とは、同じものでした。延暦寺は日吉大社と同じで、延暦寺の僧兵が京都に押しかけるときには、日吉大社の御神輿をかついで行つたのです。日光は

初めは二荒山といふ修験道の山でして、ですから日光には東照宮とお寺とが一緒にあるのです。

さういふ風に、神社もお寺も一緒になつてゐる。さうすると教義上、どちらかが妥協しなければならぬ。結論的に言へば、仏教の方が妥協したのです。日本人はよく「仏作つて魂入れず」と平気で言ひます。ところが実は、仏さんは魂を認めないのです。死ねば全部無に帰するのが、仏教の教へです。ところが日本には、お位牌に魂を入れるための経文がある程です。全体としては、仏教の方が妥協してゐます。

儒教も、日本に入つてくると変ります。武家の時代に朱子学が入つてきますが、シナ大陸や朝鮮半島には例を見ないほど、「忠」の徳目を大事にする。これは日本の儒教の特色と言つて、差し支へありません。大陸の儒教とは、随分違ふのです。向かうから見ると本物ではない、といふことになるでせう。こちらは日本独自のものとして、これを形成してきたのです。神道と呼ばれるものが基本にあつて、そこに仏教や、儒教が重なり、その総体が日本文化を形成してゐるのです。そして天皇は、日本の祭祀王として国民の心とつながつてゐる。永遠なるものへの通路としての、祭司としての天皇です。究極神がない以上、祭司の役割が重要になります。

祈られる天皇——独自の国柄

最後に歴代の天皇がどんな御歌を詠まれてゐるかを、申し上げておきたい。

昭和天皇が、マッカーサーに向かつて言はれた有名な言葉は御存知でせう。天皇は本当に身を捨てて、国民を救はうとされた。日本の天皇は祭祀王として、神に祈つて来られた。祈る内容は、国民のため以外にないのです。そのために国民のために尽くすといふことが、日本の帝王学の伝統になつてゐるのです。例へば光厳院の御製の一つに、

寒からし民のわら屋を思ふにはふすまのうちの我もはづかし

寒いであらう、国民が住んでゐる藁屋根の家を思ふと、ふすまといふのは夜具ですが、夜具の中にある自分が恥づかしい。これは北朝の光厳院、北条氏が立てた量仁親王かすひとの御製です。北朝の第一代天皇が、かういふ歌を作られてゐるのです。ナポレオンがかういふ歌を作るだらうか。ツアーやルイ十四世が、こんな詩を作つたか。かういふ歌を作つた君主は、世界史上に例がないでせう。

天皇には国民のために神に祈るといふ祭祀王の伝統がありますから、さういふ帝王学が形

成されて来たのです。その帝王学があつたにせよ、先代の昭和天皇ほど本当に己をむなしうして国民のために尽くされた天皇は歴史上珍しいと思ひます。ライシヤワーが、『タイム』に当時書いてみました。「昭和天皇は最も長い間国民の上に君臨した君主であるだけでなく、史上最大の君主として記憶されるであらう」。そのとほりだらうと、私も思ひます。

ところで今は日本の経済力の巨大化から、いろんな意味で日本に対する憎悪、あるいは最低限に言つても摩擦が増えてゐます。日本は独立国としてとほして来ただけに、日本の文化は個性が強いのです。その独特の個性を私どもはそれが当り前だと思つて普段意識してゐませんが、これだけ国が巨大になりますと、外国から見れば異様に見えるのです。

しかし、日本人が日本の文化を捨てたときに、一体日本に何が残るのでせう。ただの商売人集団です。日本人が日本文化を捨てることによつて、何か独自のものが得られるわけではありません。何かのまがひものに、なるしかないでせう。イギリス人のまがひものか、ロシア人のまがひものか、アメリカ人のまがひものか。まがひものを、誰が尊敬しますか。私たちにとつて大事なことは、そしてそれは敗戦後随分おろそかにされてきたことです。日本の文化の伝統をはつきりと守りながら、しかもこれを国際的に通用する論理で説明して行く努力です。

そのためには自分たちの「歴史を」あるいは「歴史に」学ばねばならない。諸君は歴史を

勉強し、歴史のなかにはいつてほしいと思ふ。歴史のなかにはいつて、日本の古くからの姿に接することが、過去の日本人の生き方を自分で呼吸してみる事が、占領の頸枷くびかせから日本を文化的に解きはなすみちです。

そして日本の文化といふものを考へるときにおのづからぶつかつてくるのが、天皇といふ問題です。この天皇といふ、世界最古の祭祀王の伝統は、世界の宝でもあります。それを如何にして守つて行くかが、これからの日本に課せられてゐる最も大きな問題であると申し上げて差し支へないと思ひます。

これからの日本と
日本人について

元亜細亜大学教授

国民文化研究会理事長

小田村 寅二郎



小御所

(講師は、はじめの三十分で、明年のわが国の盛儀である「即位の礼」と「大嘗祭」について図解を入れて詳しく参加者に説明された。明年への心組みを整へてほしい、との願ひによつたものである。但し、ここでは紙面の都合で割愛させていただく)

一

初めに申し上げますことは、お手許に渡した資料をざつと読んでいくとわかりますが、二十一世紀を迎へる頃は、いまの大学生の皆さんは、大体三十歳前後の年齢におなりになる、まさにその時の日本の社会の中核的な存在となられるわけですから、お互ひにどういふ心組みで二十一世紀を迎へればよいかを、今のうちに考へを整へておかれたは、うがよからうと思ふ、といふことです。

そこで、考へられることは、これからの世界なるものと、その中に含まれる個々の国家との関係はどうなつていくのか、今と違つた何か根本的な変動が起りはしないだらうか、個々の国家といふものは過渡的な存在であつて、やがて世界は一つになつてしまふのではないか、などのことが気にかかつてくるのではないかと思ひます。それで、それに関する一つの例として、第二次世界大戦のあとのヨーロッパの情勢をお話することにいたします。

一九五七年のことです。それは昭和三十二年ですが、この合宿教室が初めて行はれたのは昭和三十一年でございませうから、この合宿がスタートした翌年、すなはち今から三十二年前の昭和三十二年に、フランス、西ドイツ、イタリア、ベルギー、オランダ、ルクセンブルグの六ヶ国が調印して作ったのが、「欧州経済共同体」(ユーロピアン・エコノミック・コミュニティ)、略称「EEC」でありました。その後にはイギリス、アイルランド、デンマーク、ギリシヤが加はつたのですが、なぜこの「EEC」が出来たのかと言ひますと、まづ、さきの六ヶ国は、お互ひの間に「関税同盟」を作らうではないか、今まではお互ひに貿易の制限をしてゐたが、それを撤廃して、一つの固まつた共同市場を作ると共に、加盟してゐる国々の間で資本や労働力の移動を自由にして、共通の経済政策を打ち立てていかう、要するに経済を統合していくことによつて、ヨーロッパ経済を一つの大きな単位にし、一つの巨大な共同市場の形成を目指さうではないか、といふのが、「EEC」が出来た理由でした。

何でそのやうなことを考へたかと言ひますと、当時の世界の経済界では、アメリカが一つ大きな勢力になつてゐたし、ソ連もまた、東欧圏をまとめて一つの経済単位を作つてゐる、その中間にあるヨーロッパが一つ一つの国がばらばらでこれに対応していつたのでは話にならんといふことで、ヨーロッパ各国は、経済上の自存自衛の気持からヨーロッパ経済共同体、「EEC」を作らざるを得なかつたのでせう。



それから、十年たちました。すなはち今から二十二年前の一九六七年、昭和四十二年、「EEC」を一番初めに作ったフランス、西ドイツ、イタリア、ベルギー、オランダ、ルクセンブルクの六ヶ国は「EEC」に代はる「欧州共同体」(ユーロピアン・コミュニティ)略称「EC」を作ります。今度は「エコノミック」 という字を抜いてしまひました。そして六年後の一九七三年にはイギリス、アイルランド、デンマークが、一九八一年にはギリシャが、そしてそのあと、更にスペイン、ポルトガルが加はつてをります。合計十二ヶ国が「EC」を構成してきたのです。しかし、「EEC」から「EC」に変へてみたものの、世界の経済の進展に照らし合はせると、どうもこのままではまだ不十分だ、と考へてのことでありませう、今から三年後の一九九二年に「欧州市場統合体」を設立しようではないか、と決議して、今その準備

を進めてゐるのが、今の欧州なのです。

それで、我々日本人はここ三十余年間におけるヨーロッパ諸国の推移を、どう受けとめるべきか、といふ問題に直面してゐることになります。これを欧州における諸国がやがて解体して統合への道を辿ると見るか、それとも、諸国間の協調する度合が濃くなるといふだけで、ヨーロッパの諸国はますます自国の歴史伝統をしっかりと相続するやう励むやうになるか、すなはち、各国家は解体、統合の道をたどるか独立存続は変らないか、そのいづれであらうかといふことを考へてみなければ、と思ふのです。

私はヨーロッパの諸国が統合体をつくらうとする考へは、このままではヨーロッパにある一つ一つの国が生きていけなくなるといふ考へ方が固まつたからこそ生れてきたのだと思ふのです。従つて今後経済を中心としての統合的形態は密度を増していくのでせうが、実質的には自国の存在意識を一層鮮明にしていかうとするのが、二十一世紀に向つてのヨーロッパの姿ではなからうか、と思はれるのです。それは、やがて欧州は一つの国になる、といふ話とは全然違ふのです。むしろ逆と見るほうが正しいのではなからうか、私はさう思つてをります。

二

そこで、レジメの二の所に入ります。「国家」間の関係を考へる場合に、忘れてならないことは、隣国、または他の諸国と対しての我が国の行き方には三つのことがあるといふことです。隣国や他国に脅威を与へることを侵略的行為と名づけるとすれば、他国の言ふなりに従ふことは屈從的行為と言ふことができませう。この二つのことが許されないといふことは誰にでもわかることなのですが、そのどちらでもない中間ともいふべきものが、一番大切な「独立不羈」といふものです。このことを現代日本人はともすれば忘れがちになつてゐます。独立不羈の「不羈」といふ字の意味は、『広辞苑』を引いてみますと、「縛りつけられない」、「束縛されない」、「おさえつけにくい」こととあります。要するに、人に縛りつけられない、一番自由な立場を保持し得てこそ、独立国であり得るし、それ故に国民は自由であり、従つて平和を享受できるのです。

われわれは戦後、自由でありたい、平和でありたいと口癖に言つてきましたが、それならば、自由と平和を生み出す基礎となる所の、国家としての独立不羈の精神が国民一人びとりの心の中に確乎不動のものとして確立してゐたか、といひますと、必ずしもさうではありま

せんでした。従つて、いくら口先で自由、平和を叫んでゐても、それだけでは自由も平和も実現しないのだ、と気づかねばならなかつたのです。要するに、自由とか、平和といふものは、自分たち自身で作らなければだめなのです。他人が作つてくれるものではありません。その所を忘れてゐたのではないでせうか。

そこで、「侵略」を非とし、「屈従」を非とするのが、現代日本人の目指すところであるといふならば、いま申した所の「独立不羈の精神」を尊び、これを身につけるべく努力するものが、これからの日本の青年男女でなければなりません。皆さんご自身がそのことを胸に手をあてて自問自答していただきたいのです。どうしたらこの日本の国を立派な国家に、そして世界の諸国と同じやうに「独立不羈の精神」のあふれる国に整へ直すことが出来るのか、それこそが、二十一世紀を迎へる前に私たちが心を静めて考へ直す問題であり、心を定めて努力し直すべき問題ではないでせうか。いまの日本も日本人も、国らしい国とは言へず、国民らしい国民ではなくなりかけてゐるのではありませんか。そこで皆さんがいま取り組んでゐる学問なるものもまた、このことを忘失しての理論構築では、時代にも適応できませんし、国家の発展に寄与することもできなくなりませう。どうかここに諸君の思ひをいたしてほしいのです。諸君は大学生ですから、大学でなされてゐる学問の内容がどうなつてゐるのか、その学問なるものの中に、この「独立不羈の精神」を鍛へるといふ大切なことが抜けてゐる

ことはないかを真剣に見究めてください。自分の国のことへの心くばりが忘れられて、単に人類の一員であるといふやうな立場から何かを覚えておけばいいといふやうな、全くふらふらした立場でいまの学問が展開してゐるのならば、取り返しのつかない損失になります。もし学園での学問がそのやうな有様ならば、諸君は諸君自らの努力でその欠けた所を身につけていかないと、二十一世紀のリーダーにはなれない、と心に銘じてください。

三

私は今日のお話を三つに分けてをります。はじめの三十分間は、明年行はれる「御即位の礼と大嘗祭」についてかなり詳しく知つていただき(この部分、この記録では省略)、次の三十分は、お手許に差し上げた資料をもとにした今までのお話がそれでした。そして残りの三十分間に、私が今日ぜひお話したいとかねがね考へてをりましたことをお話しします。

それは、一言で言へば「民主主義」といふ言葉が、さまざまの意味で混乱して使はれてきたことについて申し上げたいのです。戦後のわが国では、すべての人々が、「民主主義こそ我々の中心にあるもの」と無条件で言つてきました。しかし、よく考へますと、民主主義、民主主義と言ひ合つてはゐますが、本来は「三つの面」に分けて把へる必要があると思ふのです。

一つは、「精神・思想の面」で、二つ目は、「政治・経済における制度の面」で、三つ目は、「統治形態、国家存続の面」からとらへたもの、この三つの面それぞれを、別々に分けて見ていかうと思ひます、世間では、この三つの面がごちやませにされてゐるやうですから。

精神・思想の面にとらへる「民主主義思想」

この合宿の一番初めの日に、日産自動車社員の奈良崎修二さんが講義資料として皆さんに渡されたペーパーの中に昭和二十一年一月一日に出された昭和天皇の「新日本建設に関する詔書」がありました。この詔書は、昭和天皇さまが当時日本を占領してゐた占領軍から「天皇は神ではない」といふ内容の勅語を出せと命令されて、お出しになられたものです。その折、昭和天皇さまは御自分の御意志でその冒頭の所に、明治天皇が明治元年に出された「五箇条の御誓文」をお載せになつてをられます。（ずつと後になつて、記者会見の場で、昭和天皇はそのやうに仰言つてをられる）その「五箇条の御誓文」とは、

- 一、廣ク會議ヲ興シおこ萬機公論ニ決スベシ（大切な事柄は大ぜいの人々の意見を集めて決めなければいけない）

- 一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ(地位の上の者も下の者も一つ心になつて、国の行くべき方策を追求しなければならぬ)
- 一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメン事ヲ要ス(役人、武士からすべての国民まで、一人びとりがその志を達成できるやうにし、生きてゐるのがいやになるやうなことは、ないやうにしなければならぬ)
- 一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ
- 一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ

以上が、明治天皇がお出しになつた「五箇条の御誓文」で、昭和天皇はこれを右の「詔書」のはじめに引用なさつて、「これこそこれからの国民の向かふべき所」と申されたのです。民主主義日本の骨子はここにあると示されたのです。すなはち、昭和天皇さまの「民主主義の精神・思想としての面」についての確信宣言なのです。昭和天皇さまは、わが日本は、明治の初めから立派な民主主義でやつてきてゐるのだから国民は決して自信を失つてはならないよ、とご信念を吐露なさつたと思ひます。あの「五箇条の御誓文」に盛られてゐるものは、西洋流にいふ民主主義思想の内容に比して、決して遜色のあるものではございません。はるかに要約されたすばらしいものの一つといふことが言へると思ふのです。

そこで、上にこのやうな昭和天皇がゐらつしやつて、さういふお考へをお示しになつたことに、占領されたあとの日本の国民は、どれだけ支へられたかわかりません。今までわれわれが心に抱いてきた基本の教へは、五箇条の御誓文であり、大日本帝国憲法であり、明治天皇の下された教育勅語であつて、それらは明治天皇の尊い大御心に統べられてゐることを仰がれて、昭和天皇はその第一番目のものを占領軍に對し、この句を挿入することによつて堂々と提示されたのであります。恐らくこのことは、「御自分の命はどうなつてもいい、国民を救つてください」とマッカーサー元帥に對面された時におつしやつたあのお心の更に根底にある國體への信、と拝すべきものと思ひます。日本の歴史伝統、日本の祖国の永久の生命に對するこの御確信と御信從、信じ、從ふといふ謙虚な御姿勢から生まれた基本的な御方針であられたと思ひます。これからの日本では、占領軍が民主主義の精神的、思想的な意味における色々の教示をすであらうが、教へられることは教へられていいが、それだけを金科玉条と考へ、日本にはさういふものはなかつたなど考へぬやうに、とのすばらしいお諭しであつたわけです。よくよく心すべき所ではないでせうか。

政治・経済の制度の面にとらへる「民主主義制度―多数決原理―」

皆さん方が小さいサークルを作つて何かをしようとするときに、よく多数決で決めようといふとされます。そのことは、政治の世界でも同じで、町会でも、市会でも、県会でも、国会でも一つの議案に対して討議を尽したあとでは多数決で決めるのが常です。多数決原理といふ言葉は、近代になつて日本にはいつてきましたが、その内容は、日本人には決してなじみのないものではありませんでした。日本でも随分早くからそれをやつてをります。

しかし、物事を決めるのに多数決に依るのは良いにしても、討議の過程を不問に附したのでは大変な間違いを起します。明日の講義で長澤一成さんが聖徳太子の御本の輪読について導入講義をなさいますので、あるいはその折に触れられるかも知じませんが、聖徳太子といふ方も、多数で事を決めることを承知なさつた上で、その点を「十七条憲法」の中で教へ論されてをられます。すなはち、その第一条の中の一句に、「上和ぎ下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは、事理自おのづから通ふかよ、何事か成らざらん」と申してをられます。その意味は、事を分けて、お互ひに話し合ひなさい。その場合に、地位が上の者、下の者といふ地位にとりなふ権力関係から生じやすい脅威や威圧が作用してはならないので、さうしたものを心の中から

撤去して、一人一人の人間同士として話し合ひ、論じ合ふにふさはしい対等の立場に心を整へてから討議しなさい。権力とか、地位とかの障害、すなはち人間同士の外的な差別を撤去して話し合ふといふことができたなら、「事理おのづか自から通ふ」、物事の道理は道理どほりに解決がつくはずだ、といふのです。さうであれば、「何事か成らざらん」、どんなことでも、できないといふことはないであらうと仰せられたのです。

聖徳太子がこの「十七条憲法」を書かれたのは、推古天皇十二年、西暦六〇四年ですから、今から一三八五年前、ほぼ一四〇〇年近く前ですが、すでに今日いはれるデモクラシーの制度、システムとしての良さにプラスアルファをしたものを、いなプラスアルファといふよりも、多数決原理が求めてゐる理念そのものを実行に移すに際しての、肝心かなめのポイントを、すでに明示されてゐるではありませんか。実にすごいぢやないですか。民主主義における多数決原理そのものは一つの制度・方便です。いくらよい制度であらうとも、その運営に當つて、政治の派閥原理が頭をもたげてきて、多数を取つてしまへばそれでもう勝ちなんだ、そこから先はもう真剣に討議しなさいですませてしまふ。正に日本の政界はさうだし、自民党自体もさうらしいです。社会党もどうも同じらしい。政党が、民主主義といふ政治制度を単に形式的に踏むことだけに忠実ならば、これをしも立派な民主主義の制度と言ひ得るかどうか、大變に疑問の湧く所です。本来、国民を代表する人たちが、庶民の祈り、願ひ、を胸に

よみがへらせつつ何が正しいかの討議を十分にしてくれるべきもの、そのために国民は国会に議員を選出してゐるのではないでせうか。ところが、その国会議員たちはその席を取つた以上、もう討議へのあるべき姿勢と義務とを忘れてしまふし、そのために心をくだくことも、研究もしないので。国民の祈りなどとうの昔に忘れてしまふのです。それがいはゆる多数決原理なるものの一大欠点であることを、一四〇〇年前に聖徳太子は完全に見抜いてをられたのです。

太子はまた、その第十条の中の一句でかうも言つてをられます。すなはち、「あひも相共に賢愚けんぐなること、みみがね鑕の端無はじなきが如し」と。人間はお互ひに賢くもあり愚かでもある。人間はみんなお互ひに欠点だらけなのだ、だからこそ、お互ひに心を尽して助け合はなければ、この世は良くなならない、と強く言つてをられるのです、一四〇〇年前に。

要するに、政治制度としての民主主義―多数決原理―を、立派な政治制度と考へられるにしても、中味がどういふ運営をされてゐるか、その中味の問題に移していかなければならない、これをおろそかにしてはならない、といふのが私の二十一世紀に向かふ大切な課題とする見方なのです。

統治形態・国家存続の面にとらへる「民主主義の国家形態」

三つ目は、前二者にまして、とりわけ我々日本人にとつて一番大切な問題なのです。

共産党はじめ一部政党、進歩的文化人と自称する人たちは、戦後の日本は、天皇制を残してゐる限り、民主主義国とはいへない、と言つてゐます。天皇及び天皇家を国民と同列にするまでは、日本の民主主義は不完全だ、との主張をくりかへしてきました。この主張は、果して容認できることでせうか。

統治形態の面における民主主義を考へてみますと、普通に理解される所は、その国の代表者、例へば大統領もその一つですが、この大統領を選挙によつて選出します。全国民の投票では大変ですから、直接選挙ではなしに、国民が前以て選んだ代表者たちによる投票、間接選挙によるのが多いやうです。かうした方法が生まれた背景には、自分のことだけを考へる専制君主や私利私欲に走る王様が、勝手放題のことを国民に無理強ひしたりしたこと、ヨローロッパの諸国民はこれではどうにもならないから何とかしようとして、知恵を絞つて考へ出したのが、統治形態としての民主主義であつたのです。

これに対して、わが日本の国は遠い昔から天皇を中心にした、いはば一大家族国家ともい

ふべき独特な統治形態の国として続いてきました。戦後の「日本国憲法」(それは占領軍によつて強制的に押し付けられたものではありませんが)によつて、今は主権は天皇ではなく国民にある、とされて、民主主義の国といふことになつてをります。しかし、さうはいつても、その第一条は「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く」とあり、「天皇の地位」は国民主権が決めたこと、と明示してゐるのです。といふことは、日本は民主主義の国ではあるが、天皇を国民の上にいたゞいたるる国、といふことになつてゐるのです。大統領をキャップとする一般にいふ民主主義国家とは、一味も二味も違ふ国なのです。「日本国憲法」の第一条が、そのことを明示してゐます。大学生諸君も、どうかこの点をよくわきまへ、更に進んで、なぜ憲法第一条がそのやうに決められてゐるのかといふわが国の歴史的背景を是非とも理解していたゞく必要があらうと思ひます。

それで、わが国の長い歴史の中で、天皇と国民の間柄には一貫して、全く変りない一つの姿が見出されます。天皇は、国民を大御宝(おほみたから)と仰せられて、常に御自分のことよりも先に、「国の安らかなこと」「国民に幸(さち)あること」とを、御祖先の御神靈、天地神明に祈りつづけて来られました。また国民の上にお立ちになるお心も、その祈りのお心と同じもので慈愛に満ちたものであられましたから、この日本の国柄については、古くから「祭

政一致の国」と申ししてきたのです。祭政の祭は、神に祈られるお心、政は統治者として国民に對せられるお心、この二つが同じものであられたが故に、祭政一致の国と申したのでありませう。天皇のこのお心が連綿として歴代天皇にうけつがれてきましたことは、歴代天皇が詠まれた沢山の御製を拝読することによつて、皆さんご自身の胸の中に、なるほど、との同感がきつと湧いてくるはずです。さうした勉強も大学生として大切な勉強だと考へて下さい。天皇がなさるお祭りごとの、最も大事なものが、先刻くはしくお話した明年の大嘗祭ですし、また一番古い御祖先であられる天照大神を齋（いつ）きまつる伊勢神宮については、二十年毎に御遷宮と申してお社を造りかへて今日に至つてゐますが、このことなどは、外国では到底思ひも及ばぬことでせうが、わが民族はこれを天皇と共に行つて今日に到つてゐるのです。このやうな天皇が上にをられるのですから、われわれの祖先たちが、天皇を大御親（おほみおや）と讃へ、仰ぎつづけたのも、人の情として、当然すぎるほど当然のことであり、それゆゑに「君民一体の国」とも申したわけでありませう。従つて日本国民が終始「独立不羈の精神」をもちつづけた背景には、天皇をお護り申し上げる心が、その根底にあつたといふことが出来ると思ひます。

昨日の村松剛先生のお話の中に、日本人の英知と智恵は、天皇といふ制度を持ちながら統治・政治について、権威と権力を二つに分けて存在させるといふ智恵を生み出し、それを

長い歴史を通じて尊い経験として身につけてきたと御指摘になれましたが、私もまた、そのとほりだと思ひます。幕府政權も何百年かありますが、その間常に時の天皇から「征夷大將軍」の辞令をいただき、天皇は天皇としての權威を持ちつづけられて、「国と民」との安寧を祈りつづけられ、国民はその大御心をお慕ひ申し上げつづけてゐたのです。現代のわれわれが持つ民主主義はかうした国柄を含むものであつて、君主が信用できないために生まれた西欧の民主主義とは、全く異なつてをりますし、その異なつてゐる所に、われわれの誇りがあつて然るべきではないでせうか。

日本にあるべき民主主義は、さきにお話したやうに、「精神内容的」には「五箇条の御誓文」にそのエキスがこもつてゐることに気づき「政治、制度的な面」においては、西欧と同じく多数原理によりはするものの、聖徳太子のお諭しに添ふ努力を怠らぬことを心がけ、そして「統治形態における民主主義」に關しては、いま申し上げた日本文化の宝ともいふべき天皇のご存在を、深く心に確認して進みたいものです。日本に存続してきた天皇を中心とする国柄、そして天皇の大御心なるものは、外国人には理解できかねないでせうし、心のうちに実感することはありませんから、外国人を責めるべき問題ではありません。ただし、それを知らない外国人が日本人を無知蒙昧の民と考へるのは勝手ですが、日本人でありながら、日本の歴史伝統を忘れて西欧的民主主義のみが最高と考へ込んでしまつた日本人、多くの日本の

知識人は、今こそ、自らの「錯覚」に気づき直す時期がきてゐると思ひます。それがさきに私が強く申し上げた「独立不羈の精神」の奪回といふことなのです。それができないやうなことは自民党にいくら新しい首相が出てきても、日本は一向に良くはなりません。また、社会党の天下になればもつとだめになること必定です。日本の国柄を誤解してゐる人が余りにも多い政党ですから。

一方、平成の御代を迎へた今、新しい天皇さまのことをお偲び申し上げますと、憲法第一条にかくも明示されてゐる重大なお立場にあらねながら、それにふさはしいお助け申し上げます。スタッフを周囲にお持ちにならないやうに見うけられます。昨日、村松さんは「おかはいさうだ」と、申されました。私も本当にさう思ひます。ご健康さうではあられるが、決して頑強なご体格とも見られない天皇さまです。この方を大切にお守り申し上げ、お助け申し上げ、かつ、天皇のおそばには本当に立派な学者たちや、ご相談相手の人たちを配置申し上げるべきです。「独立不羈の精神」に目覚めた政治家たちがなすべき行為だと思ふのです。それも欠落してゐる今日の日本です。

更に具体的に申し上げますと、それだけ重要な皇室を保持するお役所が宮内庁といふビュローですが、どんな地位に置かれてゐる役所と思ひですか。ほかの重要な役所は全部「省」といふ名です。宮内庁は「庁」ですからその長官といへども、各「省」の大臣よりもずっと

格が下でしかありません。各「省」の次官よりも格下です。そのやうな権威のない役所だけで、天皇の輔佐を申し上げてゐるといふ現状は、まことに天皇に対して許しがたい行政措置でなくて、何と申せませうか。自民党の政治家の誰一人、この問題を提起してをらぬのですから、まことに情無い次第といふほかはありません。

時間がまわりましたが、最後にかねて考へてをりますことを一つだけ申し上げておきたいと思ひます。

付言、「数へ年」について

戦前は、今のやうに「満年令」ではなく「数へ年」で年令を数へました。お正月には、老いも若きも歳を一つかさねます。日本人すべてが一緒に歳を足すのですから、それはそれは、うれしいお正月でした。国民同士はお正月の挨拶に、お互ひに「今年もどうぞよろしく」といひ合ひますが、心気一転の気持ちでの挨拶も、真実味がこもつてきます。「昨日までのことは忘れませう」といふことで、国民が一つの新しい踏み出しを始めることができたのですから。

数へ年について、いま一つ申しますと、七五三といふお祝ひがあります。あれは「数へ年」

で七・五・三だからこそ、かわいい子どもにふさわしいものなのですが、「満」でやつてゐる今の七・五・三では臺とうの立つた子どもたちになつてしまつてゐます。(笑ひ)七・五・三のお祭りに肝心の子ども自身の姿が合はなくなつてゐます。だから、「満」でするなら、七・五・三は六・四・二に変へなければだめでせう。それを直す勇氣がないから、七・五・三は七・五・三のままやつてゐて、「満」でやる。そんな臺の立つた子どもたちでは、神さまは喜んでくださらないかも知れませんよ。(笑ひ)

『聖徳太子の信仰思想と
日本文化創業』 輪讀の導として

福岡・浜の町病院内科医師

長 澤 一 成



小御所・東廂

著者黒上正一郎先生

黒上先生の學問と津田左右吉氏の述懐

輪讀に就いて

聖徳太子の思想、信仰の結實——『日本書紀』から

著者黒上正一郎先生

一介の醫者に過ぎない私にとつて、聖徳太子やこの『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に就いて話をするといふのは、任に餘る事ですが、「一寸の虫にも五分の魂」といふ言葉があるやうに、私なりの「五分の魂」で話をさせて戴きます。

まづ、この『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の著者、黒上正一郎先生に就いて觸れておきたいと思ひます。

先生は、明治三十三年、四國徳島に生れ、昭和五年、僅か卅一歳といふ若さで此世を去られました。先生の墓處は故郷徳島にありますが、その傍に、有志の手になる碑が建てられています。その碑文には、先生の人となりが實によく表はされています。

「黒上君之碑」

あゝ、黒上君逝けり。何ぞ天、才を奪ふの早きや。君、名は正一郎、徳島市西船場街の人。考(父親)を益一と曰ふ。母は三木氏。少くして穎悟(さとく賢く)学を好む。初め徳島商業学校の業を畢へ、阿波商業銀行に入る。是より先、君自ら感ずる所有りて仏道に志

す。学匠（学者）井貝智見師に就きて諸經典を修む。師、徳高く識博く、人に可として許すこと少く、独り君の操守の堅きを喜び、以て大成を期す。既にして銀行を辞し、専心学に従ひ尤も、聖徳太子を尊信し、其の学を講明し、教へを興し道を弘むるを以て志と爲し、刻苦研鑽、積年倦まず。

黒上先生の最終學歴は商業學校であります。太子研究や歴史研究を専攻する大學等には進んでいらつしやらない。詰まり、この研究は全て独學でなされたものなのです。この研究による名譽榮達は勿論の事、これによって生計を企圖された譯でもありません。たゞ、自分が生きる事の意味を問ひ続けるために、獨りで太子の研究を續けられたのです。

東京帝国大学教授入澤博士宗寿の、事を以て来遊するに会す。君訪ねて説を質す。博士其の篤学に感じ、遂に君を大学に招く。其の濫畜する所を講述すること数次、造詣の深き、間、前人未発の見有り。聴く者驚嘆す。君の名大いに著はる。人言ふ、太子の学は君を推して第一と爲すと。

偶々、東京大學教授の入澤宗壽先生に会する機會を得た黒上先生は、太子研究に關する様々



な質問をなさつた。入澤教授は、この若き篤學の士に面接し、心打たれるものがあつたのでせう。逆に、東京大學に來て講演をして欲しいとの依頼をした。かうして、大正十五年十月廿日、昭和二年十月廿日、そして、昭和四年三月と三回に亘る黒上先生の東京大學に於る講演が實現したのです。

（中略）皆君と交はるを悦び、而して諸生徳を慕ふ者相謀りて其の教導を受く。其の第一高等学校に在るは昭信会と曰ひ、東京高等師範学校に在るは信和会と曰ふ。

このやうな講演活動や研究會を通じて、先生の研究成果にはなく、その姿勢に魅せられた學生達が先生の下に集り、昭信會、信和會といった研究會が學内に出来しました。この昭信會、信和會といふの

は、國民文化研究會の前身でもあり、小田村寅二郎先生を始め、諸先輩方が學生時代に、此處で聖徳太子の教へを學ばれたのです。

君すなはち之を 聖徳太子の遺教に稽^{かんが}へ、又、之を 明治天皇の大訓に照らし、誘掖懇到^{ゆうえきこんたう}（懇切ていねいに導き）躬行（自ら先き立つて行ひ）之を率ゐる。諸生心服して視ること慈父の如しと云ふ。昭和五年九月二十一日病を以て没す。享年僅かに三十一。弔ふ者皆曰く惜しい哉此の篤学の士を失ふと。佐古清水寺に葬る。未だ娶らず。君、平生知を近角常觀師に受く。師諡を命じて敬信正法居士と曰ふ。人と為り温雅にして、恭儉長に事へ、友と交りて藹然^{あいぜん}（氣持が和らぎおだやかなさま）として情誼有り。體本強健ならざれども學を好み、道を求むるの篤きこと、數寢食を廢す。友人或は其の生を傷けんことを恐れ、勸むるに少しく休養するを以てするも、君意に介せず。遂に病を獲て起たず。學に殉ぜりと謂ふ可し。（後略）

この碑文は、國民文化研究會とは何の縁もない方の手になるものですが、黒上先生の生き方を實に端的に表はしてゐます。

ところで、この「黒上君之碑」は「黒上正一郎先生の歌と消息」（國民文化研究會刊行）の最

後に収められてゐます。この本の詳しい紹介は割愛させていただきますが、この本には、先生の短歌が多数収められてゐます。そして、その殆んどが、深い友情の歌なのです。この本を繙くと、黒上先生の太子研究が生れ出た源泉を見る思ひが致します。この事は、是非心に留めて置いて戴き度いと思ふのです。

黒上先生の學問と津田左右吉氏の述懐

二日目の國武先生の御話しの中に、津田左右吉博士の名が出て参りました。この方は、大正から昭和に懸けての日本歴史學界の泰斗であります。膨大な論文、著作があり、その研究方法や成果は、現在の歴史學の底流をなしてゐるものです。黒上先生も、ほとゝ同時代に活動してをられた譯ですが、片や早稲田大學教授で學會の泰斗、片や商業學校を卒業しただけで、獨学で研究を続ける一学徒、同時代に生き、同じ歴史を研究する道を歩んだとはいへ、外的な懸隔は余りに大きな二人でした。

その津田左右吉氏の全集の月報に、津田氏の弟子である原隨園氏が「津田博士の読書」と題して次の様な一文を草してゐます。（津田左右吉全集第二卷附録・岩波書店刊）

ある秋の夕方お邪魔したときには、虫の声がしきりにきこえていた。そのとき津田さんはしみじみとした調子でいわれた。じつくりとしばらく本が読んでみたいと。

あなたは年中読書をしていられるじゃないですかとわたしがいうと、いや、本を読んでも、何か材料（材をサイといわれるのがくせだ）にしようと思って読んでいるんで、まるで、守銭奴が金をためようとするのと同じだ。そんな気持ちでなくて、本が読みたいと思うんだということであつた。

そのうちに、今ないている虫の名を、君知ってますかときかれたが、わたしは、気分がちついていれば、可愛い声でないと思うし、でないときには気にもとめません、ですから、虫の名前などに興味はもちませんと答えた。

すると津田さんがいわれるには、鈴虫とか松虫という名は、どうも時代によって名前があべこべであつたらしい。自分は虫の声をきいても、あれは何という虫だろうかと気になるし、時代によって名前がちがうと、王朝時代では何といったかと調べてみたくなる。虫をきいて、虫の声だけに興味もてるというのが羨ましい。こんな調子だから、本を読んでも、ほんとうの読書にならないんだといわれた。

こういう読書の仕方については、京都の狩野君山さんが、ある国史の先生にいわれたという話を思い出す。君の本の読み方は、猟師が獲物をおっかけるように、書物の中から獲物を

あさっているんだ。本を読むことにもならんし、読んでも面白くなかうと。

澄んだ虫の聲を背景に「しみじみとした調子で」語られた「じつくりとしばらく本が読んでみたい」といふ津田博士の言葉は、實に感慨深い言葉であります。此の一文を讀んでゐると「學問的」とは何かといふ問ひが自然に湧いて來ます。將に「獵師が獲物を追つかける」やうに資料を蒐集し、實證と批判を嚴密に繰返した果に津田博士の論文は成つた譯ですが、この方法は、取りも直さず、近代日本に於る歴史研究、いや、広く學問といはれる物が纏はなければならなかつた衣装でもあつたのです。斯様な風潮の底流には、科學といふ學問の一分野といふよりは、一手段に対する過信と憧憬が抜き難く存在してゐるのです。文献資料といふものを客觀的に、批判的に見るといふ道を徹底して行つた津田博士の晩年の述懐は、この様な方法に重大な問ひを投げ懸けてゐると思はれてなりません。

では、黒上先生にとつての學問、研究とはどういふものであつたか。それを知る便として『日本への回帰 第廿三集』に収録されてゐる副島羊吉郎氏の「黒上正一郎先生の思ひ出」といふ文章を讀んでみませう。副島氏は、黒上先生の生前の姿を實際に御存知の方で、以前この合宿教室で、御自分の眼で見た黒上先生のことを御話して下さつたのです。

先生は時々徳島から東京に出て来られては又徳島に帰られるのですが、東京では東大の前の西片町の桜館といふ旅館の六畳の間にいつも泊まってをられました。その頃、学内でも数人の友人と共に毎週一回の例会を始めてをりましたが、私たちはそこへ訪ねて行つて話を聞いてをりましたけれども、床の間にはいつも聖徳太子の肖像が掛けてありました。先生はそこにお供へ物をして、朝晩香を焚いてゐらつしやいました。先生は、自分は三経義疏を読んでゐて、どうしても難解でわからないところにあたたび出会ふ。その時は香を焚いてお祈りをするんです。さうすると不思議にわかりますねといふことをおつしやつてゐました。先生は、全身込めて聖徳太子にどうぞ教えて下さいとお願ひされてゐたのだと思ひます。

難解な箇處に至ると太子の像の前に座り香を焚いてぢつと祈る、此れが黒上先生にとつての學問であつたのです。正確な讀解、資料の蒐集、そしてその實證的解釋が重要なことは言を俟ちませんが、歴史研究の大事は、結局は語り手の心に、讀み手がどれ程近づけるかが勝負である、さういふ事を思はされる姿です。これこそが津田博士の語つた「じつくりと」本を讀むといふ事ではないのでせうか。換言すれば、黒上先生の學問は、「聞く」といふ事だつたのです。私達は、自分を主張する事が學問であると思つてゐるが、先生にとつては、太子

の声を聞く事が學問そのものだったのです。嘗て、荻生徂徠は、古書吟味の要諦として、「之ヲ思ヒ、之ヲ思ヒ、之ヲ思ツテ通ゼズンバ、鬼神マサニ之ヲ通セントス」といふ言葉を残しましたが、本来、學問といふ言葉は、自らの生き方を問ふことを言ひ、それは又、人の声を聞く事であり、決して獵師が獲物を追ふやうに資料を蒐集し、その説を主張するものではなくつたのです。

黒上先生の研究活動は、科学を學問の至上の姿と考へ、科学を標榜し、自らの説を主張する事に努力を傾注してゐた当時の學會、知識人に対する問ひ掛けであり、何故私達は歴史を學ぶのかという原初的な問ひに立還つての果敢な戦ひでもあつたのです。

輪讀に就いて

私達が今から取組まうとしてゐる輪讀といふ研究形式も、實は、この「聞く」といふ事に基本を据ゑたものなのです。私達は、普段「聞く」といふ事は受動的な行為で、話すといふ事は能動的な事だと思つてゐる。聞く事は簡単だが、話す事がむづかしいと考へてゐる。それ程、聞くといふ事を意識して反省してみる事がないのです。しかし、實際には、相手の声を恣意を持たずに聞くといふ事は、実に困難な事です。輪讀では、其處にゐる人の言葉を聞

き、作者の言葉を聞き、恣意的な解釋にとゞまるのを戒め合ふ。さういふ、聞く姿勢を互ひに求めてゆくのが輪讀といふものなのです。又、輪讀に参加してよく思ふのですが、例へば、讀みを間違へないといふのは讀書の基本です。誰かが讀んでゐて讀みを間違へた時には即座に訂正するのが輪讀です。處が、自分の心が集中してゐない時には、その訂正が中々出來ないので。さういふ時に、ハツと気付かされる事があります。そして、皆で一つの文章に向つてゐるうちに、何の躊躇もなく訂正の聲が出る様になり、バラバラだつた一座の氣持が一つになり、眼の前の言葉に向つてゆく、それが輪讀といふものだと思います。

聖徳太子の思想、信仰の結實―『日本書紀』から

黒上先生の御本に入る前に、聖徳太子といふ方に就いて、皆さんはどれ位の事を知つてゐられるでせうか。私が皆さん方の時は、太子に關しては、殆んど何も知りませんでした。勿論、冠位十二階を制定された事や憲法十七條を制定された事ぐらゐは知つてゐましたが、外的な事のみで、太子が何を凝視し、何を思ひながら時代を生きてゆかれたのかを知るのには、この集りに参加してからの事でした。その太子の思想・信仰が具體的に表現された、しかも、結實といふ言葉を使つても良いと思はれる様な出來事が、『日本書紀』中に記されてゐる、山

背大兄王の最期と上宮王家滅亡の悲劇だと思ひます。

太子には山背大兄王を始め、一族廿数名の家族があり、太子若年の頃の宮を上宮と呼んだところから、太子一族を上宮王家と呼称します。当時蘇我一族が強大な権力を有し、専横を極めてゐた事は御存知の通りです。此の蘇我一族と太子は近い姻戚であつた様ですが、六二二年二月に太子が亡くなり、又、六二八年には、太子が摂政として御仕へした推古天皇も崩御され皇位繼承問題が出来ます。片や太子の子息山背大兄王、對して、蘇我氏の推す田村皇子でありました。その頃の蘇我一族の指導者蝦夷の行動を書紀はかう記してゐます。

九月に、葬禮を畢りぬ。嗣位未だ定らず。是の時に當りて、蘇我蝦夷臣、大臣たり。獨り嗣位を定めむと欲おもへり。顧みて群臣の從はざらむことを畏る。則ち阿倍麻呂臣と議はかりて、群臣を聚つどへて、大臣の家に饗あへす。

文中「獨り嗣位を定めむと欲へり。」の「獨り」といふ言葉に注意して下さい。蝦夷、入鹿の行動に対して書紀は何度もこの「獨り」といふ言葉をつかつてゐます。当時の人々の眼に蘇我一族がどう映つてゐたかを伺ひ知る事が出来ます。推古天皇は臨終近く、山背大兄王を呼び寄せ、彼に後事を託しました。山背大兄王は、蝦夷の話が余りにも恣意的なことに憤り、

幾度も伺ひをたてるが、結局、言を左右にし、力に物を言はせて田村皇子が舒明天皇として即位されます。この年、境部摩理勢死すといふ記述が見えます。摩理勢は蘇我馬子の兄弟に当り、蝦夷からみれば伯父になる譯です。この摩理勢は上宮王家に従ひ、即位問題に就いても終始、蝦夷の横暴を批判し、為に蝦夷の反感を買ひ、戦ひにならうとします。しかし、その時に山背大兄王が摩理勢に向ひ、父太子の遺言を語るのです。それは、「諸々の悪しきことをなせそ、良きことを行へ」といふ言葉でした。戦端を聞けば國中の人々が疲弊する。父を偲ぶ心があるのならば、その教へに従ひ矛を収める様にと説得した譯です。これを聞いた摩理勢は軍を興す事を諦め、蘇我の軍を路上で待ち自刃して果てます。かうして権勢の絶頂に立つた蘇我氏は以後十年間、日本の政治を恣いまゝにします。この間、書紀の中からは山背大兄王始め上宮王家の記述は殆んどなくなり、僅かに皇極元年、蘇我氏の墳墓造成に上宮王家の領民が勝手に使役された事に対して山背大兄王が強く抗議したといふ記述があるのみです。この間、山背大兄王が何をしていらつしやつたかは知る由もありませんが、舒明天皇が崩御され、再び後継問題が生じた時に次の様な記述が出て参ります。

戊午に、蘇我臣入鹿、獨り謀りて、上宮の王等みこたちを廢すてて、古人大兄ふるひとのおほえを立てて天皇とせむとす。

蘇我臣入鹿、深く上宮の王等の威名ありて、天下に振ますことを忌みて、独りひと憚おそひ立たむことを謀る

又しても「獨り」といふ言葉が眼に止ります。十年以上に亙つて権力と離れた場處で、歴史の表舞臺に登場する事なく生きて來られた山背大兄王を蝦夷が如何に恐れてゐたか。逆を言へば、権力を持たぬ上宮王家が如何に大きな無形の力——國民の信賴——を得てゐたかを偲おもはせる文章です。扱あつて、此處に上宮王家討滅を企圖した入鹿は、遂に軍を興し斑鳩に大兄王一族を討たしめます。家臣等が應戦しますが、利あらず、此の時、大兄王は、寺内に馬の骨を残し、一族郎黨、秘に生駒山中に逃げ潜みます。それとは知らず、蘇我軍は斑鳩寺に火を放ち、焼跡からみつかった骨を見、王の死を入鹿に報告します。數日の彷徨の後、王の家臣である三輪文屋君がかう進言します。

三輪文屋君、進みて勸めまつりて曰まさく、「請ふ、深草屯倉に移向ゆきて、茲こゝより馬に乗りて、東國いたに詣りて、乳部みぶを以て本として、師いくを興して還りて戦はむ。其の勝たむこと必じ」といふ。

これは、決して空言ではなく、國民的な支持を受けてゐる山背大兄王にとっては、十分可能性のある事でした。しかし、それに対して大兄王は次の様な言葉で應へます。

山背大兄王等對へて曰はく、「卿が善ふ所の如くならば、其の勝たむこと必ず然らむ。但し吾が情に蕘はくは、十年百姓を役はじ。一の身の故を以て、豈萬民を煩勞はしめむや。又後世に、民の吾が故に由りて、己が父母を喪せりと言はむことを欲りせじ。豈其れ戦ひ勝ちて後に、方に丈夫と言はむや。夫れ身を損てて國を固めば、亦丈夫にあらずや」とのたまふ。

これが数日の間、山中で「得喫飯らず」、自らの生き方を考へ續けた末の決斷だつたのです。かうして上宮王家の人々は、全員死を覺悟して、再び斑鳩寺に戻つたのです。葬り去つたばかりに思つてゐた山背大兄王の生存を知つた入鹿は、又軍勢をもつて斑鳩寺を包圍させたのですが、書紀には入鹿の恐怖と狼狽をよく描いてゐます。そして愈々上宮王家最期の場面になります。

是に、山背大兄王、三輪文屋君をして軍將等に謂らはしめて曰はく、「吾、兵を起して入鹿

を伐^うたば、其の勝たむこと定^{うづむ}し。然るに一つの身の故に由りて、百姓を残り害^{やぶ}はむことを欲^ほりせじ。是を以て、吾が一つの身をば入鹿に賜ふ」とのたまひ、終に子弟^{うから}、妃妾^{みめ}と一時に自ら經^むきて俱に死せましぬ。

上宮王家の最期に関する書紀の記述は簡潔で、強い意志を感じさせます。「諸々の惡しきことをなせそ、良きことを行へ」といふ教へを貫き通した山背大兄王、そして上宮王家の人々は此處に全て自害して果てたのです。太子の傍にあつて、太子の言動を具に見ながら育つた大兄王の心の中では、太子の言葉を胚子として自らの生きる道が萌芽し育つて來たのでせう。そして、その生き方が、書紀編纂者を始め多くの日本人の心を動かし、太子の言葉は死滅する事なく、新たな命を得て今日迄生き續けてゐるのです。このやうな歴史を見てゐますと、言葉^{ことば}を聞くと、自分の生き方を決めてゆく事であり、よく学ぶといふ事は、よく生きる事になければならないと思はされます。先に述べましたが、私達は「學問的に」といふ風潮の中にあつて、眞の學問を見失ひ、例へば科學的な方法といふものに振回はされてゐる。大學で學ぶ事や、人生を渉る手段は、一人一人皆違ふ譯ですが、その基盤となるべき學問、「聞く」といふ姿勢に支へられた學問を、今、私達は回復しなければならぬと思ひます。

今日、皆さんが輪讀される黒上先生の御本の中に、太子の「片岡山の御歌」と呼ばれる歌

に関する箇所があります。歌は、『日本書紀』に収められてゐます。

「二十一年冬十二月庚午の朔の日、皇太子、片岡山に遊行しき。時に飢ゑたる者道の垂に臥せり。仍りて姓名を問ひたまへども言さず。皇太子、視て飲食を與へたまひ、すなはち衣裳を脱ぎて飢ゑたる者に覆ひて言りたまひしく、『安らかに臥せ』と宣りて、歌よみしたまひしく、」として、

しなてる 片岡山に 飯に飢て こやせる その旅人 あはれ 親なしに なれなりけ
めや さすたけの 君はやなき 飯に飢て こやせる その旅人あはれ

この歌に関して、黒上先生は、「こ、に我は他に没し、他はまた我に生きて人生の大海に無限安慰の光明をめぐませ給ふのである。」と書いていらつしやいます。

二日前、山田先生の御講義の中で昭和天皇の御製が出て参りました。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

昭和廿年、終戦時の御製四首の内の一首です。そして、マッカーサーに宛てた伊藤たか氏

の書簡を紹介して戴きました。この姿は、その儘、片岡山の御歌に表はれた、太子と飢ゑ人の姿であり、山背大兄王の「吾が身一つを入鹿に賜ふ」といふ御言葉とかよひあつてゐます。長い歴史を通じて貫道するもの、それに觸れる事が自分自身の中にある日本を知るといふ事ではないでせうか。

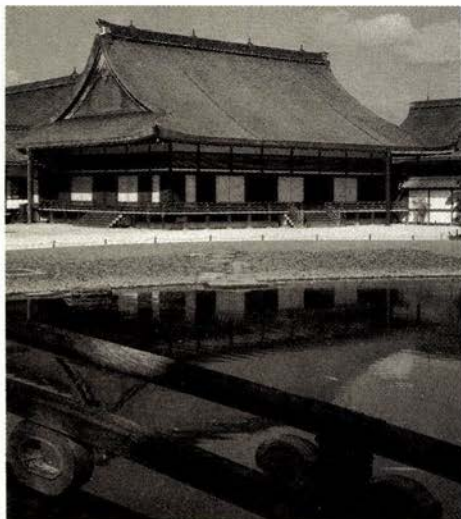
若き友らへ

語りかける言葉

—知識と学問—

社団法人文化研究会常務理事

長
内
俊
平



御学問所

はじめに

終戦時の體驗から

日本の国体とは

百姓をやめ大学に

至りつゝいた道は、よき人の仰せを信ずる外にないとの結論に

孟母三遷の教へ

言ひなれぬ言葉をつかふことは、いかにむづかしいか

知識と智慧と

最後に

はじめに

知識が、今日程氾濫してゐる時代はありますまい。しかし人としての眞の幸の道を、今日の我々は昔の人達以上に自得し、心の平安を得てゐるでありませうか。知識とは、一体、我々の人生に如何なる役割を果すものなのであらうか。また、知識と学問はいかなる関係にあるものなのだらうか。人類が、いま、そして永遠に解決を求められてゐる根本問題であらうと思ひます。さうは申ししましても、私はそれに対する明確な解答を用意してゐるわけではありません。私の拙ない体験を語りながら皆さんと共にこの問題を考へてみたいと思ふのです。一方智慧といふ言葉があります。しからば、智慧と学問はどんな関係を持つてゐるのか、このことについても併せて考へてみたいと思ふのです。

終戦時の体験から

さて、私は先の戦争で、諸君と同じ年齢の頃、数^{かず}へで二十一歳から二十四歳までの三年間軍隊のご飯を食べました。何のお役にも立てませんでした、終戦の詔勅を聞いて慟哭する

なかにも、神洲不滅とは一体どういふことなのだらうかとの思ひが心を離れませんでした。と申しますのは、私は神洲不滅とは、「日本は決して戦争には負けぬ国だ」と單純に考へてゐたからなのでした。ですから、復員するとき、自分はいままで本の上での勉強しかして来なかつた。よし生きて帰つて

産みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける（「地」明治二十七年）との、明治天皇のみ教へに従つて、土を耕してみよう。そしたら何かつかめるかも知れない、と百姓になることを決心いたしました。

私は、村に帰ると、人家の二階を借り、早速道路に落ちてゐる馬糞ごそ拾ひを始めました。肥料にするためであります。村では「ほら氣狂ひが一人村に来たぞ、高等工業を出てゐるものが、本当の百姓なんか出来るものか、みでなが（見てゐろ）、そのうちに、すばさみとつて（尻をまくつて）逃げてゆくにきまつてらね」と笑ひました。私は眞剣でした。そして家内と二人で、初めての田んぼづくりに精を出しました。

百姓をしながらも心をはなれぬのは、「神洲不滅」と「日本の国体」といふことでした。さうして無我夢中で百姓に精を出して働いてゐたあるとき、はつと、ひらめくものがありました。



日本の国体とは

それは、「日本の国体」とは、天子様が、私達国民をわが子の如く慈しまれ、我々国民は、天子様を父母の如くお慕ひ申し上げるその心の結びといふことではなからうか。戦争に敗れたのは、天子様の、我々国民を慈しまれるみ心の深さに変りはなかつたのに、我々国民の、天子様の大み心に添ひ奉らうとする眞心が足りなかつたからではなかつたかといふことでした。即ち、国体をお守りになられたのは、天子様であり、我々国民は、国体を守り切れなかつた。その通ひ合ふいのちの糸を断ち切つた我々国民の不忠が、かうした敗戦といふ事態を将来したのだと確信ともいふべき思ひがひらめいたのでした。

百姓をやめ大学に

私は生涯、百姓を続けてゆくつもりでありましたが、五年目で百姓を止め、子供を三人かかへながら大学へ進みました。何故かと申しますと、理由は簡単です。私は開墾して百姓をしてゐたのでなく、父祖の残してくれた田畑を、小作人から、いくらかづつ返してもらつて百姓をしてゐたのでした。しかし、百姓で生活してゆくためには、ある程度の廣さの田んぼが必要です。そのためには、小作人から田んぼを返してもらはなくてはなりません。私は学校を出てをりますので、いざとなれば、どこかで働くことも出来ます。しかし小学校しか出てゐない小作人は、私に田んぼを返せば、食べて行く道に困ります。そのことに気付いた私は、決然村を去つて大学に入り勉強し直すことを決心いたしました。決心するや否や、直ちに家と屋敷を売払つて仙台に出ました。こんな話をしてをりますと、いくら時間があつても足りませんので、止めて置きました。大学では、国の「政体」といふことを考へ続けました。丁度、日本は戦に敗れ、「民主主義」といふことを誰彼問はず言ふ時代になつてをりました。一方食へることもままならなかつた生活は、みるみるうちに變つてゆき、食に困るといふことがなくなり、街には三輪車ややがて自動車走り廻る様になりました。そのひらけ様の早

さは昔の二十年間の変化が、一年の間におこる位の早さでした。世がひらけゆくのに対応して、日本の政治形態もやがて変つてゆくべきなのかどうか。私の心を離れぬ問題でした。君主制・民主制の優劣を中心に、この問題の周辺を、大学時代を含めて約二十年間往き来しました。

然うは申しましても、内外の文献を読みあさり、—あさつたといふことではなく、ほんのひと握りの本を読んだにすぎませんが、—知識の世界を右往左往しつつ、つひにその優劣につき明確な確信をもつに至りませんでした。ほとほとに疲れ切つたと言つていいでせう。

至りついた道は、よき人の仰せを信ずるほかになしとの結論に

然うしたある朝、それは大学を卒業して十四年たつた昭和四十三年（数へで四十七歳のとき）、第十三回の合宿が霧島で行はれた直後のことでしたが、神棚の前で、明治天皇御製を拝誦してをりましたとき、

世はいかに開けゆくともいにしへの国のおきてはたがへざらなむ（「国」明治四十四年）

の大御製が、私に神の啓示の如く行く手の道を示して下さいましたのです。それは、世の中が、

どんなに進まうと、万世一系の皇室を上を戴き、下国民が一つ心に大君をお慕ひ申しあげるこの尊い国柄は、決して変へてはならぬぞ、といふお示しだったのであります。私は夢から覺めた人の様な、心の平安に恵まれました。

親鸞上人は、歎異鈔のなかで次の如く言つてをります。

「親鸞にをきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに淨土にむまるるたねにやはんべるらん、また地獄におつべき業ごうにてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかさされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自余の行を上げみて仏ぶつになるべかりける身が、念仏をまうして地獄にもおちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」

と言つてをられます。私は、知識の世界（自余の行…はからひ…さかしらの世界）を歩きつかれて、つひに信ずる人のおことばを信ずる外に道なきことに気付かせて頂いたのであります。私のよろこびがいかに大きかつたか、いまだに、二十年前のその日の神棚の前の光景が、ありありと目に浮んで参ります。

夢から覺めてみると、私は、果物と野菜の優劣を考へてゐた様なものでありました。「政治形態」などと言ふと、如何にも学問的にきこえますが、身近かな問題と照し合せてみれば、他愛のない問題に右往左往してゐたのでした。君主制も民主制も果物、野菜と同じく概念です。りんごと白菜の優劣を論ずるならまだ具体的です。しか林檎一つとつてさへ、青森と長野のりんごでは違ひます。また一口に青森のりんごと言つても、弘前の岩木山麓のものと、平地のりんごとは、その艶・味はひ、堅さなど、大變な違ひがあるのです。実体のない概念での上の比較をいくらしてみたとところで、結論が出ないことはわかりきつたことである。そのことに気付かせて頂いたのであります。

若し、我々国民一人一人が、ゆきつくところまで知識の世界をさまよひ歩き、つひに、お祖先方の教へに素直に従ひ、我々国民の行くべき道は、いかなる世にならうとも、ひたすら大君をお慕ひ申しあげること盡きること、そしてそれが世界の爲に盡す道であること、に気付くならば、日本は永遠に不滅であらうと信ずるのであります。

孟母三遷の教へ

話は飛びますが、「孟母三遷の教へ」といふことを諸君はよく知つてをられませう。……孟

子の母は、孟子の教育のために、三度居を変へた。初めは墓所のそばに住んでゐたが、最後には、学校の近くに移り住んだといふお話です。……諸君に、「孟母三遷の教へとはどんなことですか」、「何のためさうしたのですか」ときくと、すぐ「こんなことです」と答へます。しかし諸君の学校の教室や廊下に煙草の吸殻や紙屑は落ちてゐませんか。

私は十年程前、故郷の大学で講師を依頼されたことがありましたが、教室のなかや廊下に吸殻が捨ててあります。私はよく拾つて歩きましたが、学生達に「学問をする前に、学問をするにふさはしい環境をつくらなければならぬ。誰か中心になつて、校内から吸殻や紙屑をなくすることを始めてほしい」と訴へました。私は大学生のとき、学生の集會室に、同僚の学生達が、新聞紙に汚きたい字で、でかかかとアジ文句を書いて貼つてゐるのをみて、「君達が何か物を言ふ前に、この新聞を剥ぎ給へ」と言つて断乎剥がせました。そして「こんなことをしてゐると、大學生を信用して、何の規制もしてゐない大學当局が、いまに学生課の認印のない揭示はゆるさぬ、といふ規制をして来ぞ、自由を、自由を、と叫んでゐるその自分の首を、自分らで締めることになるんだぞ」と言つてやりました。

また、先程も話をしました百姓をしてゐた昭和二十二年頃（私は数へ年二十六歳でした）電車で弘前に出かけたことがあります。私の村から二里程離れた津軽の城下町です。降りてみたら弘前の駅のなかは、労働組合員の貼つた汚いアジビラで一ぱいでした。私は駅長室にづ

かづかと入つて行き、「労働組合の委員長を呼んで下さい」と言つて、駅長と委員長に「この駅舎は誰のものか、国民皆のものではないか。（当時は国有鉄道でした。）貼る方も貼る方なら、貼つたまま、かまはぬ駅長も駅長である。直ちに剥ぎ給へ」と言ひました。私の百姓姿（私は刺子の農衣を着てをりました）をみて驚いたのか、私の氣迫に押されたのか、一言も言葉を返さず「よく分かりました」と言ひました。私はそのあとで「組合には一定の掲示場をつくつてやつたらどうですか」と言つて帰りました。その後しばらくして、弘前に出た時、駅舎の貼紙は剥がされ、駅舎の外そとに掲示場がつくられてゐました。

「孟母三遷の教へ」を知識では知りながら、それを、自分のすぐ出来ることから実行出来ない様な知り方が、いかに私達に多いことか。これを学問と言へるでせうか。

黒上正一郎先生は、「母校を思ひ母校につくさるることがわれらの会（一高昭信会・東京高師信和会）のつとめの第一歩と存じます」（昭和三年十一月東京高師生副島羊吉郎宛のお便り・「黒上正一郎先生のうたと消息」六八頁）と言つてをられます。

諸君の母校の現状はいかに。そこに、ことは吸殻や貼紙に限らず諸君の奮起を求めてやまぬものが、ありはしませぬか。

言ひなれぬ言葉を使ふことはいかにむづかしいか

いま一つ話をいたしませう。

私の家庭は、あまり裕福ではありませんでしたが、父母と私達兄弟四人（姉と弟二人）の、心のよく通ひ合ふ家庭だつたと思つてをります。私の中學時代は、八疊・六疊・四疊半の建坪十三坪の借家に住んでをりましたが、大きな子供が四人（殆ど年子でした）相撲をとるものですから、家のなかは大変でした。またよく喧嘩をしました。すると母が箒を持つて、私達を追ひかけます。いくら叩かれても、ちつとも痛くありませんが、喧嘩をしてゐる相手の、一つ違ひの弟、良平に、低い声で「痛いと言へ」と申しますと、弟も「痛い、痛い、今度から喧嘩はしねでゆるしてけれ」と二人であやまります。母は言ふことを聞いたと…いや知つてをられたかな…思ひ、堪忍かんじんしてくれました。

その弟は、代用教員をしながら学費を貯め、盛岡の高等農林に学びました。戦がはげしくなり、弟も学徒として、海軍の予備学生になり、旅順で教育を受けたのち、館山の砲術学校で学び、昭和十九年十二月二十八日、フィリッピンへ向ふ途中、台湾沖で、乗つてゐた飛行機が墜ちて戦死しました。

弟は、フライリッピンへ向ふ前に、予め家のものに、野菜の種を集めさせ、背囊に一ぱい背負つて戦場へ向ひました。姉にあてた手紙（昭和十九年七月）のなかに「いづれ自分も戦地に赴く身のことなれば、野菜の種子を戦地に持つて行きたいと考へてゐます。これは補給に困難な今日、何かの足したになればと思ふかど廉かどもあります。またつれづれなる（果してつれづれかどうか分りませんが）武人の嗜たしなみとして、と思ふからです。次の野菜の種子、今より少しづつでもよろしいですから、使ひ古しの封筒に入れ、湿りのつかない様にブリキ罐に入れて置いて下さい。必要な時はいづれお知らせします。∴」（国文研叢書No.20『統いのちささげて』一三九頁）

と書き、そのあとに「南瓜は粉のかかるものを選ぶこと。南瓜の種は、必ず食べてみて良く粉の出たものを、種を採つて、良く水で洗ひ、雨に当たらない様にざる筥ざるに入れて、充分乾燥させてしまふこと。この時乾燥が足らないと貯蔵中、黴が生えます。」などと種子の採り方をことこまかに書きしるしてをります。この弟が、鹿児島から、フライリッピンに向はんとして

戦場に今発たたむとす故郷の父母さらばさきくあれかし
天かける機上の人と今なりて一路フライリッピンに向はんとす

といふ歌を残して、その数時間後、そのまま台湾沖の海底の藻屑と消えました。数へ年二

十二歳のときであります。私は、明日知れぬ、しかも戦ひ我に利あらざる戦場に向ふにあたり、お國の野菜の種を背囊に一ぱいに背負つて征つた弟を誇りに思つてゐます。

明治天皇の御製に

かきいれし昔の人の筆のあとのこれる書のなつかしきかな（「披書思昔」明治四十三年）

とございますが、今でも、緋く本の裏表紙に、「長内良平」と署名してある本をみるたびに、この弟を思ひ出します。∴私の持つてゐる本のなかの大事なもの、この弟が残してくれたものが多いのです。なかでも、「古事記」と「論語」の和綴の本は、私の宝物として大事にいたしてをります。……

母は終生この弟のことを憶ひ続け、多くの歌を詠みました。七十五歳の時（昭和四十七年）

「良平に捧ぐ」と題して歌集『冬の玫瑰』を出版しましたが、そのなかに

海軍帽の徽章きしやうきび銹たんすつかずたんす筆筒いくとせにあり幾年見ても吾を泣かしむ

など弟を偲ぶ多くの歌があります。母は八十歳でなくなるまで、弟、良平のことを詠ひ続けました。

話は、また飛んでしまひましたが、さういふ自由な雰囲気の家で、私達は、父

母のことを「父さん」「母さん」と呼んでゐました。私は高等工業学校で學ぶ様になつてから、父母の労苦（父は小学校教諭・母は女学校の看護婦さんでした。）を思ひこんどこそ家へ帰つたら、父母の前に手をつけて、「お父さん、お母さん、ただ今帰りました」と言はうと決心して帰りますが、家へ着くと、てれくさくて、つい、いつもの様に「ただ今」とだけ言つて済ましてしまふことが続きました。二年生の夏休みに、清水の舞台から飛び降りる様な思ひで、思ひきつて両親の前に手をつき、「お父さん、お母さん、ただ今帰りました」と言つてゐるうちに不覚にも涙があふれて来てどうにもなりませんでした。

諸君は笑ふでせう。「お父さん、お母さんただ今帰りました」と手をつけて言ふことなんか簡単じゃないか」と。しかし平常言ひ慣れぬ言葉を口にし、しなれぬ行ひをすることが如何に容易なことではないか。それは経験したものでなくては分からぬ苦しみであります。「父さん、母さん」と昨日まで呼び慣れて来た父母を、「お父さん、お母さん」と呼ぶことが、そしてちゃんと手をつけて「ただ今帰りました」と挨拶することが、いかに困難なことをか身をもつて知らされました。知識として、「両親は敬語をつけて呼ぶべきだ。しばらくぶりですつたときは、手をつけてちゃんと挨拶をするべきだ」と知つて居つても、それを實行するところが、如何に困難なことか、私は骨身にこたへて知らされたのです。

ですから、私は子供が生まれ、物心がつくとすぐごはんの前に、皆で掌を合せ「おちい様、

おばあ様、お父様、お母様有難うございます」と稱へてから、御飯ごはんを頂くことを続けました。それは、小さい時から、言ひ慣れさせたなら、大事な時にちゃんと「お父様、お母様有難うございます」と言へるだらう、私の様なつらい思ひをせず、言へる様にしてやりたいと思つたからであります。

知識で知ることと、本当に物を知るといふこと、——それは、行ひとなつて表はれるまで知ることです——は、全くと言つていい程違ふことをお気づきでせうか。學問とは、本当に物を知るといふことであります。それは知識を増よやすことでなくて、智慧を身につけることだと言ひ替へてもいいでせう。

知識と智慧と

ここで一寸、知識と智慧といふことに関し拙つたない私の体験を通し、いくつか気付いてゐることを申し上げませう。第一に知識は人から教へて頂けるに反し、智慧を身につけるには、自得するしかないことであります。分り易く言ふと知識は着物の様なものであります。人から借りて着ることも出来ませんが、裸になるときは不要のものであります。裸になつてもなほ身についてゐるものが、智慧であります。

第二に、知識を得るためには、近道もあります。効率の上がる勉強方法もあります。

しかし智慧を身につけるためには、ひたすら心身を労して、現実の人生に勇敢に立ち向つてゆくしかありません。その苦闘のうちに、自ら恵まれて来るものであります。

第三に、知識は、物を自己の外にあるものとしてみる眼から得られるものであるに反し、智慧は自己の内に向けられた眼から恵まれるものであります。外をみるときも、つねに他との関連のなかに自己を併せみる、さういふ態度から智慧は恵まれる様であります。

第四に、知識は、証明されるもののみを、実在とみる立場であるに反し、智慧を身につけた人は、証明されぬもののなかにこそ、人生の秘密が存することを堅く信じてゐる人です。

日本人として生まれたことも不思議、ご両親の子として生れたことも不思議、ご両親が、数多い男女のなかから結ばれたのも不思議、かうして皆さんとこの合宿で生活を共にしてゐるのも不思議、どの一つをとつてみても、その原因を明確に証明出来るものは何一つないでせう。ただ不思議な縁に合掌するしかないではありませんか。中国の戦争孤児の方々が、両親を捜しあてて、泣きくづる様をみるとき、一体その思ひの深さの理由を如何なる言葉で、説明出来ますか。出来ることは、ただもらひ泣きすることだけではないですか。我々人間のさかしらの、はからひの、一指さへ触れることの出来ぬ嚴肅な世界が、実はこの世にあふれ

てゐるのです。

最 後 に

時間もなくなりましたので、私が生きてゆく力として仰いで参りました、二つの尊いみ教へについて申し上げ話を終りたいと思ひます。

その第一は、聖徳太子様から、黒上正一郎先生の導きを通して恵まれました、「共にこれ凡夫のみ」(憲法十七条のなかのみ言葉)といふお言葉であります。「平等」といふ言葉がよく使はれます。「人間は平等である」「人類は平等である」などとよく言はれますが、自分とさへ仲よく出来ず(三十分は正座してゐようと思ひながらなかなか出来ない。毎日七時には起床しようと思つても十日も続けられない)親、兄弟や友達とさへ本当に仲よく出来ぬ自分をよくみつめたならば、「人さまを平等に愛する」などと言ふことは、知識上の觀念に過ぎぬことに気がつく筈であります。お互ひまことに至らぬ者同士であることに気付かされたとき、初めて手を取り合つて、よろこび合へる同胞感が恵まれることを、太子様はお教へ下さいました。その自覺を各自深めることが、人類を一つ心に結び合へる唯一普通の道であると確信せしめられます。その信を共にと願ひ、その信を深め合はうとする営みがこの合宿教室であるとも言へるので

す。

いま一つは、明治天皇御製の

たらちねの親につかへてまめなるが人のまことの始なりけり（「孝」明治四十年）

のお歌に示されるみ教へであります。人は、誰でも、誠を盡まことしたいといふ願ひがあります。しかし「まこと」を盡すとはどういふことかは、我々のはからひでは、到底知りうべくもないことでもあります。しかし、「親にまめにつかへなさい。それがまことの始めである」との大みことば（始めとは、始めであり終りであり、すべてであるとの意を含んでをります）は、何と具体的で有難いお教へでありませうか。小學生にも分る一目瞭然たるお示しであります。私は、このみ教へをただただ有難く頂いて生きて参りました。

さう申し上げますと、長内は、よほど親孝行なんだと思ふ方もられるかも知れませんが、私程の親不孝は、この世に居ないと思つてをります。毎朝、佛壇の前で、祖父母、父母、兄弟に向つて「お早ようございます。行つて参ります」と掌を合せるとき、親不孝をしたときのことが蘇つて来て「堪忍して下さい」「堪忍して下さい」と頭を下げ、涙する日も少なくありません。そんな親不孝な男であります。それだけになほこの大み教へは身に沁むのであります。

明治天皇は、この大み教へと共に

やすくしてなし得がたきは世の中の人のひとたるおこなひにして〔行〕明治四十年

とお詠みになつてをられます如く、親にまめにつかへるといふことは、誰にでもできる道の様ではありますが、またなし得がたき道でもあります。まことに行くに果なき道ゆゑに道はまた尊いのではないでせうか。

そして

たらちねのおやの教をまもる子はまなびの道もまどはざるらむ〔子〕明治四十年

の大み歌を拝するとき、今日申し上げて参りました、學問を眞に身につける道しるべを与へて戴いた様な感激を覚えるのであります。即ち、親にまめにつかへる人は、母校を愛し、我が村を愛し、友を思ひ、み国を愛し、大君を慕ふ心の深い人に必ずなるとのみ教へかと存するのであります。『いのちささげて』の皆さんは、誰一人の例外なく、親思ひであり、兄弟思ひであり、友情に篤い方々だつたことが、何よりの証左であります。

以上申しあげて参りました、知識を學問に内心に於て融合する至難の道を、我々は生涯歩き続けなければなりません。そして、その道をたどりゆくとき、心から信ずる人を持つこと、

よい友をもつこと、そして和歌を詠むことが、いかに大事なことかお気づきになられることを信じて、私の話を終りたいと思ひます。ご静聽を感謝いたします。

昭和天皇の最後のお歌

亜細亜大学名誉教授

夜久正雄



御常御殿

ただいまご紹介いただきました通り、私は昭和三十四年に『歌人・今上天皇』といふ本を出版しました。その頃は日教組の活動が激しい時分で、本屋の出版書目録の中に『歌人・今上天皇』が載つてゐると、そこで出してゐる教科書が売れなくなる。ですからいつまで経つても書名が目録に出ないといふやうなことでありました。

ところが、昭和五十年を迎へ昭和天皇さまのご即位五十年の記念行事が大々的に行はれるやうになるにつれて、『歌人・今上天皇』の増補・改訂版を出したらといふ声もかかり、再び出版することになりました。そしてさらに昭和六十年といふ御在位最年長の年を迎へられることになり、三度改訂・新版を出す運びとなつたのでした。さういふ次第でもかく昭和天皇のご在世中にご発表になられたお歌を及ぶ限り集め、さうして世の中に知らせる努力を払つて来たといふのが、私の歩んで来た道です。

さて、この合宿は昭和天皇さまに黙禱を捧げるところから始まりました。そして次々に昭和天皇さまのお歌がとりあげられてまいりましたが、ここで昭和天皇さまの最後のお歌を拝誦したいと思ひます。

皆さんもご同感でせうが、昨年 of 年末のことは今はもうずるぶん遠い昔のやうに思はれま

す。新聞紙上には連日昭和天皇さまのご病状が報道されてみました。果して昭和六十四年を昭和天皇さまの御代として迎へることができるかどうか、国民すべて心から心配し、危惧してまさに息を詰めて過す日々でした。さういふ状況の中で一月一日を迎へ得たわけで、私は本当に何とも云へず嬉しく思ひ、その朝、「君が代は千代にとなほも祈るかな昭和六十四年元旦」といふ歌を作りました。とにかく「昭和六十四年元旦」を迎へたよろこびを詠みたかったのです。

ところで元旦にはいつも天皇さまはお歌を発表なさるのですが、この時はご不例のご状態です。まさかお歌のご発表があらうなどとは思ひもありませんでした。然るに新聞を開きますと、そこに昭和天皇さまのお歌が発表されてゐたのです。次の三首のお歌でした。

伊豆須崎の春

みわたせば春の夜の海うつくしくいかつり舟のひかりかがやく

道灌堀

夏たけて堀のはちすの花みつつほとけのをしへおもふ朝かな

那須の秋の庭

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならむ

第十四回 全国学生青年合宿



私はこれらのお歌を拝見した時にお歌そのものに感動しましたが、昭和天皇さまが御重態のご病床にあられながらも新年にお歌を発表なさったといふことに、本当に驚き、胸を打たれたのです。天皇さまはこれらのお歌を新年に発表したいといふお気持ちを決めてをられたに違ひないと思はれてなりませんでした。

さうした私の確信は、ご崩御後の大喪の礼を迎へる頃新聞に載つた記事によつて明らかとなりました。大喪の礼を控へて宮内庁は、昭和天皇さまの四首のお歌を発表しました。

昭和六十二年秋、退院後のお歌

秋なかば国のつとめを東宮にゆづりてからだやすめけるかな

六十三年春ごろまでのお歌

国民くわんたみに外国人とくこくじんも加はりて見舞をよせてくれたるうれし

くすしらの進みしわざにわれの身はおちつきにけりいたつきをおもふ

六十三年八月末頃のお歌

去年こぞのやまひに伏したるときもこのたびも看護婦らよくわれをみとりぬ

さて以上のお歌とともに新聞には徳川義寛前侍従長の談話が掲載されてゐました。その記事を紹介してをきます。

昭和天皇は昨年十一月初め、吹上御所二階の寢室で闘病中、体調の良い時は六十四年の「歌会始」のお題「晴れ」のお歌作りをされていた。ある時、徳川前侍従長に捜すよう命じていた作りかけのお歌が見つからず「(自分が)下へ行って捜してくる」と言われた、という。

徳川前侍従長は「亡くなる数日前から陛下の意識はありませんでしたが、闘病中でも元気な時があったのです」と回想している。(註)

この記事を読むとおわकारのやうに、天皇さまは非常にお苦しいご闘病の中で、お歌を発表すべく努力をされてゐたのです。さうして元旦にお歌のご発表を実現なさつたのであります。昭和天皇さまの最後のお歌は、かうした経緯の中でつくられてゐる譯です。

天皇さまが歌会始以外のお歌を元旦に発表なさるといふことは、昭和二十一年の新年に始まつたのですが、昭和二十八年平和回復後の元旦から恒例となり、以来ずつと続けてこられた事実なのです。

ところで昭和二十一年の新年に発表されたお歌は、

海の外の陸と小島にのこる民の上安かれとたゞいのるなり

といふ一首でした。しかし実際に天皇さまがお詠みになつたお歌は、この一首の前に三首のお歌があつたのです。その三首とは現在は人口に膾炙してゐる終戦時のお歌です。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

私達に衝撃を与へたこの三首のお歌と先程の新聞発表になつた一首のお歌、併せて四首は、当時発表予定になつてゐたといふことが最近わかつてをります。それは、終戦の年の昭和二十年十二月十四日に当時の木下道雄侍従次長が、宣伝的にならないやうな取り扱ひで発表することを陛下に申し上げ、お許しを得てあつたといふのです。このことは平成元年四月特別号『文芸春秋』誌上に発表された木下侍従次長の「側近日誌」で初めて明らかとなつた事実です。

ところが掲載されたのは一首のみで、はじめの三首については発表されず、木下道雄著『宮中見聞録』が昭和四十三年に刊行されるまで待たねばならなかつたのです。何故でせうか。恐らく進駐軍の力によつて発表を差し控へさせられたのだと思ふのです。

いづれにしても私が申し上げたいことは、占領下であれご闘病中であれ、昭和天皇さまの方から常に国民に対して呼びかけのお歌を、お心をお示しになられたといふことです。そのために非常なご努力をなさつてこられたのです。

ですから、皆さん、耳をそばだてて天皇さまのお声を聞くやう努力していただきたい。さういふ努力をしないと天皇さまのお声は聞けないのです。

最後にもうひとつ申し上げておきませう。今年の四月二十九日に今上天皇さまは「みどりの日制定記念式典」にご出席なさいました。その折「おことば」を述べられてをられます。この「おことば」は、今上天皇さまが大喪の後、初めてご出席になつた式典であり、しかも国民全体に下し給はつた「おことば」としては、これも初めてのことなのです。まことに大切な「おことば」と云へるのですが、全文を発表した日刊新聞はありませんでした。各新聞を読んでみましたところ、いづれの新聞も「おことば」全文の中から適当に一、二行だけ切り取つて来て発表するといふ方法をとつてゐて、これではいくら新聞を読んだところで、陛下の「おことば」の真意は伝はらないといふのが実態です。そこで、ここに全文を紹介しておくことにします。

天皇陛下おことば

平成元年四月二十九日（土） 国営昭和記念公園

みどりの日制定記念式典

本日、ここに「みどりの日」制定記念式典が、関係者多数の参加の下に、昭和天皇にゆかりの深いここ昭和記念公園で開催されることは、誠に喜びに堪えません。

自然をこよなくつくしまれた昭和天皇のお誕生日として、長い間親しまれてきた今日の

日が、新しく「みどりの日」として国民の祝日に加えられたことは、大変意義深いことと思います。

みどり豊かな自然は、国土の保全や資源としての面で有用であるばかりでなく、私たち人間の環境として、日々の生活にやすらぎやゆとりを与え、うるおいやいつくしみの心をはぐくむ、この上なく重要な存在であります。日本人は、古来、このような自然を畏敬し、これを守り育て、その恵みを受けてきました。日本の文化もその環境の中で培われたものであります。

近年、わが国の目覚ましい経済発展に伴って、国民生活は著しく向上してきましたが、今後更に、物心両面にわたって、より質の高い国民生活を実現していく上で、自然の豊かさが、不可欠の要件となることは、いまでもありません。

現代の自然は、私たちの祖先が大切に受け継いできたものであり、これを引き続き育てていくことは私たちの重要な務めであると思います。

ここに、「みどりの日」の制定を機に、国民一人一人が、自然の大切さに深く思いを巡らせ、感謝の気持ちをもってその恩恵を享受するとともに、これを更に豊かなものとして、発展させていくために、一層力を尽くされるよう切に望んでやみません。

日刊新聞各社の断片的引用文を全部寄せ集めても、この全文の半分の分量にもなりません。やはりかうして全文を拝読して初めて、日本の進むべき道について実に懇切にお示しになつてゐる「おことば」なのだといふことがわかるのです。

どうか天皇陛下のおことば、御歌、それから歴代の天皇さま方の御製、殊に昭和天皇のお歌について、自ら耳をそばだてて聞く、といふ姿勢をつづけていただきたいと心からお願ひ申し上げます。

（註）「晴」の昭和天皇御製は、御発表の御意志通り、平成二年二月六日「昭和天皇を偲ぶ」宮中歌会において、「最初に読み上げられました。ニュースで拝聴して私は感涙を禁じえませんでした。

昭和天皇御製「晴」

空晴れてふりさけみれば那須岳はさやかにそびゆ高原のうへ

たかはら

■ 短歌入門

短歌創作導入講義

御常御殿・杉戸絵



福岡県立山田高校教諭

與
島
誠
央

はじめに

短歌を作る意味―美しいものは美しい心から生まれる―

短歌の作り方

友を思ふ歌

はじめに

皆さん今日は。ただ今、三沢君から紹介がありました與島です。紹介の時に笑ひが起きましたので少し気持ちが落ち着きましたけれども、この壇上から話すとなると、もうさつきから胸がドキドキしてたまりません。大変緊張してをります。

皆さんが講義室に入つて来られるのを先程から見てもりますと、楽しくて仕様がな、やつとホテルから解放されて外に行ける、といふふうで本当に嬉しさうですね。朝から講義づくめで本当にハードな合宿です。非常に厳しい経験だらうと思ひますが、これに耐へたら大概の事に負けない根性がつきますから、是非頑張つて下さい。

それでは資料の方に入つていきたいと思ひます。これからやつとホテルを出て班のみんなとバスに乗れるし、山にも登れる。「楽しいな」と思ふ反面、短歌といふのを作らないといかないさうだと思ふと「心配だな」「作つた事がないんだけれども」と気にされてゐる方が多いんぢやないでせうか。その気持ちをほぐすことが出来れば、私の講義の目的は果せる訳です。

最初に「一生懸命短歌を作つて下さい」と書いてゐますが、去年この合宿に来た学生さんの歌を紹介します。実は「朝の集ひ」で体操をしてくれてゐる亜細亜大学の佐藤君の歌です。

よい歌をつくりたいとは思へども未熟なころそれを許さず

レクリエーションから帰つてきて作つた最初の歌です。「いい歌を作らう」と思ふけれどもなかなか言葉が上手く出て来ない。そのもどかしい気持を詠みあげられたのです。これは忘れられない出来事だつた様で、合宿から帰る時にはかういふ歌を詠んでゐます。

短歌全体批評の折に

我が歌のよみあげられたる恥づかしさに逃げたき気持ち今も忘れず

今年も佐藤君が来てゐますけれども、昨日の事のように思ひ出すんぢやないでせうか。しかし、一生懸命な様子が浮かんで来て微笑ましいですね。かうして短歌を作ることを初めて経験する人も多いのですが、不思議なことにみんな歌が出来るのです。苦勞しながらも出来るのです。これは素晴らしい事だと思ひます。なぜ出来るのかといふと、非常にはつきりしてゐます。この合宿で心がきれいになるからなんです。

短歌を作る意味―美しいものは美しい心から
生まれる―

合宿三日目になつて、皆さん疲れも大分たまつて
ゐるところでせうが、一日目からの講義を一つ一つ
思ひ返してみして下さい。心が震へるやうな経験を幾
度もされたのではないでせうか。私も幾度か目頭が
熱くなる様な気持ちになりました。さういふ感動を
経験すると、心が洗はれると言ひますけれども、心
がきれいになつていく、美しくなつていく様な思ひ
をする訳です。ところが、講義を聞き、感動して、
班室に帰る。班別討論の時に「ああ良かった」と感
じてゐた気持ちを班友に伝へようとするけれど、な
かなか難しいでせう。「自分の気持ちを言葉にするこ
とはなんて難しいんだらう」と思ひませんか。これ
は普段あんまり経験しないことですね。気軽に話し



てゐる事が多いからなんです。

でも、ラブレターを書いた経験のある人だつたらこの経験はよく分ります。彼女に、彼氏でもいいけれども、自分が「好きだツ」と思つてゐる気持ちやなんとか伝へよう、伝へたい、と思つて手紙を書くでせう。するとテレビでよく出るぢやないですか。書いてる途中でクシヤクシヤつて丸めて「ああこれぢやない」、また書き始めて「これでもないツ」つて丸めて投げる。僕もそんな経験があります。自分の大切な気持ちを相手に伝へようとすると言葉はとたんに難しくなる。いや、むしろ言葉はもともと難しいものなんぢやないでせうか、心を表さうとするならば。さういふ経験をこの三日間積んで来た筈なのです。最初は感動を言葉にすることがとても難しかつたでせうが、少しづつ言葉に表現できる様になつて来たのではないでせうか。僕は三班の班付をしてゐますが、最初の頃みんなどう座つてゐたかといふと、テーブルから離れてゐるんですよ。非常に広い輪なんです。パラパラツと集まつてゐる感じ。それが今日なんかどうなつてゐたかと言ふと、みんな身を乗り出してゐるんですよ。テーブルにくつ付いてゐるんですよ。さうした態度で話が出来る様になると、ずるぶん違ひます。何か言葉が心からそのまま出てきてゐる様な感じがします。この三日間、目に見えないけれども、心が相手に向かふ様になつて来てゐる証拠なんです。ですから、短歌を作る事も言葉を選んで心を磨いていく具体的な体験であると考へて下さい。そこで、少々恥づかしいのです

が、私自信の経験を少しお話します。

四年前の合宿の時、私は班長をしたのですが、非常に不安でした。初めての人に会ふ訳ですから、ドキドキしながら、開会式前に早めに班室に入つて、班友が来るのを待つてゐました。その時の気持ちを詠んだ歌です。

開会式前

部屋にゐて班友を待つひとときはドア開くたびこころときめく

一人ふえ一人またふえ班室にかたらふ声のみちてたのしも

部屋で班友を待つてゐると、ガチャ、ギイーつとドアが開いて班友がはひつて来ます。「今日は」「奥島と言ひます。お名前は?」「暑かつたでせう。九州は初めて?」などと話が始まります。そのうちにまた一人、また一人、ドアをあけて入つてきます。三人四人五人と話の輪が大きくなつていく。何か今まではどんな顔をしてゐるか、どんな感じの人かと不安に思つてゐたけれども、実際に会つてみると心が知れてきて、ホツとすると同時に話すのが楽しくなつて来る。その気持ちを詠んだのです。この歌は全体批評の時に長内先生に読み上げて頂いてとても嬉しかつた思ひ出の歌です。

この合宿が終り、二カ月程経つた十月、合宿の感想文集が送られて来ました。それを読ん

でみると早稲田大学の女の人が僕の歌のことを書いてくれてるたんです。読んでみます。

美しいものは美しい心から生まれるという言葉が最も心に残っていますが、特に和歌にそれが如実に現われるのには驚きました。創作和歌全体批評の時読まれた、「ひとりふえひとりまたふえ」の二首連作の和歌には打たれました。普段の人柄がそのままにじみ出ているのではないかと思えます。

和歌を詠むことが心の修練になるのであれば、もつと私も詠んで美しい心になつて行きたいと思つています。

女性からこの様に書いてもらふと照れますね。それはさて置きまして、この文章は和歌のポイントをよく表してゐると思ひます。「和歌を詠むことが心の修練になる」これが和歌を作る一番大切なポイントではないでせうか。

普段私達は「おい、遊びに行かう」とか「ジュース買つてきて」と話をします。さういふ言葉は用が足りたら消えてしまひます。ところがこの合宿では「君はどういふ言葉が心に残つたんだい？」と聞かれる。言葉は消えないどころか、思ひ出させられる。そして、その言葉を相手に伝へると、さらに深く自分の心に言葉は残る。「ああ自分はこの言葉が心に残つたんだな」と改めて思はされる訳です。

その上で印象に残った言葉を短歌にしたらどうなるか。文字として表現されて、一層心に深く刻まれることになります。言葉は心と大変深く結びつき、心を動かす力を持つてゐる。皆さんにその事を意識して頂きたいと思ふのです。日本ではこの言葉の力を古くから言霊（ことだま）と呼び、言葉には魂が宿り、心を磨く力があると尊んできたのです。

ですからこの合宿で皆さんが経験してゐることは、これまで小学校・中学校・高校・大学でならつた勉強と随分違ひます。学校で習ふことはほとんど知識でせう。「大化の改新は西暦何年だ?」「六四五年」これでいい訳でせう。知識を貯めてゐる訳です。ところがこの合宿では「僕はこれも知つてゐます。あれも知つてゐます」と言つても「ぢやあどう感じたの?」と言はれるでせう。知るといふ事は学問の始まりですが、これを深めていくと、知つてゐることより感ずること、好きになることがより大切になつて来ます。短歌は感ずる心を磨いていく「情を治める学問」なのです。これは私達が学校で勉強した事がない世界なんです。でも大きく構へて言へば、これが学問の本筋ぢやないでせうか。知識は同じ本を読めばだれでも同様に貯へることが出来るのですから。

少々話が堅くなりましたが、まづはこの合宿で心に残つた事を短歌に詠んで頂きたいと思ひます。

短歌の作り方

まづ五七五七七の三十一文字（みそひともじ）の形に整へてください。具体例を一つ。

ふろに入りうたをよまむと横みれば横の人も指をおりつつ

五七五六七になつてゐます。四句目が字足らずですから、この歌は全体批評で次の様に直されてゐます。

ふろに入りうたをよまむと横みればその友もまた指をりてゐつ

これで五七五七七ですね。字余りは少々なら許されるのですが、字足らずは避けて頂きたいのです。短歌と言ふものは古くからメロディーを付けて詠むのです。皆さんカラオケを歌つた事があるでせう。歌詞が一字でも飛ぶとメロディーが崩れてしまひますよね。あれと一緒です。また、自分の大切な気持ちを詠まうとする訳ですから、字足らずの所はよく言葉を選んでみると、より歌が正確なものになる事が多いのです。この歌も「横の人」と言ふところが「その友もまた」と直されてみると、字数が揃ふだけでなく、「横の人」といふ他人行

儀な感じが「その友」といふ親しい感じに変はつて、班は違ふかもしれないけれど合宿を共に過ごしてゐる親密感が表現できるのです。

次に出来るだけ文語を使つて詠んでほしいのです。難しいと思はれるかも知れませんが、文語で表現すると緊迫感が違ひます。

次に一首一文になる様に詠む。つまり自分の感動を一つの文章になる様に詠むことです。具体例として『短歌のすすめ』から柿本人麻呂の歌を引いてみます。

東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ

「かぎろひ」というのは夜明けの光りです。人麻呂は多分夜通し野原に佇んでゐたのでせう。ふと東の方を見ると暁の光が射してくるのが見える。「ああ、夜が明けるな」と思つて振り返つてみると、一晚中照らしてゐた月が西の空に傾いてゐる。夜から朝に移り変はつていく天空の情景を描写してゐる訳です。この歌を例へば次の様にしたらどうでせう。

東の野にかぎろひの立つ見えぬ。かへりみすれば月かたぶきぬ

もう全然駄目でせう。東の方に朝の光が見えた、西の方に月が傾いてゐた、かういふツツブツツと感動の波が途中で切れた歌になつてしまふのです。これを一首一文といふのです。

ですから一首一文に、一息に自分の感動が流れる様になつて頂きたいと思ひます。

その時に注意して頂きたいのは、一首の歌にたくさんの思ひを込め過ぎる事です。「あれも良かったしこれも良かった。いやいや、今思へばこれもやつぱり良かった」とあれこれ盛り込むと読み手に伝はらない歌になつてしまひます。そこで、感動の焦点が幾つもある時には、連作の短歌にして頂きたいのです。そのお手本として、小田村四郎先生が昨年この合宿にいらつしやつた時の連作の短歌を紹介いたします。昨年もこの島原で合宿が行はれたので

妙見岳展望台

真夏日の空晴れわたり見はるかす四方の景色のあざやかにみゆ

海の面は波間も見えず日に映えて光れるさまは鏡の如し

天草の島々青く連なりて不知火の海に長く伸びゆく

東ひむかしのかなたはるかに大阿蘇の山なみかすかに望むを得たり

風景を短歌に詠むのは大変難しいのです。私は実際に短歌を作つてみて身につまされました。一首目に全体の景色が詠まれます。真夏の日の空が晴れわたり、四方(よも)つまり東西南北の景色が広々と鮮やかに見える。そして視点が空の下に広がる海に下りていき、二首目、

海面には波が立つてゐるのも見えず、ペターツと凧いで、キラキラと太陽の光が映えて、まるで鏡の様に見える。三首目、その海のなかには天草の島々が青く連なり長く伸びてゐる。四首目では、更にその先の東の方に視点が伸びて、遠くに阿蘇の山並みがかすかに見える。かういふ連作です。情景が正確に読み手に伝はつて参ります。ともすれば「上手く詠まう」と気負ひがちですが、さういふ気持ちには出来るだけ抑へて、正確に詠むといふ事を心がけて頂きたいと思ひます。

友を思ふ歌

この講義を長澤運営委員長から命ぜられてから今日まで大変不安でしたが、準備をしながら講義の最後には皆さんと良い歌を一緒に読まうと思つてをりました。「歌つていいなあ」と思つて頂ければ嬉しいのです。そこで歌のなかでも私が好きな「友を思ふ歌」を次に挙げました。最初に挙げてゐるのは歌人若山牧水が大正十二年に作つた歌です。牧水は酒を愛し、旅を愛して四十歳ぐらゐで亡くなつた方で、その晩年にこれを作つてゐるのです。

友を思ふ歌

いま来よと言ひ告げやらば為し難き事をして来む友をしぞおもふ

何事のあるとなけれど逢はざればこころはかはく逢はざらめやも

逢ひてただ微笑みかはしうなづかば足りむ逢ひなり逢はざらめやも

寂しきに耐へて彼をりさびしさにたへてわれをり逢はざらめやも

あやふかるいのちを持ちておのもおのも生きこらへたり逢はざらめやも

牧水には心の友がゐるのです。「今来い、来てくれ」と告げると、仕事の都合とかもろもろのことを片付けて来てくれる、その友を思ふといふのが一首目。何か重大な事があるといふ訳ではないけれども逢はないでゐると心が乾いてくる、潤ひがなくなつてくる、これが二首目。三首目は、逢つてただニコツと微笑みを交はして領けばそれで心が満たされて来るといふのです。自分も彼も孤独の寂しさに耐へて生きてゐる、人恋しくてたまらない、逢はないでをれようか、といふのが四首目。最後の歌は、共に逢へなければ萎えて、消え失せてゆくやうな自分の精神の危機感を「あやふかるいのち」と詠んでゐるやうに思はれます。友を切に求める牧水の気持ち心が打ちます。

このやうな歌を読んでをりますと、ここに持つて来てをります『いのちささげて』といふ本に出て来る歌が浮んで来るのです。この本はこの合宿教室を続けてこられた先生方の学友、

そのほとんどが戦地で散つて征かれたのですが、その方々の緊張感の高い言葉が綴られてあります。その中から佐賀県出身の江頭俊一さんの詩と短歌を紹介させて頂きます。私は勿論お目にかかつた事はございませんが、小柳先生や宝辺先生から折々お話を伺ひます。友を思ふ心、家族を思ふ心の大変篤い方であることがこの詩と短歌から偲ばれるやうに思ひます。

寸感（昭和十七年六月）

僕の帰りを待つてゐるといふ

妹からの便りが来た。

取り出してはよみ取り出しては読み、

胸が高鳴つてならないのだ。

父母よ。妹達よ。

僕は名を一つ一つつぶやきながら

あの顔がはつきりと浮かんでくる。

とんで早く 帰りたい。

遠くわかれて 今

「かく戦つてゐる」

と話してやりたい。

「親と子と、兄と妹と。」

「思ひ思はれ 恋ひ惚びつ、」

「堪らないときは歌つてゆくのだ。」

「たゞ それ丈だ。」

「それが人生だ。」

江頭さんは昭和十七年に東京帝国大学に入学されます。そのころ、国文研の前身である「精神科学研究所」の先生方は当時の東条内閣の戦争遂行政策に対し思想的な批判活動を展開され、悉く憲兵隊に検挙されるといふ状況であつたのです。ですからこの詩の「かく戦つてゐる」といふ字句は江頭さんが、さういふ先輩の心を惚び、御自分も思想的な勉強をして後輩に信ずるところを伝へてゆくといふ事を意味してゐます。国の行く末を思ふ江頭さんには妹さんからの手紙が堪らなく懐かしかつたでせう。御家族はこの時遠く満州にをられるのです。出来ることなら飛んで帰りたい。そして国の行く末を案じて日々を活動してゐる事を話して聞かせたい。家族を惚び堪らなくなると歌つてゆくのだとおつしやつてゐます。「歌つてゆくのだ」といふのは、自分の思ひを短歌に托して表現するといふことでせう。「たゞ それ丈だ。」

それが人生だ。」と言はれるやうに、人生への切迫した思ひが高鳴ると、江頭さんは短歌を作られるのです。

五月野きつきのの青葉茂れる周防路すほうぢに集ひし友の偲しのばるるかな

み友らのみうたよみつ、なつかしきおもわつぎ思ひ出づるに

こ、だくの思ひ湧き来てもろともに歌はむこころわき出づるなり

コトノハの調べあはせてもろともに生命の限りゆかなむ我らは

昭和十六年、二十二歳の時に詠まれたお歌です。江頭さんには全国に信を同じくするお友達がいらつしやいました。そのお友達が山口の方で集まつて勉強をしてをられる。それを偲んで作られたお歌です。五月の青葉が茂つてゐる山口周防路に集ふ友を思ひ、友の歌を詠んで顔が次々に浮かんで来て、自分も共に歌を歌ひ交はしたくなつてゆく。「ここのだく」と言ふのはたくさんといふ意味です。あふれんばかりの思ひに胸を波打たせながら生命の限り共に進んでゆかうと歌つてをられる。国を思ひ、家族を思ひ、友を痛切に思つてをられる江頭さんの心が偲ばれて参ります。

かういつた先輩の素晴らしい歌に見習ひながら、皆さんは皆さんで御自分の大切な経験をこの合宿でされてゐませうから、それを歌に詠んで頂ければと思ひます。

創作短歌全体批評

九州大学医学部循環器内科医師

小柳左門



御涼殿・内庭

今日皆さんはプリントされた短歌の「歌稿」を手にした時、自分の作った短歌が刷られてゐるのがとても嬉しいやうな、あるいは照れ臭いやうないろいろな気持ちで開いてみられたのではないかと思ひます。今日ここに刷られた皆さんの歌は全部で六〇七首もございました。上は年配の先生方から、下は中学生に至るまで、この合宿に参加された皆さんが一人残らず短歌創作を経験されたのです。それは本当に素晴らしいことと思はれませんか。歌稿を見ていただきますとよく分りますが、この合宿は学生参加の方だけでなく、事務局の方、あるいは私たちが皆雲仙岳に登つてゐる間に合宿地に残つて慰霊祭の準備をされた方などの、いろいろな歌が入つてをりまして、私はこの合宿教室がさういふ多くの方々の結集によつて営まれ、合宿に参加した人皆の努力によつてこの一冊の歌稿ができ上つたことを思はずにはをられないのです。

今日集まった歌が六〇七首ですね。私たちの先祖が「万葉集」といふ歌集を作つた。この数が約四五〇〇首です。といふことは万葉集の一割強の数の歌が私たちの中から生まれたといふことです。実に嬉しいことだとは思ひませんか。

忘らむと野行き山行きわれ来れどわが父母は忘れせぬかも

といふ万葉集の防人さきもりの歌があります。これは一六〇〇年以上も昔の名もない人の歌であるにもかかはらず、今もつて私たちの胸にせつせつと響く調べをもつてゐます。私たちの先祖がはるかな昔から詠んできた短歌は、長い年月を経て私たちの心に訴へてくる。そのやうに私どもの先祖が連綿として詠み継いできた短歌の世界に、私達も今度初めて足を踏み入れたことになると思います。長内先生が御講義のなかで、知識といふことについて「知ることと行ふことは違うんだよ。私たちは知つてゐても行ふことができないことが沢山あるだらう」と仰言いましたね。皆さんは短歌がどのやうなものかを知識では知つてをられたでせう。しかし短歌を自分で作るといふことは、単に人の創つた歌を読むのとは全く違ふといふことを感じられたと思ひます。自分で作つてみて初めて、歌のもつむづかしさ、すばらしさに目が開かれたやうなおもひがされたこととせう。

ただ今から短歌の全体批評を始めるに當つて申し上げたいのですが、自分の心といふものは自分が一番よく分つてゐるつもりでをられるかもしれないけれども、実は自分でもつかみ所のないものなのです。自分の心はむしろ周りの人々によつて、より明らかになることがあるのです。私達は自分の思ひを何とか歌にした。だけでも実は他の人が見れば分りにくい一



人よがりのことが沢山あると思ひます。さういふことを皆さん方がお互ひに指摘しあひ、友の気持ちを憶念しあつて語りあふうちに、歌に詠まうとした友の思ひが明らかになつてくる。かうして友の心が開かれていくとともに、その友を憶念しようとした人の心も一つに溶け合つていくといふ、それがこれから行ふ短歌の相互批評のもつ大切な意味だと思ひます。この合宿教室で短歌を学ぶといふことには、単に作つたらおしまひといふのではなく、作つたものをお互ひに偲びあふことに大きな意義をおいてゐるのです。では第一班の方から始めませう。

故郷をば見むといさんで登れども霞がかりて天草
は見へず

歌の意味については何の説明もいりませんね。「残

念だなあ」といふ気持が、そのやうな言葉を使はなくても素直に伝はつてくるやうな歌だと思ひます。ただ「いさんで」は「いさみて」、「霞がかりて」は「霞かかりて」あるいは「霞わたりて」にした方が良いでしょう。「見へず」の「へ」は「え」が正しいですね。歌を作る時には、昔からの正しい言葉遣ひ（正仮名遣ひ）に習つて下さい。正仮名遣ひはむつかしいとは思ひますが、これも学ぶことによつて日本語の美しさもわかってくるし昔の人たちとのつながりを得ることもできると思ひます。

故郷ふるさとを見むといさみて登れども霞かかりて天草は見えず

切々とおのが想ひを語らるる友の言葉に想ひを寄する

「想ひを寄する」といふ言葉は「人」を想ふときには使ひますが、「言葉」に「想ひを寄せる」とはをかしいでせう。ですからここは誰もが分るやうに詠むのがよいと思ひます。友の言葉にじつと耳を澄ませてをられるのでせうから、「友の言葉に心ひかるる」としたら良い歌になると思ひます。

切々とおのが想ひを語りゆく友の言葉に心ひかるる

○ 雲かかる山の高さに驚きて世俗の憂いしばし忘れぬ

「世俗の憂いを忘れる」というところが問題ですね。君はまだ若いのでせう、「世俗の憂い」といふのが実感としてあるんでせうか。表現が大げさになるとかへつて感動は薄れてしまふのです。おそらくこの歌の感動の中心は、雲がかかつてゐる山の高さに驚いたといふことではないでせうか。そのことにもつと心を集中して一首に詠みこむ努力が必要でせう。この歌は一首の中に二つの気持ちを表さうとしてゐるために、しかもあとのほうの気持ちを実感を伴つてゐないために、読む者の心を打たないと思はれます。

○ 踏みしめて登りし山で出る汗は河水のごとく清きものなり

夏の山に登つて流れる汗といふのが河の水のやうに清いといふのは、これもまた実感とは違ふのではないでせうか。読む者にとつてはわかりにくい表現です。おそらくここは「流れ出る汗が爽やかだつたなあ」といふことではないだらうか。それを河水のごとく清いと言

つてしまった。このやうに実感から離れてしまはないで、自分の感じたことをそのままに素直に詠んで欲しいと思ひます。次のやうに直してみました。

山道を踏みしめ登ればとめどなく流るる汗の爽やかなるかな

○

仁田峠にある昭和天皇の歌碑を御覧になつて作られた歌がいろいろありました。御製は

高原たかはらにみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり

といふのです。

見上ぐれば大き岩には堂々と陛下の御歌の刻まれてあり

よい歌ですね。次の

草薙ぎて友らとともに朗々と昭和の御歌詠じぞしつる

これにはよく分らない所がある。「草薙ぎて」とは一体何だらうと思はれるでせう。これは国文研の小野さんが碑の前に茂つてゐた草を鎌で刈られたのです。すると隠れてゐた碑の文字がはつきり見えるやうになつた。おそらくその時のことを詠まれたと思ふのですが、自分ではそのやうなつもりで作つてゐても読む人はわからないのですよ。また「草を薙ぐ」とこと「御歌を詠ずる」ことの二つが一首の歌に入つてゐますので焦点がはつきりしない。草を刈られたことに感動したのなら、それは別の歌にする。感動の中心を詠むやうにして下さい。それから「昭和の御歌」といふのもわかりませんね。昭和天皇の御歌でせう。天皇の歌といふのは正確には「大御歌」といふのが正しいと思ひます。「詠じぞしつる」も言葉遣ひがをかしいですね。このやうにしたらどうでせうか。

いしよみ
 碑に刻まれし陛下の大御歌友らとともに朗々と詠む

○ さわがしき心をおさえ島原へからだはいまだ博多駅なり

この歌には理解し難いことがいくつもあります。「さわがしい心」とは何だらうか。「心を

おさへて島原へ」とは何が島原にどうするのか。おそらく自分の心はすでに島原へ行つてゐるといふ意味でせう。心は向かう、体はこつちと、すなはち心とからだを分けてゐるのですが、それでは一種の理屈っぽい歌になつてしまふのです。心と体を対比したことだけが印象として残つて作者の思ひが伝はつてこないのです。「さわがしい心」といふのは、期待とか不安とかいろんな気持の入り混つた状態ではないかと思ふのですが、さうであればそのやうに作つたほうがよいのでせうね。うまく直すことはできませんが、今申し上げました点に注意してもう一度考えてみて下さい。

○ 停車場に君をみ染めし島原の夏のつどひに潮風ぞふく

これはどういふ歌なのでせうか。停車場で「君」を見染めたのですから、最初の出会いなのでせうが、最初にしては「君」とは馴れ馴れしいのではないか。「島原のつどひ」とはこの合宿教室のことでせうから、合宿に来られた女の人をみ染めたのかなとも思はれます。そこに「潮風がふく」といふそのつながりがよく分らない。そもそもこの合宿地では潮風は吹いてゐないでせう。結局この歌は何を詠まうとしてゐるのか焦点がはつきりしない。いくつものことが詠まれてゐるけれど内容に乏しいのです。もう少し自分の心をつめ直し、焦点を

しぼつて作つて下さい。

○ 初めて班長を務めて

今日一日を思ひ起せば力足らぬ我が身思はれ寝つかれぬかな

初めて班長となつて務めた今日一日を思ひ起こして、一所懸命やつたけれども力が足りない、自分の気持ちはどうしても友達に伝へられない、あるいは友達の気持ちを推し量ることができなかつたといふ、色々の渦まくやうな思ひがあつたのでせう。その気持ちやしみじみと出てゐますね。

○ 苦しさに言わざるを得ず我が思ひつたなき言葉で友らに明かす
み友らの素直な心にふれあひて疑問の少しはれゆくおぼゆ

「苦しさに言わざるを得ず」とはどのやうなにかいろいろ考へてみました。思ひが胸奥に渦まいてそれが苦しくてたまらない。友達に言はないではをられなくなつたといふことかと思つたのですが、あるいは、仲々自分の気持ちを友に話すことができないうる時に、「君は

どう思ふのか」と尋ねられる。それでも言葉にならずに苦しい、やつとの思ひで友達に訥々と話し始めた。そのやうなこともかもしれません。恐らく後の方ではないかと思ふのですが、そこが分りにくいですね。班の中でもう一度よく確かめあつて下さい。もし、尋ねられてやつとの思ひで話されたのであれば、例へば

たづねられて苦しかれども我が思ひつたなき言葉で友らに語る

といふやうにすればいいと思ひます。二首とも基本的にはよい歌ですね。決して上手な歌ではないけれども自分の思ひを一所懸命に綴つてをられる。ですから表現は拙いけれども胸に伝はつてくるのです。

○
有明をみおろす我の心中は有明のごとく澄みわたりけり

「有明」といふのはおそらく有明海のことです。有明海をなるべく省略しないで詠む方がいいと思ひます。それから「有明」といふ言葉が二回使つてありますが、短歌は三十一文字といふ限られた数しかないのですから、特別の場合を除いては一回ですますやうに工夫

して下さい。特にここでは二つの「有明」がごろ合せのやうな感じて使はれてゐるのですが、このやうな「言葉の遊び」は避けるべきです。この歌は恐らく雲仙の山から有明海を見下して詠まれたと思ふのですが、さうだとすれば有明海が澄みわたつて見えるといふことはないと思ふのです。「澄みわたりけり」と詠んでゐるけれども「澄みわたつてゐるに違ひない」といふ想像をもとに、そんな風に自分の心も澄んでゐると詠まれたのではないですか。それではいけないのです。やはり見るべきことをきちんとして見ると詠まれたところから発せられる言葉でないと眞実とは言へないと思ひます。私は想像の世界を詠んではいけないといつてゐるのではないので、その時にはそのやうに詠めばいいのです。どうして心の中が澄みわたつてゐるか、色々な理由があつたのでせうが、友の語る言葉に感動したといふやうな具体的な経験があつただと思ひます。さういふ気持を振り返りながら有明海を臨んだときの感動を詠まれたらどうでせうか。原作とは全く異なつて恐縮なのですが、次のやうに直してみました。

友達と語りて心は澄みわたり望む有明の海美しき

これでもあまりよくありませんのでもう一度検討してみして下さい。

○

福島中佐と別れた馬を思ふ

病にてただ一匹残された馬を思うと目があつくなる

病氣になつたために残されていく馬を思ふ作者の気持はよくわかるのですが、もう少し心配りがあるといいですね。「ただ一匹」は馬ですから一頭が正しいでせう。そして大事なことは中佐と馬との別れのことです。福島中佐の文章を読むと、馬と別れていかなければならぬ辛い、苦しさがありましたね。馬も苦しからう、中佐も辛い、辛さを忍んで別れるのでせう。ところがこの歌だけを読むとどう受けとられるでせうか。他にも多くの馬がゐたかもしれないが、病氣になつたためにただ一頭残されたその馬を思ふと目があつくなる、ともとれません。せつかくの作者の気持とは違つて受取られる。ですから自分の思ひを正確に伝える言葉を選ぶのも大切なことなのです。このやうに直してみました。

病得てつひに中佐と別れゆく馬を思へば目頭あつし

「目があつくなる」といふのは正確な表現ではないですね。目頭があつくなる、あるいは脛があつくなるといふのが適切だらうと思ひます。

福島中佐の話は多くの方が歌にしてをられます。どの歌も良いですね。やはり強い感動がよい歌を生みだす源泉だと思ひます。その中で、国文研の福岡県立玄洋高校教諭の矢永さんの歌を紹介しませう。

小柳先生の御講義で福島中佐の話聞き

ぬかるみの荒野にひづめを傷めたる愛馬はつひに病にたふる

草に臥す愛馬に群れる蚊を逐ひて慰め給ふ姿かなしき

馬を愛づる中佐の姿に異国の人々もまた涙すといふ

さがたき思ひにたへて雄々しくも旅立ち給ひぬシベリアの地へ

難しい言葉はほとんど使つてをられない。とてもわかりやすいのだけれども、すうつと私たちの心に迫つてきます。聞いたままを歌に詠んであるのですが、心の中にしみ入つてくるやうな歌です。かういふ歌を読むと深い感銘を受けますが、明治天皇に次のやうな御製があります。

こともなくしらべあげたる言の葉の花にぞにほふ国のすがたも

「国の姿といふものはそんなに事々しいものではない、自然に思ふことを思ふやうに歌つた、さういふ言葉の花に国の姿が匂ふ」といふことでせう。私たちは国のことなどを事々しく勉強するのではなく、このやうに自然な気持ちを歌ふところにおのづから現れる、さういふ美しいものを本当に大切にしていきたいと思ふわけです。

○
次に女子の方達の歌にまゐりたいと思ひます。

和歌つくる心がまえはあるけれど我心あせるばかりで言葉むずかし

一所懸命歌を作つてをられる様はよく分るのですが、歌の字数が五七五七七七になつてゐるでせう。四番目の五の「我心」は要らないのではないでせうか。「心があせる」と言はないでも、「あせるばかりで」でいいと思ひますね。短歌には五七五七七七といふ昔から伝はつた型、日本語の調べを美しくかたどる姿があるわけで、それを守つていく努力をすべきだと思ひます。また「言葉むずかし」とありますが、自分の言葉に表はして詠むのがむづかしいといふのがもつと正確な気持ちではないでせうか。さうであればそのやうに詠むのがよいと思ひま

す。

歌詠むと努めたれども思ふこと言ひ表はすべき言葉いでこず

○ 日を重ね對話を重ね今やつと心重なる友有りと思ふ

ここに來て何日か経つわけですが、毎日精一杯話をしてやつと心が通ふ友ができたなあといふことでせう。しかし「日を重ね」「對話を重ね」「心重なる」と「重ね」が三回重ねて使つてありますね。作者はここは工夫されたのかもしれない。だけでもこのやうなことをすれば無理が生れてきます。私たちが学ぼうとしてゐる短歌は、言葉をいろいろ繕つたり面白くするといふのとは違ふと思ひます。例へば「心が重なる」といふのは適切な表現ではありませんね。心が通ふ、心が睦み合ふとは言ひますが、「重ねる」を使はうとしたために一番大切なところで作者のありのままの心と離れてしまつたと思はれます。

朝夕に語らふうちに自づから心通へる友を得しかな

としてみました。

○ 石段をおりゆくたびにかはりゆくみ山のけしきに心あらはる

石段を下りていくたびに少しづつ景色が変はつていくといふ、女性らしいとても細やかな心がこの平易な言葉のうちによく伝はつてきますね。「山の景色に」でもいいのですが、「み山のけしき」と詠んでをられる。数が八になつてゐるのですが不自然ではないですね。「み山」とわざわざ詠まれたところに、むしろ作者が山を尊び、山をいつくしんでをられる、そのやうな気持ち伝はつてまゐります。

○ この合宿では中学生、高校生の皆さんが印刷を手伝つたり、本の販売を手伝つてくれたりしてゐます。さういふ人達も皆さん歌を作られました。言葉は拙いのですが非常に素直な気持ちが出てゐます。

熱心に講義聞く人聞かぬ人よりどりみどり沢山いるな

この歌稿でおそらく最年少の中学生の歌です。かういふ歌をみると、身につまされてはつとしますね。「いろんな人たちが沢山ゐるなあ」と講義室の後ろで本を売りながら見てをられたのでせう。見る目が素直だからありのままの様子がよくよまれてゐるのでせうね。

最後に申し上げたいのですが、合宿地にまゐります前に私の家にニュージランドから小学校五年生の女の子が一週間ほど少年使節団として滞在してくれました。通じない英語を話しながらも、子供達と仲良く遊んでゐましたけれども、滞在の最後の日の朝に、私の家の近くにある香椎宮といふ昔ながらのお宮に連れて行きました。お宮参りの仕方なんかも教へたら、嬉しさうに私の真似をして参拝してをりました。そのときに、神社の御神体として、真中に鏡が置いてあるのを皆さんも御存知でせう、「あれは鏡ですよ」と教へた。女の子は不思議さうな顔をしてゐました。鏡が祀つてあるのです。神社の中心にですね。なぜ鏡があるのだらう。鏡といふのは人の姿をそのままに写すものですね。日本人は古代から鏡を神社の中心として祀つてきた。大切にしてきたのです。

それから、日本人は歴史の本に「大鏡」とか「増鏡」とかのやうに「鏡」といふ名をつけてきました。歴史といふものは自分勝手に書くものではない、自分を無にしてその世の姿のままを書き写すことを歴史の本当の姿と観じたのだらうと思ひます。

短歌といふものも鏡のやうなものだらうと私は思つてをります。自分の心をそのままに写

すものだと思ふのです。今から皆さんは班に帰つて相互批評をされるのですが、その中で自分の歌が直されてゆくと不思議に自分のありのままの心が自分の歌になつて表はれてくるといふことを体験されると思ひます。「ころ」と「ことば」が一つになつてゆく——それは非常に貴重な体験だと思ふのです。自分を本当に見つめるといふこと、それを言葉にあらはしてゆくこと、日本人はそのことを最も大切なものとして学んできました。短歌のことを「敷島の道」ともいひます。敷島とは日本のことですね。なぜ短歌を「敷島の道」といふかといふと、日本人が最も大切にしてきた道だからだらうと思ひます。

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞ敷島の道

明治天皇、明治三十七年の御製です。「白雲のやうに遠くにあるものを求めてはいけない。世の人の本当の道ですよ、敷島の道は、短歌の道は」といふことでせう。短歌は単なる月花のもて遊びではない。私たちが大切にしていくべき学問の中心にあるといふことを、まだまだ実感は湧かないでせうけれども、大切に思つて今から短歌の相互批評にあたつていただきたい。また合宿から帰られても、感動するやうなことがあれば、一首でもいいから歌によむことを続けていただきたいと切に思ひます。

■ 青年の言葉

沈黙するところから
言葉が生まれてくる

日本真空技術㈱勤務

北
浜
道



御茶室・聴雪

本題に入ります前に、私も此の合宿では班の中に入つて、是迄の講義を聞いたたり、或は班別討論に加はつたりしてゐますので、ここで今私が感じてゐることを少し述べさせて戴きます。一言で申しますと、それは、目の前の友達と或る一つの問題について、本当に納得する迄話をするといふことは実に難しいといふ事です。私自身の学生時代を振り返りましても、迎も出来てゐたとは思へません。特に大学の三年、四年の上級生になるに従ひまして、むしろその事が段々難しくなつて行つた様に思ひます。それは自分の考へを相手に納得して貰ひたいといふ目的意識が時に頭を過りまして、自分自身が本当に物事を解つてゐるのかを自問する事が無くなつてしまつたところに大きな誤りがあつたと思はれてなりません。ともすると相手を説得しようとする意識ばかりが先に立ち、自分自身への問ひを忘れてしまふ。さういふ傾向に私たちは陥り易いやうに思ふのです。どうすれば納得ゆく迄話合へる様になるのでせうか。

このことを考へる上で、私が思ひ返す一つの体験があります。大学一年の時、福岡で小規模の合宿が学生の手で営まれましたが、その合宿で或先輩が研究発表をされることになりました。その時のその先輩の示された姿勢が特に印象に残つてゐます。それは目の前の発表について持たれた実感を、その実感の儘に話さうとされるものでした。その発表のされ方は、聞いてゐる人を説得しようとする様な事では全く無く、私達に紹介されようとする古典の言

葉に確かに心打たれて、その感じを言葉を選びながら話されるといふふうでした。発表の後で資料と一緒に輪読する時間になると、資料文の数個の語句の脇に書留めて置いた先輩の感想が軸になつて、他の箇所も面白く読めて来たのを覚えてをります。発表に取上げられた資料は吉田松陰の文章で、奥が深く、一人では逆も読み味はふ事が難しいのですが、先輩の感想により文脈が生き生きと感ぜられて来る体験をしました。

話を戻しますと、目の前の友達と本当に納得出来る所迄話し合ふ為にはどうすれば良いか。これは私自身今も問ひ続けてをり、かうすれば良いといふ答へはありませんが、少なくとも私の体験から言へることは、自分が物を語る時には、自分の実感を言葉を選びながら、述べることが大事であるといふことです。実感の無い言葉を口にする、その瞬間何か大切な物を失つてしまつたと感じる事はどなたもおありなのではないでせうか。まづ実感に即して話し合ひたいと思ふのです。

ところで、実感といふ言葉を恰も当り前の事の様に住ひましたが、ここで何かを「実感する」といふ事について考へてみたいと思ひます。私はこの事は大変難しい事だと思ひます。否寧ろ実感を得る事の前に、何かを正確に受け止める事が難しい。友の感想を聞いてゐる時に、他の事を考へてゐたり、彼はかういふ事を言つてゐるのだと独り合点して、実は聞いてゐなかつたといふ事が多々あります。話を聞くことは本当に難しいものです。私がこの事を



自問する様になつたのは文芸評論家の小林秀雄氏の次の一文を読んでからでした。

例へば、諸君が野原を歩いてゐて一輪の美しい花の咲いてゐるのを見たとする。見ると、それは堇の花だとわかる。何だ、堇の花か、と思つた瞬間に、諸君はもう花の形も色も見のを止めるでせう。諸君は心の中でお喋りをしたのです。堇の花といふ言葉が、諸君の心のうちに這入つて来れば、諸君は、もう眼を閉ぢるのです。それほど、黙つて物を見るといふ事は難しいことです。

（美を求める心）

小林氏は、「見る」難しさについて述べてをられませんが、「聞く」事も同じ事が言へるのではないでせうか。「黙つて」話を聞く事は難しい。私には先に述べ

たやうな実感のない言葉を語りがちな面がありますので、「黙る」事は自分に必要だと思つてをります。話を聞く時に限らず、物を考へる時、文章を読む時に何かが見えて来るといふのは、自分の心の中の雑音が薄らぎ、一時「黙る」事が出来た時に経験出来るものではないでせうか。もちろん沈黙して考へるまでもない卑俗な話題はあります。それは適当に対処すれば良いわけで、私が申したいのは、人生観が問はれる問題についてです。「黙る」事を要求される問題についてです。

私は現在、メーカーに勤務してゐる技術屋です。日頃沈黙せざるを得なくなる様な対象に出会ひたいと思ひ生活してをりますが、仕事上は未だその機会がありませんので、私の読書体験から一つそれをご紹介しますと思ひます。

筑波大学教授村松剛氏と、京都大学教授勝田吉太郎氏との対談集「ひとつの時代の終りに」の中に次の一節があります。

〔村松 ええ。それから例のアツツ島の玉砕。あのときにも、こんなはなしがあるのですよ。山崎聯隊長から、刀折れ矢尽きた……。これから無電機を破壊して、最後の突撃を行なう。「ネガハクハ、アカシヨウヘイノキゾクニ、コウコノウレヒナカラシメンコトヲ」という最後の電報が来た。東条さんは泣いたそうですよ……。〕

それでもすぐに手配して、遺族にたいする処遇を考へると指示した。それから宮中に、報

告に行つたのですね。そのときに陛下が何をおっしゃったかという、アツツ島に無電を打て。「諸士の忠誠は、天聴に達せられたり……」

勝田 うーん。

村松 遺族についての心配はするなという電報を打て。陛下が東条さんに、そう指示された。無電機を破壊して、もう最後の突撃をやっているところです。それでも陛下は、かまわんから打て、とおっしゃったそうです。そういう天皇陛下のお人柄というのは、やっぱり自然にわかるのですよ。」

私はこの話を讀んだ後、暫く身動きがとれなくなりました。私が心打たれましたのは、「諸士の忠誠は天聴に達せられたり」、「かまわんから打て」といふ陛下の御言葉の悲しさと強さです。生きて帰る望みを断つて出陣していく将兵は、遺される掛け替への無い者の面影を思ひ、身の上を案じつつも、しかし自分は最後迄戦はなければならぬ、と思ひ定めた事でせう。報告を受けられた昭和天皇陛下は、将兵の苦しみと悲しみを瞬時におわかりになつたと思ふのです。それにしても、「諸士の忠誠は天聴に達せられたり」とは、何と悲しくも力強い御言葉でせうか。今はもう届く術も無い無電ですが、若しそれが将兵の胸に届いたならば、どんなに励みになつた事でせう。私はこの読書体験を通じて、文字通り身動きとれない程のそんな感動を持つたのでした。

これに関連して、もう一つ小林氏の言葉を御紹介します。「美しいものは、諸君を黙らせません。美には、人を沈黙させる力があるのです。これが美の持つ根本の力であり、根本の性質です。」（美を求める心）この言葉は沈黙せざるを得なくなる体験の本質とその実現の可能性を、確かな言葉で表現されたものとして、今も心に残つてをります。草花であれ先程ご紹介した陛下の御言葉であれ、私達の胸に迫り沈黙させるものが確にあると実感として思はれます。

話を最後にまとめますと、何かに感動して沈黙せざるを得なくなる体験は私自身を鍛へる上で貴重だと思つてゐます。さういふ体験を経てはじめて本当の言葉が生まれて来るのではないでせうか。標題に「沈黙するところから」と書きましたのは、さうした経験は偶発的に起るものではない。自分の心の姿勢と申しますか、或いは自問自答の持続と申した方がよいかも知れませんが、さういふ姿勢を集中して行く事で、沈黙せざるを得ない物に近付いて行つて、美しい物として感じられる筈の物をありのままに感じられる様になりたいと思ふのです。又それを可能にする力を私達は本来持つてゐる事をお話ししたかつたのです。

自分の実感を伴ふ本当の言葉を交はし合へる一時を持ちたい。その為には一度沈黙しなければならぬ。そして、沈黙できるかどうかは各人の姿勢に掛かつてゐます。

社会生活の体験から

北九州市立八幡病院・診療放射線技師

森田仁士



聴雪・遣水

私は現在、北九州市の病院に勤務致してをります。私の仕事は、正式には診療放射線技師といひ、病院においてX線写真の撮影や放射線による癌の治療などを専門に担当してゐる技師でございます。

さて、私も大学一年生の時に、兄の勧めでこの合宿教室に参加致しました。講義の内容は難しくよく理解できなかつたのですが、講義をなさる先生方の真剣な姿に、何か大切なものがあると感じました。そして次の年も次の年もと参加するうちに、しだいに私自身の中に浮かんで来た言葉がありました。それは「感ずる心を鍛へる」といふことでした。学生時代、同じ環境にありながら、ある友は生き／＼と毎日が楽しいと言ひ、ある友は無味乾燥でつまらぬと口に出してよく言つてゐました。その差は、この感ずる心が働いてゐるか否かにあると思はれてなりませんでした。私達は、毎日様々な出来事に接してをり、その中には本当に大事なこと、素晴らしいものが多くある筈です。これを確実に感じ取るならば、どれほど心豊かに生きることが出来るだらうかと思つたのです。しかし、この感ずる心は鍛へ磨いてゐなければ曇つてしまふものであります。私も社会人となり日常の生活に追はれ、いつの間にか「感ずる心を鍛へる」ことを忘れ見失つてゐました。しかし、幸運にも仕事の中でこの大切なものを呼び醒まされ、さらに確信するといふ得難い経験を致しました。今日はその話を話させて戴きます。

私が最初に赴任した病院は、呼吸器の病氣治療を専門とする療養所でした。赴任して四年目に病院の改築に伴ひ、癌の治療のために放射線治療装置が設置されました。最初の二年間は私の上司が直接担当し、その後私に任せられました。私がそれまで担当してゐたX線写真の撮影に比べて、この治療では患者さんとの対応に特に注意が必要となりました。それは、近頃では一般の方々の医学知識も高くなり「放射線治療イコール癌」といふ意識があるやうで、患者さんは放射線治療を受けることに大変な不安を感じるためなのです。この治療は約二ヶ月間三十回程度に及ぶため、どの患者さんもこの間に幾度かは、自分は癌ではないかと婉曲に尋ねるのでした。このやうな仕事を五年間担当する中で、私にとりまして私の仕事に取り組む姿勢を正されるやうな、非常に印象に残る患者さんがをられました。

その方は五十代前半の婦人でした。一見すると病氣とは思へないほどに元氣さうでしたが、悪性の肺癌だつたのです。この婦人の治療を始めて二日目でした。突然にポツリと「先生、癌はうつるのですか。」と言はれたのです。私には一瞬「うつる」といふ意味が判りませんでした。すると「私の主人も三年前に肺癌で亡くなりました。」と続けられました。私は咄嗟に「癌はうつりませんよ。放射線治療と聞くとすぐに癌と言はれますが、癌以外の治療もするのですよ。」と答へてその場を繕ひました。そして担当の医師にこの事を伝へました。すると医師は、この婦人のご主人も肺癌で放射線治療を受け、その時の看病の経験から恐らくこの

婦人は自分が癌だと気付いてゐるだらうと話され、最後に「けれどもこの癌は転移を起こしやすく治療の難しい種類なので、私は癌だと宣告しません。君もそのことをよろしく願ひします。」と言はれました。

このやうな精神的に緊張した状況の中で治療が始まりましたが、ひとつ助けられた事がありました。それは、私が音楽が好きなのもあり、患者さんの気分転換になればと、治療室にはいつも音楽を流してゐました。すると、この婦人も音楽が好きだとのこと、しだいに音楽の話題を主として話しをやるやうになりました。音楽談義を楽しく交はすこともあつたり、また時には病気の話しになり表情を曇らせるといふやうなこともあつたりで、約二ヶ月の放射線による治療を終へました。その後他の治療も終へて、今のところ転移も見られないので退院となり



ました。私もこのまま転移の無いことを祈るやうな気持ちでした。その後も通院の折りに時々治療室に顔を出して下さり、順調に数ヶ月が過ぎ、「来月から職場に復帰します。」と本当に嬉しさに挨拶に來られました。けれどもそれから二ヶ月程して足の異常に気付かれて再入院となりました。検査の結果、骨に転移が見つかり、この転移した部分にも放射線治療を行なふことになりました。再びこの治療をすることは本人に転移を告げるに等しいのではないかと医師とも相談したのですが、今可能な治療に全力を尽くすしか無いといふことでした。あれほど嬉しさにしてをられたことを考へると、何とも申し訳ないやうな思ひでした。

再び治療を始める日となり、婦人は車イスに乗り部屋に來られました。私の方が先に気付いて婦人を見ますと、やはり表情が暗く沈んでみました。しかし、ほどなく婦人も私に気付くと微笑まれて「またよろしく願ひします。」と軽く頭を下げられたのです。この時、私は言ひ難い思ひに駆られました。婦人は、私の立場を思ひやつてくれてゐたのです。もしも自分が暗い顔をしてゐたならば、私が辛いであらうと氣遣つて下さつたのです。自分の余命が告げられたやうな立場にあつてなほ、その苦しみの中で私達周囲の者のことまで氣遣つて下さつたのです。それから二十回の治療の間、一度として私が返事に窮するやうなことは口にされませんでした。それどころか、前回以上に音楽のこと、外の景色のこと、家族のことなどを話されるのです。

私はこの婦人のあの微笑みや言葉がどこからうまれて来るのかを考へていくうちに、大切なことに気付かされました。この婦人にとつて残された時間を大切に生きるといふことは、自分の心の全力を尽くして周囲の人々と接していくことではないかと思へて来たのです。しだいに、この婦人の言葉が『あなたは今日何に接して、どんな感動をしましたか。』といふ問いかけに聞こえて来たのです。或る時、「今日は天気が良いですね。」とこの婦人が言はれるので、ふと窓から空を見ると秋晴れでした。この空の澄みわたる様子を婦人は確かに感じられたのだと思ふと同時に、日々の自然の美しさに私の心が働いてゐなかつたことに気付かされもするのです。通勤の道すがら見える稲の成長をこの時初めてよく見たものです。感動するといふことは、何も大げさなことではないのです。日常のなにげないものにも、心を働かせ感じ取つていくことなのであります。日常の中から心を働かせることを大切にして鍛へていくならば、身構へて如何にして充実した人生を送るべきかなどと理屈をふりかざす必要など無いのです。この婦人は、それを確実に実行し、残された時間を生きてをられたのでせう。このやうにして、この婦人と話しを交はすことで、私の心が試され鍛へられていつたのです。

しかしながら、その後、転移病巣への治療ははかばかしい効果を得ることが出来ず、半年間の闘病の後になくなりました。その間、病室においても看護婦さんなど周囲の人々によ

く心をくばられてゐたさうです。私はこの婦人から多くのことを教へられました。心を働かせ感ずるといふことが、こんなにも日常のごくありふれた中にあるといふこと。それは大げさなものではなく、自然にほとぼしるやうなものであること。そして、その美しさ。それまでの頭で考へた硬直した世界から、一度に目を醒まされた思ひでした。

これからも、私の感ずる心は時に曇るでせうが、その時にはこの婦人のことを思ひ出し、本来の心呼び醒ましたと思ひます。最後に、婦人の御霊の安らかならんことを祈り、話しを終はらせて戴きます。

一年の歩み

聴雪・地袋戸引手



中央大学文学部四年

三
林
浩
行

昭和六十三年八月、第三十三回全国学生青年合宿教室が九州は島原の地で開催され、我々は「学問と人生を語らう」といふ課題のもと全国津々浦々から集ひ、研鑽に励んだ。そして合宿が終つたその後も各大学において更に研鑽を深めようと誓ひ合つたのであつた。早速東京地区では三年生を中心に会合を重ね、『古事記』を読み味はふことによつて我々の心の中にわが国の神々や祖先の潑刺とした姿を甦らせていかうと呼びかけ合つた。福岡地区では合宿で機縁を得た聖徳太子の深い人間洞察に学ばうと黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読にとり組むこととなつた。又熊本地区では例会活動を継続させ、充実させんとして福田恆存・山川健次郎等の著作を輪読していつたのである。それらの活動の折々に各地では集中した宿泊研鑽にも取り組んだが、その一年間にわたる地方合宿の成果を表に示すと別掲の通りである。

さて、以上の研鑽を開始した九月半ば、陛下が御病氣に倒れるといふ事態が起こり、国民こぞつて御平癒を祈る日々が続いた。しかし昭和六十四年一月七日、つひに昭和天皇は多くの国民の願ひも空しく崩御なされたのである。御年八十七歳であられた。その報に接した私達は愕然とした気持ちに打ち拉がれた。その日は折からの天候は思はしくなく、終始どんより曇り、時おり冷たい雨が肅々と降り注いでゐた。それはあたかも我々国民の心が表

春季合宿日程表

	3月18日(土) 第1日	3月19日(日) 第2日	3月20日(月) 第3日	3月21日(火) 第4日
7:00		朝の集ひ	朝の集ひ	
8:00		朝 食	朝 食	朝の集ひ
9:00		班別輪読 (古事記)	西山兄発表 質疑応答	朝 食
10:00			長澤先輩発表 質疑応答	全 体 感 想 発 表
11:00				
12:00		昼 食	昼 食	昼 食
1:00	開 会 式	長 内 先 生 御 講 義 質 疑 応 答	八木先輩発表 質疑応答	感想文執筆
2:00	リーダー及び 全体所懐表明			閉 会 式
3:00	鶴野兄発表 質疑応答			清 掃
4:00	班別輪読 (古事記)	班別討論 班別輪読 (古事記)	レクリエーション (鐘ヶ峯登山)	解 散
5:00				
6:00				
7:00	夕 食 入 食 浴	夕 食 入 食 浴	夕 食 入 食 浴	
8:00		班別輪読 (古事記)	小柳先輩発表 質疑応答	
9:00	班別輪読 (古事記)		班別討論	
10:00				
11:00	(班長会議)	(班長会議)	夜の集ひ	
12:00	就 寝			就 寝

		地 方		合 宿	
主 催	年 月 日	場 所	参 加 大 学		
①東京信和会	昭和63年 11月2～4日	東京葛飾「水元青年の家」	早大、中央大、亜細亜大、慶大、 千葉大、国学院大、東洋大		
②中大信和会	11月18～20日	東京奥多摩「若松荘」	中央大、帝京大		
③福岡信和会	11月19～21日	福岡津屋崎「花波荘」	九州大、西南学院大、 熊本大、徳山大		
④早大積誠会	11月26～27日	東京御岳山「うつばや荘」	早大		
⑤中大信和会	平成元年 1月27～29日	神奈川葉山「朝日ヒール葉山寮」	中大		
⑥早大積誠会	2月21～23日	東京葛飾「水元青年の家」	早大		
⑦亜大日本文化研究会	3月5～7日	静岡伊豆「つりばし荘」	亜大		
⑧千葉大信和会	3月6～8日	東京 正大寮	千葉大、中大、慶大		
⑨東京信和会	5月2～3日	東京府中「府中青年の家」	早大、中大、亜細亜大、 千葉大、慶大		

出されてゐるかの如くであり、その中で夥しい数の弔問の人垣が皇居へ続々とつめかけた。私は皇居へ出かけずにはおれなくなつてもに学んでゐる先輩と共に弔意を表すべく皇居へと向つたのである。私達学生はこのやうにして昭和天皇ご崩御の一日に接したのである。それは、まさに大きな悲しみの体験であつた。

かうした未曾有の体験の中で、我々の胸の中には、天皇のご存在について思ひを巡らす機運が湧き起こつて来たのである。さうした折しも春合宿の計画が立てられてゐた。そしてその計画には、「わが国最古の歴史書『古事記』を朗々と音読しながら共に読み味はひ、心をひとつにして日本人の祖先の息吹に触れよう」といふテーマがすでに設定されてゐた。しかしそれに加へて我々学生はこの時期にぜひ「天皇について考へる」といふテーマを新たに設定して学び合はうといふ声が起こつたのである。ただちに檄文を発送して参加要請を訴へ、いよいよ我々は春合宿を迎へたのであつた。ここにそのあらましを紹介する。

春合宿は平成元年三月十八日（土）から三月二十一日（火）までの三泊四日間にわたつて営まれることになつた。リーダー及び全参加者の所懐表明の後、早稲田大学政経学部三年鶴野光博君が古事記輪読導入発表を行なつた。鶴野君は「声に出して読むことによつて古代日本人の肉声を甦らせよう」と一同に呼び掛けた。輪読は神武天皇の件りを取り上げた。そして参加者一丸となつて神武天皇の御姿を髣髴させようと我々は気を振り絞り『古事記』に向

ひ挑んでいつたのである。神武天皇は国土統一に際し「伏はぬ人」たる「尾ある土雲八十建」を倒すに当つて、御自分の兵達を給仕に変装させて、「歌を聞かばもろともに斬れ」といふ断固たる指示を下してをられる。そして戦ひに勝つた後に得た物は「悉にその御軍に賜ひ」て一緒になつて宴会を楽しんでゐる。我々は神武天皇の心の中に「もろともに斬れ」といふ断固たる決断力と「悉に」という慈愛とが両立してゐることを読みとつていつたのである。

二日目には国民文化研究会事務局長内俊平先生に講義をお願いした。先生は、世の中には証明出来る「知識」だけでなく、証明出来ない「知恵」といふものがあると話され、「証拠がなくては信じないといふのは『信』の世界ではない。貴いもの、人生の大事といふものは説明出来ない」と語りかけられた。又先生はややもすれば現実から逃げようとしてしまふ我々に対し「雄々しいといふのは現実をそのまま受け入れることだ。人に責任をなすりつける『稚心』を捨て去り、『自立の精神』を持つてもらひたい」と強く訴へられた。

三日目は、天皇のご存在に関する発表を中心に研鑽に励んだ。先づは西南学院大学経済学部三年西山博章君による「天皇の戦争責任」といふ問題をめぐつての発表である。そこでは、天皇に戦争責任があると言ふ昨今の一部の風潮に対し疑問を呈した。そして先づ法的・政治的責任を問ふことは出来ないということ論証した後、昭和天皇がいかに道義的責任をはたそうとされて来たかを、その御氣持ちをしのぶよすがとなる御製を読み上げながら切々と語

つていつた。昭和六十二年頃昭和天皇が御病氣になられてゐた當時に詠まれた御製

思はざる病となりぬ沖繩をたづねて果さむつとめありしを

を読み上げ、昭和天皇には直接戦禍を蒙つた沖繩の国民のことがいつも心にあられ「御自身の病のことではなく、つとめの方を思ふお気持ちが昭和天皇にはあられたと思ふ」と率直な感想の一端が披瀝され、我々はハッとさせられた次第である。

ついで福岡県浜の町病院医師長澤一成先輩が発表された。先輩は、天皇は文化の担ひ手であると指摘され、言葉の文化は天皇を中心とした文化であり、大變微妙で壊れ易いものである。だから僕らが守らうとせねば保てぬものだと訴へられた。加へて先輩は、大正天皇の大喪の儀に参加した当時のフランス駐日大使クロードルの話に言及された。クロードルは「私が、決して滅ぼされることのないやうに希ふ一つの民族がある。それは日本民族だ。(中略)彼らは貧乏だが、しかし彼等は高貴だ」と語つたといふ。私達は日本民族を滅ぼさず、外国人をして日本を高貴だと言はしめる為にも、神道儀式を始めとした日本の文化伝統はないがしろにすべきでないと心新たに思はしめられた。

午後には、早大大学院博士課程一年八木秀次先輩が「政教分離」に関して発表された。先

輩は、日本人は自分で気づいてゐない場合が多いが、神道的空間に住んでおり、日本の国柄と神道は極めて密接であると述べられた。そして国柄を表はす事例として日本では世界では珍しく様々な宗教が共存してゐることを挙げられ、日本古来の宗教たる神道はさうした国柄や日本文化の主調低音ではないかと鋭く迫られた。更に、大事なのは天皇が古から神道儀式により国民の安寧を祈られる為お祭りを継続実修されてきたことだと事の本質を明解に示された。

三日目の夜には、日本興業銀行勤務小柳志乃夫先輩が登壇された。先輩はまづ明治天皇の御製を読まれて「天皇は確かに無私精神なのだが、それは実に豊かな無私である」と述べられた。次いで東京裁判史観は親と子の豊かな関係を断ち切らうとしたものであり、「過去と切断されてしまふと心が大変不安定になるものだ」と指摘された。そして我々にはそれとは逆の「日本に生まれた安心感」や、天皇の御精神に見られる「豊かな世界」を受けついでいてほしいと語られ、「人との間に豊かな心の交流の世界を実現させてゆかうではないか」と締め括られた。我々はその言葉の端々に深い感銘を受けた。最終日にはおのおの合宿を通しての感想をこもこも述べ合ひ閉幕したのである。

かうした密度の高い合宿で得たものを胸に、我々は新入生を迎へた各大学内において活動を展開することとなる。先ず三月の末には勧誘ピラやサークル紹介の冊子・立看板等を作製

し、準備万端を整へ、そして各大学の入学式には他大学の学生も応援に出かけ、所信を表明していつたのである。

かうしてささやかではあるが地道な勧誘活動を続けながら、冒頭に記した学びの場を一步ひろげるべくマン・ツー・マンの対話を続けたのである。真情から呼びかければ必ず応へてくれる友はゐるものである。万事気楽なおしやべりで事足れりとする今の大学の風潮にあつても、学問と人生の意味を問はうとする欲求は誰しも秘めてゐる。それを信じながら我々は先哲の言葉に学ぶ輪読会の世界をくりひろげていつた。また一方では学内講演会も開催され、九州では西南学院大学において福岡県立福岡中央高校教諭占部賢志先輩による「独学のすすめ―信ずることと疑ふこと―」と題する講演が開催されてゐる。

大学における交流研鑽の試みは、かうして間断なく展開され、新たな友も得てはや初夏を迎へる頃となつてゐた。全国の友が一同に会して学び合ふ第三十四回合宿教室は、目前に迫つてゐたのである。

合宿教室のあらし

西南学院大学経済学部四年

西山博章



第三十四回全国学生青年合宿教室は、平成元年八月五日より九日までの四泊五日の日程で、長崎県島原温泉「島原グランドホテル」にて開催された。ホテルからは遠く小島の浮かぶ天草灘が眺望でき、背後には峻険な岩肌の迫る眉山が聳え立つ風光明媚なこの地は、正にわれわれの研鑽を積む場として格好の地であった。合宿教室開催三日前の八月二日、合宿教室の準備及び運営に当たる国民文化研究会会員数名、並びにリーダー学生十余名がこの地に集ひ、一泊二日の日程で事前合宿が営まれた。この間、発表・討論・輪読が真剣に続けられ、合宿教室に臨む決意を互ひに確認し合ふ中で、新しい友を迎へる心構へが、一人一人の胸の中で整へられて行つた。合宿教室前日には、会場設営等の準備が行はれた。作業は事前合宿参加者で分担され、講義の演題を書く者、班員の名簿を一つ一つ丹念に作る者等、着々と準備は進められていつた。ホテル入口には「友よ！と呼べば友は来りぬ」と力強く大書された横断幕が掲げられ、新たな友との出会ひへの期待に胸が高鳴る。夕刻には全ての作業を完了し、いよいよ翌日の合宿教室開会を待つばかりである。

参加者の内訳は次の通りであった。

（学生班 四十七大学）

- 早稲田大11、亜細亜大10、拓殖大9、九州女子大7、鹿児島大6、九州大5、東北女子大5、西南学院大4、中央大3、防衛大3、中村学園大3、尚絅短大2、千葉大2、福岡大2、

九州国際大2、九州産業大2、長崎大2、高千穂商大2、熊本大2、東北大1、金沢工業大1、秋田大1、東京大1、日本大1、一橋大1、国学院大1、独協大1、玉川大1、大東文化大1、立正大1、帝京大1、東京女子大1、実践女子大1、成城短大1、京都橘女子大1、同志社大1、神戸商大1、帝塚山学院短大1、徳島大1、北九州大1、佐賀大1、福岡教育大1、西日本短大1、鹿児島高専1、沖縄大1、尚綱大1。

計百九名（うち女子三十八名）

（社会人・教員班） 会社員、教員など。

計二十二名

（招聘講師） 一名

（国民文化研究会） 六十二名

（事務局） 九名

（見学者） 一名

（写真） 一名

総計 二百五名

参加者は合宿申込書のアンケートを基に七名乃至八名を単位とする班に編成され、事前合宿参加学生及び国民文化研究会会員が班長となった。男子学生班は十一箇班、女子学生班は

七箇班、社会人班は三箇班に分けられた。

以下、合宿教室の流れを記すが、各講師の講義内容については印象を記すに止めた。講義内容の詳細は、本書に掲載されてゐるのでそちらを御読み頂きたい。尚、本書に掲載されてゐない挨拶内容等については出来るだけ詳しく取り上げた。

第一日（八月五日）

〈開会式〉

午後二時、続々と全国から集つて来た参加者を迎へ、期待と不安の入り混じる中、愈々開会式である。参加者一同、緊張した面持ちで会場に整列した中、東京大学三年松岡恒男君の会場一杯に響き渡る力強い開会宣言によつて、第三十四回全国学生青年合宿教室の幕は切つて落された。国歌斉唱の後、参加者



開会の挨拶をする西南大の西山君

8月6日(日) (第2日)	8月7日(月) (第3日)	8月8日(火) (第4日)	8月9日(水) (第5日)
—(起床)—	—(起床)—	—(起床)—	—(起床)—
朝の集ひ 朝 食	朝の集ひ 朝 食	朝の集ひ 朝 食	朝の集ひ 朝 食
(講義) 国武忠彦先生	(講義) 筑波大学教授 村松剛先生 (質疑応答)	(講義) 小田村寅二郎先生	(講話) 夜久正雄先生
班別討論	全員写真撮影	班別討論	参加者による 全体感想自由発表 運営委員所感発表
昼食	班別討論	(輪読導入講義) 長澤一成先生	感想文執筆及び 第2回短歌創作 班別懇談
(講義) 山田輝彦先生	昼食	昼食	閉会式
班別討論	(短歌創作導入講義) 與島誠央先生	班別輪読	昼食・解散
夕入散 食浴歩	夕入散 食浴歩	(講義) 長内俊平先生	
(講義) 小柳陽太郎先生	レクレーション 雲仙仁田峠登山 短歌創作	地区別懇談会	
班別討論	(青年体験発表) 北浜道氏 森田仁士氏 慰霊祭説明	夕入散 食浴歩	(創作短歌全体批評) 小柳左門先生
就床	慰霊祭	班別短歌相互批評	
	班別懇談	夜の集ひ	
	就床	就床	

一同は、去る一月七日に崩御された昭和天皇御神霊の鎮まりまさんことを御祈り申し上げて三十秒間の黙禱を捧げ、更に、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられたすべての祖先の御霊に対し三十秒間の黙禱を捧げた。

続いて主催者を代表して国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生が登壇され、合宿教室の主旨について、「友との付き合いが表面的な言葉の遣り取りだけで終わりがちな学園生活とは違つて、友と本当に心から親しみ合ひ、語り合ひ、そして自らを省みる中で、体験としての喜び楽しみが生まれる合宿にしたいと念じてをります。私達の人生は、結局人と人との付き合い合ひが常に基礎であり、そのためには心置きなく話し合へる雰囲気を作らざるを得ない

第三十四回「合宿教室」日程表

8月5日(土) (第1日)	
6:30	
8:00	
9:00	
10:00	
11:00	
12:00	
1:00	
2:00	開 会 式 合宿趣旨説明
3:00	
4:00	班別自己紹介 『日本への回帰第24集』 班別輪読
5:00	
6:00	夕 入 散 食 浴 散 歩
7:00	
8:00	(合宿導入講義) 奈良崎修二先生
9:00	班 別 討 論
10:00	就 床

ればなりません。合宿の中では、体験としてこのことを学んで下さい。」と語られた。次いで参加学生を代表して西南学院大学四年西山博章が、「この合宿教室では疑問や迷いを率直に班友に語つて下さい。また、本合宿で自分を捉へて離さない言葉を見つけ、今後の生活や活動の指針として下さい。」と呼び掛け、開会式を終了した。

続くオリエンテーションでは、共済組合連合会浜の町病院医師の長澤一成合宿運営委員長が登壇され、合宿の班構成、運営体制についての説明をされた後、所感を述べられた。氏は、「豊かな心は経験を豊かにし、貧しい心は経験を貧しくする。人間は誰しも同じやうな経験をしながら日々の生活を送つてゐるが、その経験を深いものにするか、浅いものにするかといふのは、その出来事に出逢つた人の心次第である」と語られ、更に、「人生に対する心のありやうを整へてゆく修練の場が少なくなつてをります。本合宿では先人や先輩方が世の中の動きなどに対して、どのやうに敏感に心を働かせてきたかが話されることと思ひます。各大学、各職場の中で一人一人の立場は違ひますが、どのやうに心を働かせて人と付き合つてゆくのか、また、世の中の働きを見てゆくかは同じなのです。この合宿で、平素の生活の中では体験できない世界に触れて下さい。」と参加者に強く訴へられた。最後に、合宿全般の細部にわたる注意事項が、福岡県立玄洋高校教諭の矢永誠二指揮班長から伝達された。その後、直ちに参加者は各自に割り当てられた班室に入り、合宿参加の動機や日頃の生活ぶりなどを

含めた自己紹介を行ひ、昨年の合宿教室のレポートである「日本への回帰——第二十四集——」の輪読に入つた。

〈講義〉

合宿導入講義として、日産自動車（株）栃木工場生産課勤務の奈良崎修二氏が「現代のタブーの克服——自由闊達な学問のために——」と題して話をされた。先生は、今日多くの日本人がマスコミの言葉を一つのものさしとして物事を考へ、それで安心してしまつてゐる現代の風潮に対して疑問を投げかけられた。そして、我々がものさしによつて物事を考へてゐる事例として「日本は諸外国に対して犯罪的侵略戦争を起こした」といふ、いはゆる「東京裁判史観」を挙げられ、その史観が日本人の心の中に深く浸透してしまつてゐる現況を指摘された。その後、東京裁判史観の誤りを種々の資料を用ひて厳しく検証してゆかれた。最後に先生は、「ものさしを持つて歴史を見ることは止めてほしい」、「過去に生きた人々の心に思ひを寄せ、共感し合ひ、それを自分の心に問うてほしい。それが本当の学問ではないだらうか」と強く参加者に訴へられた。

〈班別討論〉

講義の後、全参加者は班室に戻り、最初の班別討論に入つた。この班別討論の時間は各講

義の後にほぼ毎回設けられてをり、「講師の訴へられたかつた事はどのやうな事か」、「どこに感銘を覚えたか」を中心にしてお互ひが心に湧き上がる思ひを率直に語り合はうと努めながら忌憚ない討論を進めてゆく時間である。しかし、初めは、既成の知識の応酬に終つたり、講義内容に対する反発から感情論に終始したりする事が多かつた。また自らが感じたことを思ふやうに言葉に出来ないもどかしさを感じながら、心を一つにして皆が語り合ふことの難しさを痛感した。そのやうな苦闘を通して、討論は回を重ねるごとに熱気を帯び、時には反発し合ひ、時には共感し合ひながら、班員相互の心の交流も深まり、一人一人が心を開いて語り合ふ喜びを見出して行つた。

第二日（八月六日）



合宿参加者は、毎朝六時半にスピーカーより流れる清々しい「日本唱歌」のレコード音楽によつて目覚める。洗顔と清掃を急いで済ませた全参加者は、眉山を望む広場に集合し、「朝の集ひ」に臨む。国歌斉唱、国旗掲揚、ラジオ体操、連絡事項の伝達等が行はれ、今日一日を過す心の準備が整へられて行つた。

〈講義〉

二日目は、神奈川県立深沢高校教諭・国民文化研究会理事の国武忠彦先生が「古事記」と高校『日本史』といふ題で御話をされた。先生はまづ、天皇について「戦前は教へられ過ぎ、戦後は教へられなさ過ぎたのではないでせうか。教科書でも天皇に関することは出来るだけ触れないやうにしてゐます。私達は天皇を真に国民統合の象徴と受け止めてゐるのでせうか」と語りかけられた。そして先生が高校で日本史を教へられる時に天皇について触れられる所を、実際に教科書の記述を紹介されながら話してゆかれた。「古事記」から伊耶那岐の命が伊耶那美の命を追つて黄泉の国へ行かれるお話や、須佐之男命、大国主の物語を身振り手振りや時には声色まで交へてお話しされる先生を見てみると、我々は眼前に神々の御姿が浮かんでくるやうな思ひで、時には爆笑しながら御話をお伺ひした。最後に、「日本人が神々の物語

に触れて感じてきた喜びを、我々もまた感じることが出来るのです。私にとつて天皇を考へるヒントは『古事記』でした。日本史の中でこれを教へずに何を教へるといふのですか」と語られて御講義を終へられた。

〈講義〉

午後からは、九州女子大学教授・国民文化研究会常務理事の山田輝彦先生が、「昭和の精神——『悲劇』の時代——」と題して御講義。先生は御登壇されると、「私達は先帝の崩御により昭和といふ時代が完結する滅多にない劇的な瞬間に立ち合つたのです。」と語られ、さらに今上天皇の御誄を読みあげられ、先帝陛下の崩御をお偲びになられた。そして夏目漱石の『ころ』の文章を引用され、「我々にとつて昭和の精神とは一体何であつたのか」と、我々に重大な問いを投げ掛けられた。先生が読み上げられた二通の手紙（数へ九十歳の田中三代子さんが靖国神社にお祀りされてゐる二人の御子息に母としての気持ちをやつと語つてをられる手紙と、終戦時に陛下をお守り申し上げようと伊藤たかさんがマッカーサーに宛てた直訴状）には、参加者一同、肅然として聞き入つた。

〈講義〉

夕食後、九州造形短期大学教授・国民文化研究会副理事長の小柳陽太郎先生が「明治の精神」と題して御講義をされた。先生は、現代に生きる私達の眼には国の姿が非常に見えにく

くなつてゐる現状を指摘された。そして、福島安正陸軍中佐、郡司成忠海軍中尉、女流文学者樋口一葉の三人の明治人のはつらつとした生き様を示された。先生は三人の遺した文章を丹念に辿られながら、各々の思ひを偲んでゆかれたが、特に、福島中佐が大陸横断途中で倒れた愛馬に慈しみの気持ちを寄せた文章と、郡司大尉が捨子古丹で凍死した九名の隊員に対する厳粛な慰霊の気持ちを綴った文章からは、一同深い感銘を受けた。

第三日（八月七日）

〈講義〉

早朝八時より、筑波大学教授・文芸評論家の村松剛先生が、「天皇と日本国家」と題して御講義をされた。先生はまづ、「日本人が日本人たる自己意識をもつてゐないといけない」と我々に訴へかけられた。そして、天皇について、元号について、日本語について、神道について、日本の文化と歴史について、と広範なテーマを巡つて、我々が日本人として考へなければならぬ問題を懇切丁寧にお話下さつた。先生の博学な知識に裏打ちされた説得力のあるお話しは大変印象に残つた。

〈短歌創作導入講義・レクレーション〉

福岡県立山田高校教諭の與島誠央先生が「短歌創作の手引き」と題して御講義をされた。先生は短歌創作の意義と方法を、黒板等を活用されながら表情豊かにお話された。以前の合宿教室で「短歌を詠むことが心の修練になるのであれば、もつと詠んで美しい心になつてゆきたいと思ひます」と語つた女子学生の言葉を引用され、「美しいものは美しい心から生まれるといふことを私は和歌を通じて実感しました。」と述べられた言葉が心に残つた。

御講義の後、参加者はバスに分乗して、雲仙仁田峠へと出発した。空は晴れ渡り、絶好の散策日和となつた。バスの中では皆で唱歌等を歌ひながら仁田峠に到着。仁田峠の展望台からは、遠く有明海、天草灘を望むことができ、格別の眺めであつた。参加者は、山中の新鮮な空気を浴びながら、班友と語り



合ふ和やかな一時を過ごした。ホテル到着後、参加者全員は短歌創作に入り、夕食前に数首の短歌を提出した。

〈体験を語る〉

最初に、日本真空技術(株)に勤務されてゐる北浜道氏（九州大学・工・昭和六十年卒）が、「——沈黙するところから言葉が生まれてくる——」と題してお話された。氏は、「感動すると言葉を失なはざるを得ない。さういふ実感の中から本当の言葉が生まれてくる」と述べられ、実際に沈黙せざるを得ない経験を味はれた文章を紹介された。

続いて、北九州市立八幡病院・診療放射線技師の森田仁士氏（九州大学医療技術短期大学部・昭和五十二年卒）が登壇された。氏は、癌に侵されてゐる患者さんが、その病気にも関はず、氏の心中を推し量つて病気の事には触れずに過ぎたといふ話を涙ながらに語られた。最後に紹介された、癌に罹られた折の心情をうたはれた廣瀬誠先生の短歌には心打られた。

〈慰霊祭〉

慰霊祭に先立ち、福岡県立門司北高校教諭の濱田清人氏によつて慰霊祭の説明が行はれた。

その後、屋外の広場に設置された祭壇の前に全員が整列した。篝火が焚かれ、夜のしじまの厳やかな雰囲気の中で慰霊祭は始められた。まづ、故三井甲之先生の

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさね
まもるやまとしまねを

の和歌を長内俊平先生が二度朗詠され、続いて関正臣先生の御発声で警蹕の響く中、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊を最敬礼でお迎へする降神の儀が行はれた。献饌の後、参加者一同を代表して、宝辺正久先生が祭文を奏上され、明治天皇、昭和天皇の御製を小田村四郎先生が拝誦された。続いて玉串奉奠の後、全員で「海ゆかば」を斉唱、撤饌の後、最敬礼のもと御霊



をお送り申し上げ、慰霊祭は滞りなく終了した。

左に慰霊祭における祭文と拝誦された御製を記しておく。

〈祭文〉

今年平成元年はも先の帝昭和天皇には類ひ稀なる困難に当らせ給ひ六十四年の長き御治世を遂げさせ給ひて神上りましましけるを、み民われら悲しみ喪に服しつつも、ここに第三十四回全国学生青年合宿教室を九州島原の地に開催し今宵眉山の麓波も静けきこの海の辺の広庭を齋庭と定めまつりて、とこしへにみ国守ります遠つ御祖達をはじめみ国のためにいのちを捧げ給ひてわれらが祖国日本を守りまししもろものはらから達のみたまを招ぎまつりてみ魂祭りを仕へまつらむとす。われらここに日本全国より集ひ来り、過ぎし昭和激動のさ中、昭和天皇が御一身をなげうち給ふ尊き大御心もてわが国柄を守り給ひし御聖徳を偲びまつり、祖国の古き歴史を、古事記に、また歴代天皇の大御歌に、また明治先人の残されし至誠瀾達の業績に学びては心開きてかたみに語り合ひわれらが日本の国の行くべき道をさだかに見定めんと、心あはせてこの集ひを過ぎし来れるさまを、畏かれどもいましみこと達みそなはし給ひみ国のゆくてをとこしへに守らせ給へと参加者一同に代り宝辺正久謹み敬ひ恐み恐みも白す

(明治天皇御製)

月前薄

はるばると風のゆくへの見ゆるかなすすきが原の秋の夜の月

夢

たらちねの親のみまへにありとみし夢のをしくも覚めにけるかな

花

あかず見し山べのさくら春の日のくれてのちもおもかげに見ゆ

をりにふれて

ひとむらと思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけむ

(昭和天皇御製)

雲仙嶽にて

高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり

雲仙嶽・仁田峠

大阿蘇は波路はるかにあらはれて山なみうすく霞たなびく

引揚者に対して

国民とともに心をいたためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ

折にふれて

風さむき霜夜の月をみてぞ思ふかへらぬ人のいかにあるかと

七十歳になりて

ななそぢを迎へたりけるこの朝も祈るはただに国のたひらぎ

よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆき今はななそぢ

沖繩

思はざる病となりぬ沖繩をたづねて果さむつとめありしを

那須の秋の庭

あかげらの叩く音する朝まだき音たえてさびしうつりしならむ

第四日（八月八日）

〈講義〉

合宿四日目は、国民文化研究会理事長・元亜細亜大学教授の小田村寅二郎先生の「これか

らの日本と日本人について」と題する御講義が始まった。先生は「即位の礼」と「大嘗祭」について、これらの儀式が一世一代の御代替りに行はれる伝統的なものであることなど二つの儀式の持つ重要な意義や過程を懇切に説明された。先生は、国際化の時代を迎へた我々に対して、「国家間の関係において大切なのは独立不羈の姿勢であり、国民が独立不羈の精神を持つためには各人が学問により精神を鍛へねばならない」と強く訴へられた。

〈輪読導入講義〉

小田村先生の御講義に続いて、共済組合浜の町病院内科医師の長澤一成先生が、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」（黒上正一郎著）輪読の導として」と題して輪読導入講義をされた。先生は、輪読書の著者である黒上正一郎先生の御生涯と学問に対する御姿勢を偲んでゆかれた。また輪読の意義について御自身の体験から「読み方の間違ひを正し合ふなどするうちに一つの対象に皆の気持ちが向ひ、心が輪になつてつながつてゆく」と語られた。

〈班別輪読〉

輪読導入講義の後、合宿参加者は各々の班室に戻り、班別輪読を行つた。テキストは『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』である。最初に一人一人順番に本文を声に出して読み、

その後、一文毎にそこに込められた黒上先生の思ひに迫りながらじつくりと読み味はつてゆく。難解で慣れない文章に途惑いながらも、皆で力を合はせて読み進んでゆくうちに、一人で読んだ折には読み過ぎしてゐた言葉に深い意味が込められてゐることに気付く。さういふ体験をくり返しながら、皆、輪読といふ形式によつて文章を深く読み味はつてゆく喜びに触れていつた。

〈講義〉

午後からは、国民文化研究会理事・事務局長の長内俊平先生が、「若き友らへ語りかける言葉——知識と学問——」と題して御講義をされた。先生は、「知識」を持つてゐることで安心してしまつてゐる現代の風潮に対して、「知識」と「知恵」は違ふことを具体的に語つてゆかれた。先生は最後に、「学問をしてゆく道統において、生死を共にする友がどんなに大事なものか知つてもらひたい」と強く訴へられて講義を終へられたが、貴重な体験談を交へながら独特な口調で我々に話しかけられる先生の御姿は、一同の胸に深く刻みこまれた。

〈短歌全体批評・班別相互批評〉

前日提出した短歌は、先生方や事務局の方々の徹夜の作業を経て、一冊の部厚い歌稿に纏



「桜井の別れ」を横笛で吹かれる白井先生

められ、我々の手に渡された。そして、出来上つたばかりの歌稿を手に九州大学医学部循環器内科医師の小柳左門先生が、創作短歌全体批評を行はれた。先生は歌稿の中から学生の歌を一語一語丁寧に直してゆかれた。先生はユーモアも交へながら添削・批評を進めてゆかれ、時には爆笑も起つて、緊張した雰囲気もなごむ楽しい一時となつた。

この後、それぞれの班室に戻り、班員一人一人の歌を全員でよみ味はひながら相互批評を行つていった。この日は夜が更けるまで相互批評を行ふ班も多くあり、各々が胸内を開いた広やかな共感の世界が繰りひろげられていった。

〈夜の集ひ〉

いよいよ最後の夜を迎へ、厳しい研鑽を積み重ねて来た参加者一同は、大広間に繰りひろげられた夜

の宴にしばし疲れも忘れ、和やかな雰囲気は味はつた。班毎、大学毎、地区毎の様々なグループが次々と登場し、歌あり、寸劇ありで、笑ひと拍手の連続であつた。中でも白井傳伝先生が横笛で演奏された「青葉繁れる」と「四条畷」の曲は一同に新鮮な感銘を与へた。清らかな横笛の音色は今も耳に残つてゐる。

第五日（八月九日）

〈講話〉

合宿教室最終日の朝は、亜細亜大学名誉教授・国民文化研究会理事の夜久正雄先生が、「昭和天皇の最後のお歌」と題して講話をされた。先生は、昭和天皇が重い病床の中にあられても御歌をお詠みになり、発表されようとされたことを感動をもつてお話しになり、終戦時の昭和天皇の御心を御製から偲んでゆかれ、「陛下の御心が国民に伝はらぬやう妨げる動きがあるが、耳をそばに立てて天皇様のお声を聴くやう努力して欲しい」と語りかけられた。そして最後に、昭和天皇の御製七首を参加者全員で声を合はせて拝誦し、御講話を終へられた。

〈全体感想発表・運営委員所感発表〉

閉会式も間近に迫り、合宿教室を通しての各々の
思ひを参加者全員の前で自由に披瀝し合ふ全体感想
自由発表の時間となつた。各参加者が次々に挙手し
て登壇し、ある者は潑刺とした口調で、またある者
は涙ながらに、この四泊五日で体験した思ひと込み
上げてくる感動を語つていつた。寝食を共にした友
達が語る真摯な言葉は、参加者全員に大きな感動を
与えた。

全体感想自由発表の後、運営委員を代表して、福
岡県立筑紫丘高校教諭の酒村聰一郎氏が所感を述べ
られた。氏は、この合宿に寄せられた加納祐五先生
（元日特金属工業(株)常務）の御手紙を紹介され、「先
生は『拙き身を痛感すればこそ、人生の真実を求め
ようとしてきた』と書かれてゐます。私達は、この
合宿で班別討論や短歌相互批評を通じて友の心に迫
つてゆこうと努めました。友の言葉に耳を傾け、そ



宝辺副理事長による閉会の挨拶

の思ひを受け止めようと必死に努力したのです」と語られた。そして「ここに集まつた学生と今後も共に合宿で学んだ学問を続けてゆきませう」と呼びかけられて降壇された。

〈閉会式〉

全参加者が心を尽して當んできた合宿教室も、遂に閉会式を迎へた。全員で力強く国歌を二度斉唱した後、参加学生を代表して中央大学四年三林浩行君が、「僕はこの合宿教室で学んだ言葉と、四泊五日寢食をともにした得難い友達のことを折に触れて思ひ返してゆきたいと思ひます」と挨拶した。続いて主催者を代表して、国民文化研究会副理事長・(株)宝辺商店代表取締役の宝辺正久先生が、「この五日間、一所懸命に先生方の御講義を聴き、感動したことを班友と共に語り合ふことにより、二百人の参加者の心が一つになりました。私達は先生方の様々な御講義を通して日本の文化を学んだのです。その中でも聖徳太子の御慈しみの御心が歴代の天皇様に受け継がれ、国民もその御心を守らうとしてきたことが大切なのです」と語られ、閉会の挨拶を終へられた。その後全員で「進めこの道」を斉唱し、千葉大学二年中富仁君の力強い閉会宣言を以つて、四泊五日にわたる合宿教室はその全日程を終了した。

閉会后、ロビーで、あるいは班室で、お互ひに別れを惜む姿が見うけられた。新しき友情の芽生えた友らは、来年の再会を約して、それぞれ島原の地を後にしたのだつた。

合
宿
詠
草



合宿地からの眺望

〈学生・社会人〉

新たなる友を求めてはるばると島原の地に我ら集へり

○

亜細亜大学 法一 佐塚 謙

国武先生の御講義を聴きて

熊本大学 法三 平田 裕英

師の君の語りたまへば須佐之男も大國主もよみがへりたり
師の君のいと楽しげに語りたまふ姿し見れば吾も楽しき

早稲田大学 文五 本多 達雄

小柳陽太郎先生の御講義をききて

はるかなる明治に生きし先達の文読むみ声の心に響きぬ
師の君の思ひ込められしみ声聞けば先達の姿うつつに浮かび来

日本大学 文理四 井坂 信義

山田先生の御講義

戦ひにたふれし息子忘れずて四十年余よそとせあまり生き来し母はも

九州女子大学 文二 松尾 教子

同じく

ほとばしる思ひをのぶる師の君の言の葉あつく胸にしみいる
靖国に今も眠れる我が子らを思ひてやまぬ心は哀し

日本青年協議会 坂元 義久

いかるがの太子の御歌をうたはるる師の声心にしみ入りてきぬ
祖先の血われらが内にも流ると語らる御声の胸に迫りて

亜細亜大学 経二 佐藤順一郎

與島先輩の導入講義の際

我が歌の詠み上げらるるを聞きし時去年の思ひの蘇り来る
我もまた先輩のやうににこにこと笑顔たやさず生きてゆきたし

成城短期大学 教養一 板東 恵子

夜久先生御講義

天皇の御言葉御歌聞きゆかむ心無にして耳そばだてて

○

班別討論にて

九州大学 教育一 高倉 庸輔

討論を楽しみに待つ今の我は心も素直になりゆく覚ゆ

防衛大学国際関係論二 石巻 義康

同じく

胸に抱く苦しさに耐へず我が思ひつたなき言葉で友らに明かす
み友らの素直なる心にふれあひて疑問の少しはれゆくおぼゆ

福岡県立筑紫丘高校教諭 高岡 竜司

合同班別討論にて

我が思ひを師らは受けとめあたたかき御言葉をもてみちびき給へり

早稲田大学社会科一 村瀬 廣司

班別輪読にて

言の葉のひとつひとつに込められし思ひを読みとることぞ難し

○

九州女子大学 文二 坂元 麻子

灯を消して枕ならべて語り合ふ班の友らのはなしつきず

昭和天皇の御製碑を仰ぎて

ご生前の陛下の御顔偲ばれぬ御歌刻みし碑を見上ぐれば

九州大学 法二 花田 芳夫
徳島大学 総合三 倉本 聖也

木々の間をみ友らと共に登りゆき先つ帝の御製拝せり

天皇のみやまきりしま詠み給ふ御歌は巖に刻まれてあり

早稲田大学 文二 大島 伸一

碑いしづみに刻まれし御製朗々と友らと共に声出して詠む

亜細亜大学 国際関係一 吉井 一聰

山の上ゆ有明海をみおろせば私の胸内の澄みわたりゆく

中央大学 経三 福田 剣充

すがすがしき風にあたりて友どちと語るひと時心地良きかな

○

早稲田大学 法四 新屋 信隆

短歌相互批評

班員の一人一人が素直にもおのれの思ひを語りけるかな

友どちの語らん姿目にすればおのが心もはればれとする

○

獨協大学 法四 木下 裕司

白井傳先生の横笛を聞きて

清らかな対馬の人の笛の音をしみじみ聴けば涙流るる

たぐひなき誠つくせし楠公の心伝ふるああ笛の音よ

岐阜県立五本巣高校教諭 野原 清嗣

ますらをの御魂に語りかくるがに笛の音清くひびきわたれり

○

鹿児島大学 農三 原 一文

全体感想自由発表の折に

言の葉をつまらせ語る吾が友の姿しみれば感きはまりぬ

次々に吾が友どちの壇上にすすみて語ることぞうれしき

早稲田大学社会科学四 村主 真人

たどたどしき言葉なれども壇上にたちたる友の大きく見ゆるも

壇上で言葉つまりし友どちに心の内で頑張れと呼びぬ

壇上ゆかへりきませる友どちのはればれ笑みのこぼるるが見ゆ
老ひたるも若き学徒もへだてなくいやつぎつぎに壇上に立つ

○

東北女子大学 家政二 浦田 博子
心おきなく語りあひたる友を得て忘ることなしこのうれしさは

西南学院大学 文四 戸田 淑子
五日間の交はりなりし友らなれど離れがたしと思はるるかな

〈見学参加者〉

—第三十四回全国学生青年合宿教室之賦—

くにおふるわかきともらときみがよをかへしうたへばなみだわきくも
つきみさうしづかにゆるるあさのぬにむねあつくしてひのみはたあふぐ
まゆやまにくものながれてすがしかりひとひあけぬるつどひうれしも
さにづらふをとめのかみもゆるれつつはんのまなびのわすらえなくに

長崎県対馬 白井 傳

すめろぎのみうたのいしぶみおとなへばやまあぢさゐのしろばなかほる

〈大学教官有志協議会・国民文化研究会〉

国武忠彦君の講義をききて

国民文化研究会理事長 小田村 寅二郎

「ふるごとぶみ」の神話を子らに教へ来し君が教へのすばらしきかな
神々はうつつの人のごとくなり子らの心を喜ばしけむ

慰霊祭五首他一首

亜細亜大学名誉教授 夜久 正雄

三日月のかけあらはれぬみまつりのゆにはの垣の森かげの上に
吹きわたる夜風すずしくしでゆれてつどへるゆ庭しづかなりけり
ケイヒツの声低く長く消えゆきてみたまはいました天降ります
ケイヒツの声の消えゆくたまゆらをなつかしみたま天にかへりぬ
みまつりを終へてあふげば雲きれて夜ぞらさやかに星かげも見ゆ
昭和天皇の最後のお歌をみな人とともにしよめば涙湧きくも

（株）宝辺商店代表取締役 宝辺 正久

閉会式の前

慰霊祭のゆには彼処と窓ゆ見れば日のみ旗風にはためきてをり
みまつりの庭つくらむと暑き日をつとめし友らをかへりみるかな
天降りますみたまに祈りささげたる小夜爆ぜたらし篝火を思ふ
心つくし聞きたまた語る合宿の友らのまみのすがしかりけり
君と民と一つ心に守りこしみ国の道ぞしぬびつつ来し
かすみわたる有明の海見てあれど合宿終る時迫りけり

九州造形短期大学教授 小柳陽太郎

開会式にて

君が代をうたへどかなし先のみかどの大みすがたのたゞうかびきて
福岡の地に迎へまつりしみすがたのよみがへりきぬあつき思ひに
みひつぎを送りまつりし二重橋のかなし思ひ出いまのうつつに
次々にわきくるおもひ胸にあふれ歌ひつゝ、ゆけばまなうち熱き

国民文化研究会事務局長 長内 俊平

おのもおのも心つくして営めるつどひも無事に終りけるかな

朝あしたとくおきてつどひの準備する若き友らの涙ぐましも
心こめつくりし齋庭ゆにはにいでたりし三日月のかけは忘らえなくに
壇上に立ちて礼言ふ若きらを見ればこの集ひ続けざらめや

講義のときに

わがひと生よそがよろこびも悲しみもなべてこもれり昭和てふ御代

氷雨ふる大み葬はよりの日の嘆きいまもうづけりわが胸内に

みいくさに死なせし子らをひた恋ふる嫗おうなの文よ泣かざらめやも

先逝きし友らのねがひとこしへに生きよと祈り語り終へにき

病みがちの身をかばひつゝみそとせに余る四とせのかくて過ぎにき

白井傳先生、合宿に参加し給ふ

海路はるか対馬のくにゆまゐられし大人うしのみ心の有難きかな

いや高きしらべのみうた数さはに詠まし給ひぬ湧きいづること

水茎のあとうるはしき数々のみふみにこもる君がいのちは

桜井の別れをしのお横笛の音色しづかに君ふきませり

九州女子大学教授 山田 輝彦

日本銀行監事 小田村四郎

すこやかにましませ茂る醜草を刈るべきつとめいよよ重ければ

尚綱学園常務理事・事務局長 徳永 正巳

夏草の生ひ繁りたる路の辺に聳え立つ見ゆ御製みうたいしづみ 碑

夏草を刈り払ひつゝ、岩の面にしるけく仰ぐ大御歌かな

四十年よそとせの昔此地こゝに行幸みゆきましてみ歌詠み給ひし大君をおぼふ
いまはなき大君の御姿みうたいしづみ偲びつづ去りがてに仰ぐ御製みうたいしづみ 碑

日商岩井(株)大阪エネルギー第一部部長 澤部 壽孫

「全体感想自由発表」を聞きて

つぎつぎに若き友らが登壇し語るを聞けば涙あふれぬ

素直なる心になれしよろこびを友は語りぬ目を輝かせ

いかならむさやりありとも大君のみ心しぬび生きつらぬかん

来む夏の合宿に向け勧誘に力尽くさむ友らとともに

神奈川県立湘南高校定時制教諭兼亜細亜大学講師 山内 健生

「お食事を一緒にしませう」と我にいふ班友ともの言葉のありがたきかな

なかなかその時々ときにふさはしき言の葉出で来ぬ我のもどかし

つたなかるわが言葉にも若きらのひた聞きをれば胸痛くなる

若きらの輝くまなこの美しく己が心の洗はるここちす

さちよあれかばかりひたに学びたるすぐなる心の若きともらに

九州大学医学部循環器内科講師 小柳 左門

国武先生の御講義を拝聴して

国の始めの歴史をたどり淡々と語りたまへる話し楽しも

神々のうつつしくそこにいますごとと声こゑ音をまねて語りたまへり

祖先みおやらを深く愛でますお心のおのづあふるるやさしき御言葉

「大和は国のまほろば」と三度四度詠みたまふ御顔に喜びあふる

恋ひ慕ふ大和を前に足なづみたふりし皇子みこの命かなしも

美しくかなしき国のふるごとを伝へむ君の願ひ思ひつ

熊本県立第二高校教諭 白浜 裕

福島中佐単騎シベリア横断

ますらをの雄心おこしシベリアの荒野を単騎行きし中佐は

むら雲のおほふごとくに歯牙をとぎ北夷は御国に迫りつつあり

極寒の野道行くうちひづめ割れ愛馬はつひに臥して動かず

病えし愛馬さすりてなぐさむる中佐の眼まなこに涙あふるる

雄心の内に秘めぬし武士ものよのまことの心あらはれにけり

山口県立高森高校教諭 宝辺矢太郎

夜久正雄先生の御講義をお聴きして

あかげらにみこころたくしてよみまししみうたいくたびもよみまつるかも

「看護婦らよくわれをみとりぬ」とのらしまししみうたにたみら泣かざらめやも
くにたみにみうたのこして神あがりましますもへば胸のせきあぐ

福岡県立山田高校教諭 與島 誠央

昼飯を食べるさなかも壇上に登るを思へば体ふるへる

班友に楽しみにしてますと励まされいよよ体のわななけるかも

ただいまより導入講義に入りますとふ友の声聞き動悸高鳴る

壇上ゆ友らみつめて語りゆけばおのづとこころ落ち着きてゆく

うたごころ友らのこころに湧けかすと願ひをこめてひたかたりゆく

日産自動車(株)栃木工場第一工務部生産課 奈良崎修二

つとめをば果たし得るかと案じつゝともらの集ふ合宿へ向ふ

久しぶりに来たりてみればみともらのかはらぬゑまひに会ふがうれしも

久々に会ひしともらとくさぐさのことども語りぬ夜の更くるまで

(酒村聰一郎選)

先帝、昭和天皇の御崩御からはや一年が過ぎ、ふたたび春が巡つて来た。この間、国政の上では醜聞の暴き合ひや党利党略の角逐、果ては相次ぐ首相の交替といふ卑俗な政争が頻発した。マスコミもさうした政変劇を煽るかの如く報道を競ひ、国論は四分五裂したまま推移してゆくかに見えもした。けれども世情の喧噪の只中にありながらも、私たちの心の奥底にはゆるぎない歴史的体験が息づいて来たことも確乎たる事実である。それは先帝を失つた深い悲しみと、その悲しみにつつまれながらも新帝陛下を迎へ得た安らぎとを交々に味はふといふ紛れもない心情体験であつた。いはば日本民族の血脈につながつてゐる自分に気づかされる体験を共有し合つて私たちは平成の御代を歩み始めたと云へよう。天皇を戴く我が国がらに思ひを寄せたこの国民的体験は、期せずして青年学生の間にも日本人としての生き方を求める思索を生み出さずにはおかなかつた。かくて全国の心ある青年学生を対象に第三十四回合宿教室は島原を舞台に開かれたのであつた。

なほ本書の扉頁には、本年十一月、新帝陛下が御即位の式典をお舉げになるのに因んで、昭和天皇の御即位の大典が行はれた京都御所の写真を掲げることとした。紫宸殿―清涼殿―小御所―御学問所―御常御殿―御涼所―御茶室「聴雪」と、南から北に配置された建物の順序に従つて掲載してゐるので、そのこともお含みの上御覧いただけば幸である。これらの写真については毎日グラフ編集長田中薫氏、写真家岡本茂男氏の御好意により、すべて毎日グラフ別冊「京都御所」(昭和五十九年刊)から転載させていただいた。紙面をかりて両氏の御芳情に深く謝意を表したい。

さて、今年開催される合宿教室の大綱はすでに決定してゐる。講師には高名な作曲家であり、かつ日本文化の核心を衝く提言を展開中の黛敏郎先生をお迎へすることとなつた。場所は熊本県「阿蘇の司・ピラパークホテル」、期間は八月五日(日)から八月九日(木)までの四泊五日の日程である。雄大な阿蘇五岳を仰ぎながら「学問と人生」を語り合ふ交流の世界がはやくも待ち望まれる。全国各地からの青年学生諸氏の御参加を心から願ひつつ編集の筆を擱く。

平成二年三月

編集委員 占部 賢志

—— 日本への回帰 ——

(第25集)

平成二年三月二十日発行

定価 七〇〇円

〒 二六〇円

編者 大学教官有志協議会

社団法人 国民文化研究会

編集委員代表 小田村寅一郎

発行所 社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇一八柳瀬ビル

振替(東京)六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします

